文政六年癸未十二月二十九日御鉄炮奉行より御趣法方掛江、
文政七年甲申正月十一日御弓奉行、
文政七年甲申十一月二十八日御鉄炮奉行より御用人格御鑓奉行勤、同十年丁亥四月十一日御用人江離れ勤候様、
一文政七年甲申十二月二十九日御弓奉行より御用人江、
一文政八年乙酉五月十五日當番頭より御小姓與番頭、御用人兼務、
文政八年乙酉十一月十九日町奉行より表御用江、同九年丙戌十二月二十五日御側、
文政八年乙酉十一月二十九日御小姓與番頭より、御用人兼務、
文政八年乙酉九月十一日御鉄炮奉行より當番頭にて御用人勤、
文政十一年戊子五月十三日町奉行格より御趣法方掛り、
文政十年丁亥六月二十日御納戸奉行より御側、
文政十年丁亥八月十三日御鉄炮奉行より御勝手方、

窪田筑右衛門清名
今小番
上野六郎次篤實
後善兵衛
田中七右衛門守香
今小番
北條織部時教
今寄合
島津藤次郎久寶
一所黒木郷領主
梅田九左衛門明教
今小番
島津仁十郎久明
島津權五郎久命
後壬生
伊東新太夫祐覽
今小番
村橋昇久隆
新納四郎右衛門常善
今小番

御兵具奉行記

文禄元辰年ヨリ、高麗御渡海ノ比、
イ弓頭 木脇三左衛門 祐辰
イ大炊介
イ元和ノ頃御免、二渡次兵衛 重利
慶長荘内人之時分、元和年号マテ、面高主馬 俊『出水郷士面高先祖ニ而候』
長カ永谷場十郎兵衛 實純
イ鉄炮頭 児玉筑後 利昌
猿渡嘉左衛門 辰信
后備（前カ）
元和ヨリ寛永十四年之間、イ小野左京
イ寛永十五年比迄、平田藤七兵衛宗知
寛永十五年比迄、イ伊地知杢右衛門 重政
平田同、イ毛利肥前元親

有馬次右ヱ門 純
高城左京 重
白濱七助
三原七左衛門 重
東郷拾左衛門 重
肥後内膳
イ寛永十年比迄、高城主馬 重
上同、北条善左衛門時常
上同、土持平左衛門綱辰カ

イ寛永年号迄、伊地知四郎兵衛重賢

正保年号迄、壱岐主水

承應年号迄、宗知子平田藤右衛門宗利則

寛永十八年於江戸假役、川越新左ヱ門

寛永十九年より、平山七兵衛忠昭

寛永十八年より、東郷十左ヱ門

（ママ）慶長元子年八月より万治三年迄イ、二階堂城之介行

イ右同年八月ヨリ、平田監物宗乗

正保三年於江戸假役、吉田長四郎

慶安三刁イ元年冬於江戸年より、東郷藤兵衛重方

寛文元年御免、

イ正保年号マテ、児玉四郎兵衛利實

イ承応迄、東郷喜右衛門重

寛永十六年於江戸本田次郎兵衛假役、イ上同、三原傳左衛門重隆

正保四亥年二月二十五日より、明暦三年御免、長カ永谷場兵右衛門純正

寛永廿年於江戸假役、上同、有馬勘左ヱ門

寛文十一亥九月九日御免、慶安元年五月ヨリイニ、安元年五月ヨリイニ、北条次郎右衛門時貞

上同万治三年迄、米良隼見重人イ

（ハリ紙）「此間出付」九月廿九日ニ御役御免、出仕児玉四郎右ヱ門利重

承應元辰年より、万治元年御免、寛文元年十一年當、寛文十一年い九月九日御免、明暦三年ヨリ、四郎右ヱ門トモアリ、児玉新四郎利重

寛文元年當児玉氏ニ同、五代勝左衛門友兼カ

寛文元年ヨリ、明暦元年御免、川上拾左衛門乗

明暦元未年より、万治元年御免、同二年二月十八日ヨリ、丹生弥兵衛信詮

大山氏ニ同シ、万治元年迄、伊勢内記貞

万治元戊年より、寛文八年申九月九日御免、イ明暦三年酉五月於江戸、猿渡九郎左衛門武信

寛文二刁年より、本田与兵衛親

寛文三卯より、同十一年亥十月十七日御免、黒田嘉兵衛

有馬氏ニ同シ、新納仁左衛門

寛文五四月ヨリ、延宝四年辰十二月、是枝氏ニ同シ、死、入佐四郎左衛門景儀

寛文年号

上同、明暦元年弥兵衛丹生弥五郎

承應二巳年より、イ寛文二年ヨリ、海江田仲左衛門

明暦二申年十二月十日より寛文元年迄、大山六右衛門綱通

明暦三酉年より、寛文八年申九月廿九日御免、児玉四郎右衛門利重

寛文元丑年より、大島勘右衛門忠治

上同より、寛文十一年亥九月九日御免、土持伴三郎

寛文四辰年より、延宝三卯四月七日御免、有馬次右衛門純良

寛文五巳年より、同十一い十月十七日御免、是枝重左衛門

寛文六午年より、延宝二年刁九月十八日御免、阿多六郎兵衛忠成カ

鮫島右京

寛文八申九月九日より、同十三年丑二月廿三日御免、　平田民部左衛門宗門カ

寛文十年戌十一月廿七日より、　永谷場縫殿介純尭　后八十郎兵衛

寛文十一い四月廿四日より、延宝五巳二月十二日御免、　山崎藤兵衛

寛文十一年い十二月十九日より、　藤崎善左衛門

寛文十二子二月五日より、延宝三卯四月七日御免、　川上左京

同十二年子十二月十六日より、天和二戌十二月廿四日御免、　湯地治部左衛門

同十三丑正月元日より、延宝三卯四月七日御免、　市來惣兵衛

延宝二刁九月廿一日より、　種子嶋七右衛門時春

同二刁十二月十三日より、同五巳二月八日御免、　國分七郎兵衛

同三卯四月十四日より、天和元酉十二月八日御免、　谷山孫右衛門

延宝三卯四月十五日ヨリ、延宝六午九月御免、　大島清太夫

同三卯四月十五日ヨリ、同六卯九月御免、　土持彦右衛門

同五巳二月七日ヨリ、同七未四月七日御免、　町田孫兵衛

同五巳二月七日ヨリ、同七未四月七日御免、　伊地知内蔵之丞　重傳

天和三年亥九月十四日御役被仰付、元禄十二年卯十二月御免、　伊地知李右衛門　重倫

御文書奉行御記録奉行

義岡宮内太輔久嘉

鮫島次郎左衛門宗當

河野長右衛門通顕

伊地知志賀重昶　后権左ヱ門　入道増也

平田清右衛門純正

純正御記録奉行被仰付御記録致編集候ニ付、自是御記録奉行号相始ル、

御納戸奉行ヨリ兼務、　大田小平次久知

自寛文十年貞享四丁卯七月四日迄、猿渡喜右ヱ門・平山勘兵衛御文書書役被仰付、六兵衛相合御文書見合被相勤候處、善右衛門儀者別御奉行被仰付、伊地知少八郎・勘兵衛相役被仰付候、善右衛門・勘兵衛者本役ニ而無之故不書載之候、（喜カ）　河野六兵衛通古

延宝五年御文書見合相済、同八年御記録所相詰見習被仰付、其後河野六兵衛同役被仰付、元禄九年子九月三日依願御役御免、同十四年文書改トシテ徳之島江被遣、翌十五年於島病死、　伊地知助右衛門重張　初少八郎　又重英

貞享三年丙寅正月ヨリ、享保三戌九月廿七日御役内病死、　田中五右衛門國明

元禄四年未二月六日（二カ）御記録所見習、同十四年巳十一月廿一日本役、正徳三年巳八月十三日御役御免、年数廿三年、（七共）

右宗年同日見習被仰付、享保六年丑四月十五日御使番轉役、年数三十壱年、

寶永五年子七月廿二日見習、正徳元年卯十一月晦日本役、寶暦五年亥十月廿六日依願御役御免、年数四十八年、

正徳三年巳正月十一日見習、享保元年子（ママ）十月七日本役、元文四年未正月十九日於江戸死去、年数廿七年、

正徳五年未正月廿三日見習、享保六年丑正月廿五日本役、寛延三年午十月十一日訳有御役御免、年数参拾六年、

享保二年酉十月廿八日見習、同九年辰三月朔日御納戸奉行轉役、

享保九年辰三月（ママ）ヨリ、同十六年亥五月七日宗信公御抱守被仰付候、

享保廿年卯七月稽古、元文三年午十月十二日本役、寛保元年酉十月廿三日於江戸病死、年数七年、

享保十三年申十月廿八日稽古、元文二年（寛保元酉ナリ）巳十二月廿一日添役、延享五年辰正月十一日本役、明和元年申十二月五日病死、

元文三年午十月十二日稽古、同六年酉十二月廿一日添役、寶歴五年亥正月十一日（暦）

市来源右衛門宗年（家カ）
後早左衛門親意
入道号虚白

肥後仁右衛門盛香
後藤之丞基儔

川上平右衛門久儔
後親史（央カ）　隠居号獨樂

相良覺兵衛長香

町田權兵衛俊懿
後仲右衛門俊雄

黒岡六十郎季明
初赤松　後島津十太右ヱ門

本城朝之丞輝昌

兒玉宗四郎利張
後主左衛門利容

安藤左平次茂真

吉田用右衛門清純

本役、明和四年亥八月九日御使番轉役、勤方本ノ通、年数十八年、

寛保三年亥六月二日稽古、寛延二年巳六月七日添役、寶歴六年子八月廿八日本役、安永三年午正月十一日御使番、勤方本之通、同八年亥十月朔日死、年数三十二年、御記録方勤、

寶暦十三年未正月十一日於江戸本役、明和五年子九月廿三日病死、寛延二巳八月十六日稽古、同四未六月七日添役、宝暦九卯八月十八日添役、本之侭、

宝暦七丑正月十一日稽古、同年七月廿八日添役、同十三年未八月十九日本役、安永二巳三月廿二日御使番、勤方本之通、天明二寅七月廿八日於江戸御側役、聖堂並御記録方掛被仰付候、天明四辰七月於江戸死、

宝暦九卯正月十五日稽古、同十二年四月十五日添役、明和六巳（丑）十一日朔日本役、安永三年午四月三日御役番、勤方本之通、同八亥正月二日島渡海ニ付依願御免、天明元丑六月十三日帰役、同八月廿一日死去、

宝暦十二午正月十一日稽古、明和六丑十一月十五日添役、安永三午正月十一日本役、馬越地頭、御役内死去、

宝暦十四申七月四日稽古、（明和カ）八卯九月廿八日添役、安永三午正月十一日本役、同八年亥十月於江戸病死、

宝暦十四申二月十一日稽古、員良同日添役、安永九年子正月十一日本役、

本田新右衛門親方
初七右衛門親圓　親房

山田喜三右衛門有雄

兒玉祝人實門
初早之丞

郡山次郎左衛門遜志
初員中

川上平右衛門親敷
初大六

郡山主右衛門員良

東郷淺之丞實美
初次太夫實包

明和二酉十二月十五日稽古、同九辰八月廿二日添役、安永九丑正月十一日本役、天明五年巳病死、（マヽ）

兒玉早之丞實識
初主左衛門

明和四亥十一月十五日稽古、安永四未十一月廿八日添役、天明元丑六月十三日本役、天明七未、

本田文蔵親礼
後休兵衛

黒田嘉右衛門清躬

篠原善兵衛

本田孫九郎親孚

平山五郎右衛門武毅

平田貞太郎

御記録方添役並稽古 天明三卯相替候、

元禄十四巳十一月廿七日見習、同十七申三月廿六日江戸（江）御使ニ而被召立、寶永元申七月廿九日於江戸病死、

河野郷左衛門通朗

元禄十七申正月十日ヨリ、寶永三戌三月廿日依病御断、

川上平八久峯
後五兵衛親武

享保九辰六月廿八日表御小姓・御記録方稽古、同十一午十月十一日死、

市来新五左衛門政商

享保十一午十二月四日ヨリ、同十二未七月十九日病死、

相良彦左衛門長意

日御記録方稽古見習与被

同十四酉五月三日ヨリ、元文二巳正月十日大島渡海ニ付御免、同四未十一月朔日帰役、同六酉十二月廿一日添役、六人賦被下、諸奉行格ニテ中通被仰付、寛延二巳四月十九日死、

日高甚兵衛為常

享保十三申正月十一日ヨリ、同十四酉閏九月十七日中神家為養子、同十五戌九月十六日中神新之丞ト改名、同二十卯四月廿五日死、

大熊左源次
後改中神新之丞長興

寛保三亥六月二日ヨリ、寛延二巳二月二日御記録奉行町田仲右衛門ト口論、同三午十月十一日御役御免、

志賀善蔵親友

延享五辰正月十一日添役、寛延四未閏六月七日依願御役御免、

藥丸新蔵兼雄

寛延四未十月廿三日御側御小姓ニ而御記録方稽古、宝暦三酉三月八日依願稽古ハ御免被成、勤方此内之通、

伊集院四郎兼風
後俊興

兼風同日稽古、宝暦五亥二月六日添役、同六子七月九日於江戸死去、

若松仁左衛門長救
後渋谷仁左衛門貫儔

宝暦六子八月十八日ヨリ稽古、同八寅六月廿二日病死、

篠崎八右衛門真純

真純同日ヨリ稽古、同八寅八月十五日御役御免、

中神織右衛門長賡（本ノマヽ）

宝暦八寅十月廿一日御側御小姓ニ而稽古被仰付、同十一巳十二月九日依病御記録方稽古ハ御免被成候、

入佐助八兼侶
後一三二

兼侶同日ヨリ稽古、同十三未三月廿二日病死、

川上五後右衛門親頌

宝暦十二午正月十一日稽古、同十四申二月十一日添役、明和八卯四月朔日死、　市来瀬兵衛政公

明和二酉十二月十五日稽古、同六丑十月廿五日御小納戸江御役替被仰付候、　山田彦八明遠 後司

明和四亥十一月十五日稽古、同五子七月廿八日致切服相果候、　高橋半右衛門種香

安永二巳三月廿二日ヨリ添役、同六酉六月十五日聖堂奉行江御役替、　山本傳蔵常行 後正誼

(マヽ)明和六酉十一月十五日稽古、安永七戌閏七月四日添役、　黒田嘉右衛門清厚 後清躬

嘉右衛門同日稽古、同日添役、　篠原善兵衛國寶 初國甫

安永七戌九月廿五日稽古、天明元丑六月十三日添役、　日高六右衛門為昌

六右衛門同日ヨリ稽古、天明二寅五月三日死去、　大田小平次用純

安永九子正月十一日ヨリ稽古、　本田孫九郎親芳

孫九郎同日ヨリ稽古、　有馬覺太郎純晧

天明四辰正月十一日ヨリ見習、　平田貞太郎

天明四辰正月十一日ヨリ見習、　平山五郎右衛門

同年正月十九日ヨリ稽古(ミナラヒ)、　川上八郎太

諸御役人・小役人御賦方并勤方大概

一御城代　當分無御座候、

一殿様御留主中國家之押惣而國中御政道被聞召候、嶋津将監殿迄ニ而、其後右御役無之候、将監殿御役料高弐千石ニ而候、其時分よりハ當分御家老御役料高も相減候付、　御城代御役料高茂相減申賦候得共、御定無之候、『六拾人賄料』

一御家老　當分八人、時〻増減有之候、

一御役料高千石

一江戸御詰之時、持高壱万石以上之人者上下六十人賦、壱万石より内之人者五十人賦、

上下共壱人ニ付一ヶ月ニ米壱斗五升ツヽ、文銀三拾目ツヽ、

但賦之多少によらす誰人ニ而も此通、

一田舎行之時、上下三拾弐人賦、

上壱人ニ付一日ニ米壱升三合、下壱人ニ付一日ニ六合ツヽ、

但書同断、

一國中仕置御政道専一之御勤也、

（表方脱カ）

一江戸より被　仰下候儀共時〻御付届首尾之事、

一他國互御禮儀有之、其外諸事御問合之事、

一諸士仕置并元服・角入・前髪取願之節、御家老・大御目付見分被成、相應之者者御免被仰渡候、

一右同隱居・家督・養子縁與等之儀御しらへ御申之事、

一長崎・上方江御付届首尾之事、

一口事方調勝負吟味有之御申之事、

一神社佛閣修甫・造立等奉行より披露・調被仰付候事、

一科人・遠流者等御差引之事、

一横目頭披露御差引之事、

一御祈念・御法事等差引之事、

一江戸上下諸士御差引之事、

一表方諸士御役人被仰付候節、　御前より御見合を以被　仰出候外者、被成御吟味達　貴聞被　仰付候、筆者・小役人定役代合有之節者、其頭より人柄申出候上被　仰付候、

一知行高新規拜領之人有之節、判物之書付被相渡候、

一宗門改之證文御家老三人之名印を以　公義江被差出候、

一御家老之内壱人吴國方引受被為勤候、

一御関狩、御馬追、諏方・稲荷祭礼神事能之節　御名代有之、其節〻被為詰候、且又御法事之節壱人ツヽ被為詰候、

一御直元服人有之節、理髪被為勤候、

年頭・諸節句・月次為御祝儀諸御役人出仕ニ而　御前江被為詰、　御在府之節御家老被成對面候、若御年寄・大御目付も同前被相詰候、

一定筆者拾七人、寄筆者三四人相勤候、

御側方

一御家老壱人ツヽ繰廻月番被為聞候ニ付、御側廻并奥向之儀万端御差引有之候、

一御側支配之諸御役人被仰付候節、　御前より御見合之外者、人柄被成吟味被達　貴聞被仰付候、御側支配之諸役座筆者・小役人代合之節、人柄其頭〻より申出候節被　仰付候、

一定筆者四人相勤候、

御勝手方

一御家老之内一人差分被為勤候、両人ニ而勤之節茂候、一人勤之節者、若御年寄之内又者大御目附之内より壱人被相勤、隔月ニ壱人月番被為勤候、

一御勝手方両人ニ而被相勤候節者、一ケ月ツヽ隔月ニ月番被為勤、表方茂一人ツヽ、一ケ月ツヽ繰廻月番被為勤候、

一御所帯方之儀諸事引受、田地・山方・浦方・海川方萬差引、　御参勤料、江戸・京・大坂・御國諸御入用并諸納方勘弁有之、琉球・道之嶋諸嶋迄も差引有之候、

一御勝手方支配之諸御役人御役替之節、　御前より御見合之外者、人柄被成吟味被達　貴聞被仰付候、諸御役座筆者・小役人代合之節ハ、定役・寄役共ニ其座〻頭〻より人柄書出之上被仰付候、

一御高出入差引有之候、

一所務方并田地為作候様差引之事、

一江戸・京・大坂蔵奉行差引之事、

一諸御役座奉行・代官等より時〻御尋申出候儀差引之事、

一諸勘定方差引之事、

一諸金山方差引之事、

一筭用役八人、定筆者五人、御帳書抜寄筆者相勤候、

『御側詰　三拾五人賄料』

一若御年寄　當分三人、時〻増減有之候、

御役料高四百石、江戸御詰之節『三拾人、万石以上之人ハ』三拾五人賦、田舎行廿五人賦、

一御馬方代合之節、人柄吟味之上御馬方より書出之上ニ而被仰付候、

一年中記之首尾并諸役人帳之首尾、

一御目見願・家督継目之御礼願之節、引受候而候、

一御咎目者引付并赦免状御家老より出候付、若御年寄請込、御用人江被相渡候、

一御関符、御馬追、諏訪・稲荷祭礼神事能之節御家老被相詰事候得共、差支之節者被相詰候、

一表方支配之御役座筆者・小役人寄役代合之節、座〻

頭〻より人柄書出之上被仰付候、定役者月番御家老衆被為聞被仰付候、

一若御年寄方之筆者者御家老座筆者之内より相勤候、

一大御目附　當分四人、時〻増減有之、

御役料高三百石、江戸御詰之節廿五人賦、田舎行之時十八人賦、

一國中仕置批判しらへ之事、

一自他國によらす為替事聞合之事、

一邪宗門之儀密〻御聞合有之事、

一非法いたす者聞合之事、

一不依誰人御仕置致違背不行跡人聞立之事、

一盗賊其外悪黨者聞立之事、

一邪成儀を申立、傍輩中非儀之口事致者聞立之事、

一御書院方・御能方一人ツヽ引受ニ付、支配有之候、

一鉄炮改・犬改引受ニ而候、

一出火有之節、其場江被駈付萬端下知有之、

一身躰不相應成仕形仕候人聞合之事、

一惣而御國中百廿ケ外城ニ横目両人又ハ三人定置、其面〻より諸所ニ而為替事共善悪共ニ内〻密〻申出候儀御しらへ之事、

一評定所惣而之勤被為聞、糺明之節評定所詰有之、遂吟味候、御勝手方被為聞、大御目附ハ評定所詰銀ニて被相調候、

（寺社奉行脱カ）

一出家江戸上方江為修学差越、又ハ為出世罷登候節、寺社奉行手形證文ニ而差越候、右之類者皆寺社奉行差引也、

一御勘定奉行三人、外當分寄役壱人、

御役料高弐百石、江戸御賦廿二人（『弐拾三人賄料』）、田舎之時十二人賦、

一惣而金銀米穀其外諸色役人取拂帳勘定方差引之事、

一知行方目録者、則勘定奉行より御支配奉行とて兼役ニ而相勤候也、

一鹿児嶋中士屋敷差引之事、

一勘定方総役両人、勘定役十四人、帳役両人、定筆者四人、此外時〻寄役不断五六十人程相勤候、御高御

支配方江定筆者・寄筆者取込拜借方江懸十二三人程
相勤候、門割等有之新支配有之節者右外ニ二三十人
五六十人、其上茂御用次第相勤候、

一組頭拾八人、

一御番頭與頭より兼役ニ而候、御番頭一篇之勤も有之
候得共、人数定ハ無之、
御役料高無之候、乍然身躰難續人ハ弐百石計ニて下（被脱カ）
人茂御座候、江戸御登之時弐拾弐人賦、田舎御勤之
節拾弐人之賦、
『但御子様方者弐拾五人賄料』
一組頭茂番頭茂同勤ニ而候、
一番頭と申者日夜不明様ニ御城番代ル〳〵之勤ニ而、
日夜共ニ番頭壱人ツヽ、其外ニ小番衆迚騎馬役勤人
より五六七人ツヽ日夜不明様ニ番所一ヶ所相勤候、
其次ニ大番衆は大番所と申所江相詰候、子丑寅卯辰
巳午未申酉戌亥十二番代ニ定、一日一夜ニて代合、
他番入代り相勤候事、
一與頭ハ　御城下ニ七與ニ分ケ、一組ニ与頭三人ツヽ、
定置、其内より受取之月番諸事聞前有之候、筆者両
人ツヽ相付、是ハ諸所願書・訴訟等取次、奥書等有
之申上候首尾也、尤口事沙汰等内證ニ而取扱等茂与
頭より御差引之事、
一一組筆者二人ツヽ、役料米廿俵ツヽ、
一寄合并以上ハ御家老月番ニ与頭之御用被為聞、小番・
大番家柄之儀者六與ニ相分、一組ニ与頭三人ツヽ有
之、下モ方ハ一番組より四番組迄有之、上ハ五番組・
六番組二組有之、都合六與ニ而候、
一與頭番頭兼役ニ而候得共、諸所御馬追奉行又者御関
狩ニ者我下之惣人数召列狩立有之、
一御家老與頭と申ハ、右七與之内一與御家老衆御主取
御差引有之、
一外六組者右ニ申述候事、

一御側御用人五六人、筆者五人、
御役料高百四拾石、江戸御詰之時十八人賦、田舎行
之時八人賦、
一御側廻・奥向之御用被相勤、

一御用人十人計、外御勝手方江三人、筆者十五六人、
御役料高百四拾石、江戸詰之時十八人賦、田舎御用之時八人賦、
一御側・表御用人之内より一両人江戸御供被相勤、江戸御留守ニ茂表御用人一人勤ニ而候、
一毎日出仕之事、
一與頭・御番頭之内、又者表御用人之内、奏者番相兼被仰付置候、
一毎月両人ツヽ月番とて日〻御用取次披露有之、
一御勝手方御用人衆ハ月番無之、毎日勤ニ而候、一人御所帯考方、壱人琉球方返上物方、壱人道之嶋方差引職分ケ有之、其外ハ皆同前之勤ニ而候事、

一町奉行両人、筆者四人、
御扶持方九拾石、江戸登之時十七人賦、田舎御用之時七人賦、
一御城下三町差引有之、町よりハ地頭と申候、
一他國往來・商賣出入改差引、手形往來出之、
一町屋敷出入差引之事、
一町中口事内聞之事、附披露之事、
一三町ニ年行司とて有之、其外ニ功入候老人上町下町ニ三人ツヽ、西田町ニ両人有之、年行司相談人也、

一御側役五六人計、御側役并人數不同、
御役料高百石、江戸詰之時十五人賦、田舎行之時六人賦、
一江戸江三人ツヽ繰廻相詰候、
一御側御用人差支之節者、御側廻御用筋同前ニ取次相勤候、
一御前より被　仰出候儀、又者御前江被相伺候儀、御取次相勤候、
一出火之節、火元江駈付諸事差引有之候、
一御小姓方支配有之候、
一御徒目付八人被召付置候、
一筆者五人、御徒目付兼役相勤候、

一江戸御留守居四人ニ而、一人ツヽ御當地江十ケ月計も罷居、其外江戸詰、

役料金子百八拾七両程ニ筆紙墨代銀壱貫九百目、江戸詰之時十五人賦、外ニ中間弐人重ニ而、合拾七人賦、

一殿様致御供　御城上ル、脇〻御見廻之御供、

一毎日江戸外出、為替儀共心懸承候而、夫〻ニ應御勤向之儀申上候役也、

一御國江被遊御座候時、被差登候使者致案内事候、様子埒明御老中其外諸役人・諸大名方江致同心役ニ而候、

一御留守居一人ニ筆者両人ツヽ相勤候、

一京御留守居両人ニ而、一年ツヽ代合相勤候、役料銀七貫九百五拾目、京詰中十五人賦、

一京詰算用役壱人ツヽ、一年代、

一同筆者三人、二年代、

一同買物二人、右同、

一同蔵役二人、右同、

一蔵取拂御所帯方之儀承候、京都ハ白糸玉金之御拂方、大坂者御仕登せ御米・生蠟・黒砂糖・菜種子等之致御拂方、江戸御用銀時〻相續ケ候、大坂之儀者、江戸代合之人罷下候節、乗船之手當有之事候、

一大坂御留守居人數并代合・御扶持京都同前、

一大坂詰横目二人一年代、筭用役一人同上、買物役同弐人二年代、筆者四人二年代、其内二人ハ大坂居付、蔵役四人二年代、

一勤方右同断、

一御納戸奉行五人、御扶持米七拾三俵、江戸詰十四人賦、田舎御用之時六人賦、

一御支度方差引之事、

一御振舞方差引之事、

一御不断御膳方包丁人料理人之上惣而下知之事、

一御納戸江相付奉公人差引之事、

一科人斬罪之節、其場江御腰物持越下役江申付様有之、

一御腰物役二人　一御時計役二人

一筆者三人　一蔵役二人

一御成先御振廻差引之事、

一惣而　殿様御座所江必不欠罷出候事、

一物頭拾五人、御扶持米七拾三表、江戸詰十四人賦、田舎行之時六人賦、

一検者二人　一筆者三人

一蔵役四人

一御兵具所主取之事、

一御弓頭・御鉄炮・御長柄頭とて三頭職分ケ有之、

一御道具衆とて足輕預り、惣而差引下知有之、

一殿様屹　御出被遊候先キ江ハ必御供有之、

一科人有之候得者、下知ニて足輕被遣候役也、

一糺明之節、科人共口聞ニハ必足輕召列詰候役也、

一御船奉行六人　一検者四人　一筆者七人

一惣大工二人　一御船頭壱人

一脇船頭三人

御扶持米四拾五表、江戸詰十二人賦、田舎勤六人賦、

一毎年御船立仕出、則御供ニ而大坂迄罷上、又御暇ニ而其年中ニ罷下候役也、但御迎ニも差越候、

一御領内諸船差引之事、

一七嶋ハ船奉行支配之嶋也、

一久見崎御船手江ハ一人ツヽ代ル〳〵勤番也、

但浦人訴訟事等取次、御勝手方へ遂披露候、

一御使番六人、筆者六人、

御扶持米四拾五俵、江戸詰十一人賦、

一江戸・御當地共ニ御使者并御進物しらへ仕出方相勤、依事者御使者も御勤、江戸御留守居差支候節ハ寄役をも相勤候、

一御小納戸頭取　江戸詰拾壱人賦、

御役料并御心付銀御小納戸之通、

勤方御小納戸之通ニ而、御小納戸方頭取、

一御廣敷頭五六人、御扶持米六拾表、

一江戸詰之時十人賦、田舎御用之時五人賦、

一奥向何篇共ニ引受相勤、御廣敷番・同横目・御廣敷與力同心之支配いたし候、

一教授
江戸詰十人賦、御役料米弐拾石、
一造士館中之諸生江學問指南方相勤候、
一御右筆頭
江戸詰十人賦、
一御右筆書調候御書等相しらへ致吟味候役也、
一御作事奉行　五人、御役料銀拾枚、
一御普請奉行
江戸詰ニ十人賦、田舎勤ニハ五人賦、
一御普請方之御修甫致下知候役也、
一諸外城御仮屋普請ニも差越也、
一定檢者とて下知役凡十四人も有之候、此面〻委見届
致首尾候事、
一檢者外惣大工三人　一添大工四人
一筆者六人　一蔵役六人
一御記録奉行三人、并添役又ハ稽古三四人、筆者四人、
御扶持米六拾五表、江戸十人賦、田舎五人、組役ハ（添カ）
四人賦、
一御系圖方、惣而古代より之御書付等見しらへ、堅固
ニいたし（格護脱カ）、虫付抔禁候役也、
一當時ニ而も後代ニ可入儀ハ時〻入念書付文庫ニ納置
候事、
一惣而士之筋目系圖之由緒紛候所也、
一長崎御附人両人、御屋代とて町人壱人相付、
御扶持米長崎詰之時百俵、筆紙墨代銀三枚、長崎詰
中拾壱人賦、
一吳國方御用聞として、両人ニ而隔年ニ壱人ツヽ三月
より十月迄彼地江勤番也、
一御領内江漂流之唐船長崎江警固人相付送届候付、長
崎御奉行方江使者同心ニ而首尾申上候役也、
一其間〻ニも何そニ付使者被遣候時、御奉行方江同心
ニて被罷出候事、
一毎年九月末十月、阿蘭陀船帰帆濟候得者、則諸國附
人御暇被下之由也、

一高奉行五人、下役筆者十人、出物総役三人、御當地出物蔵役四人、
御扶持銀拾枚、江戸詰ニ十人賦、田舎御用差越候時五人賦、
一鹿児嶋并諸外城高出入差引有之候事、
一諸士御奉公ニ付江戸・京・大坂上洛賦銀手形を以出シ候事、
一御國中諸士行キ飯米等も出ス、
一出物米差引有之候、此出物米を以上方江仕上せ、其代銀を以江戸・御當地迄差引有之候也、
一返上物引受致首尾候、御用物早〻請込之座〻ニ而相調、物奉行江致問合、取揃御勝手方江申出候節吟味被仰付、惣員數相證文を以高奉行江被仰渡候節、注文相調琉球江相渡候、出物方引合之琉物品〻茂右同断、
一物奉行五人、筆者十三人、蔵役八、
御扶持銀拾枚、江戸詰ニ十人賦、田舎賦五人、
一御所帯方不依何邊差引也、一人ツヽ江戸詰、
一諸御扶持方茂此座より手形出ス、
一諸職人賃飯米等此座より出ス、
一惣而御物（ママ）より品〻何ニ而も無残此役より差引、
『江戸詰之節十人賄料』
一道奉行七八人、
小路方都而受込、
一御馬預人數六人、御馬乗五人、馬醫七人、
檢者弐人、筆者四人、蔵役弐人、
御役料銀拾枚、江戸詰十人賦、田舎五人、
一御馬ハ勿論御領國中惣牛馬致差引、毎年九月比牛馬出入之勘定相究候、江戸へも繰廻壱人ツヽ相詰、御馬之致支配候、
一諸所御牧致差引、福山・吉野御馬追之節ハ差越致諸差引、商買馬春秋他國江差廻候節、大口江差越馬相改候、
『天明六年午十月被相建』
一御小姓頭取

『御役料　江戸十人賄料
一奥表御小姓御近習番御小姓之頭取ニ而、諸書付等取次候役也』
『天明六年午九月二日被相建』
一御側目付
『一奥向ハ勿論其外御目代、　江戸六人賄料』
一御小納戸二三人計、御小納戸并二三人、御役料米御見合次第、江戸五人賦、田舎四人、勤方御小納戸同前、
御役料米四拾五表、江戸六人賦、田舎賦四人、
一御衣裳御支度等之儀引請相勤、
『一御抱守　江戸六人賄料』
一御供御目付七人、
御役料銀拾枚、江戸六人賦、田舎行四人、
一殿様御出之節、御乗物廻御供相勤、御供廻何角致差引、御大名様方其外御中途御辞儀有之節、御乗物江申上候、
一御目付廿人餘、筆者七人、内五人糺明方、
御役料銀（ママ）江戸六人賦、田舎四人、
一大御目付江相付御用筋致取次、御當地并諸外城横目より申出候趣致取次、江戸江も相勤候、
一使者登　城之節、又者諸士出仕之節、御座〻致差引候、
一御目付之内五人糺明方職分ケ相勤、科人評定所江被召出候節致糺明、其趣并先例等相しらへ大目付江書出、御家老衆被聞召候節罷出遂披露候、
『寛政五年丑八月晦日被相建、薗田与藤次被仰付候』
一御軍師
『一御近習通、一諸事御目附同格』
一御右筆七人、外ニ稽古二三人有之、
御役料米四拾八俵、稽古ハ三拾四俵、江戸詰ニ六人賦、田舎賦四人、稽古四人賦、
一公義御勤事之御書并脇〻諸御大名様方御書通之首尾、御高札、下馬下乗札等相調、諸御取替之御目録等相調候也、
一御廣敷番廿七八人、
御役料米四拾五俵、江戸六人賦、田舎賦四人、

一奥向御番相勤、御女中様方御出之節御供、又ハ御使等茂相勤候、

一山奉行六人、筆者七人、寄筆者三四人、山見廻四五人有之、
御役料銀三枚、六人賦、田舎行四人賦、

一御國内山方諸所木手形出ス役也、

一毎年御國中四方三手ニ春秋相廻、方〻ニ繰廻ニ残置候材木相拂、山方致見分役也、

一山方より納り候材木代金蔵ニ相納候、

一御関狩山方主取差引之事、

一御用木取下申付候役也、

一商賣山願之者有之節、山床支有無、運上銀高下しらへいたし、御勝手方江申出候事、

一郡奉行十七八人計、筆者廿人計、寄筆者依御用増減、田地方検者三十人計、寄六七十人、
御役料銀三枚、六人賦、田舎行四人賦、

一田地仕付并秋取納物成定候役也、

一春初、諸方井手溝用水（等カ）沙汰有之、

一田畠共ニ新竿入并古田畠共ニ竿入高相究帳面ニて其後御支配奉行より名寄帳・知行目録出ル、新高竿入又ハ古高位増劣之節、直竿俵汰之沙汰いたし、高相究候汰勝手江申出候、風損・水損・竿損（旱カ）等有之定代上納難叶節、諸所差廻致上見、代成定候、

一諸奉公人江戸・上方・他國江被遣候節、御國中送届候人馬致差引、且又道橋修甫其外百姓相勤程之儀、夫賦申付致差引候、

一百姓共年季奉公暇之願申出之節承届、跡作職支無之者ハ十年季を限、其以下ハ段〻年季差免候、年季者鹿児嶋士計御免也、

一御用紙用之楮差引仕候事、

一諸外城江楮を植付させ、秋冬ニ取納、諸方ニ而帋を漉調させ候差引之事、

一金山奉行二人三人、六人賦、田舎賦六人、
御役料六枚、金山詰之節、一ヶ月銀三拾六匁・米九斗、壱日ニ壱匁弐分・三升ツヽ、

一金山ニ而金子取上候付而之銀・出米穀此役所手形を以蔵方より出ス、一他國者出入手形出ス、

一操・哥舞妓等之節、此役江被仰付他國者締申付候、

一御細工奉行四人、御役料銀六枚、
一不依何色御細工差引いたし候、
一諸細工人此座より致下知候、鍛冶細工類者御普請方江相付候也、
一檢者三人、筆者二人、蔵役弐人、不断相勤之、表具細工主取二人、塗物主取弐人、鍛冶五六人、研師二三人、鑓柄師二人、鉄炮師二人、同からくり師二人、鑄物師二人、青貝師・沈金師二人、塗物鞘師二人、繪師四人、御扶持米五拾表より拾八表迄之間段〻被下、此外之諸細工人者御扶持不被下、御用相勤候節日數ニ應し賃飯米被下候也、

寺社方ニ相付
一御祈念方　御扶持方
一寺院御祈念方取次差引役也、
一社家ニ而神楽神舞夜之云事(芸カ)御座候、其節茂此役より致差引候、
一屋久嶋奉行三人、筆者二人、蔵役二人、
御扶持銀四枚半、六人賦、
一屋久嶋より上り候平木致拂方候差引之事、
一屋久嶋江繰廻一年代壱人ツヽ相詰、嶋人共致差引、平木・樽樽・完料等諸座諸人入用分取納申付、代米致拂方鹿児嶋江差上候、屋久嶋江者御當地右役所書役両人之内より壱人、其外ニ鹿児嶋より寄筆者壱人、外城より寄筆者壱人差越候、屋久嶋江下代四人差越、一年代ニ鹿児嶋より差越、諸品請取拂相勤候、
一宗門改役三人、横目二人、筆者二人、
御扶持銀六枚、六人賦、田舎賦(ママ)、
一専切支丹宗門并一向宗禁止之致沙汰役也、
一宗躰方之儀、口事并詮儀此役より相勤候、

『○安永七年戌正月被相建、
○御鷹匠頭次ニ而候処、安永七年戌正月十九日御鷹匠頭上ニ被仰候』
一御鳥見頭『江戸六人賄料』
『○天明元年丑五月十九日被相建、
一御鳥見頭格　右同』

一御鷹匠頭　筆者壱人、御鷹師三四人、
鷗取壱人、御鷗餌取壱人、
『○初尾畔奉行ト云、安永六年酉五月廿七日御鷹匠頭ト改ム、尾畔預』

御扶持米五拾八俵、六人賦、田舎賦（ママ）

一御鷹匠頭格　『六人賄料』

一御同朋頭壱人、『六人賄料』

御扶持并御賦人數依人躰御見合次第、

一御記録方添役　『六人賄料』

一御作事奉行見習　『六人賄料』

一物奉行見習　『六人賄料』

一唐船『改』四人、

御扶持銀　『五人賄料』

一御領國中江唐船漂着之時、引受相勤候、

一寺社方取次六人、『五人賄料』

御扶持銀

一神社佛閣堂塔之沙汰仕役也、

一寺院社家より申分奉行江取次仕候、

一万事始末者寺社奉行之場江記候、

一御勘定方小頭八人、

御扶持銀　『五人賄料』

『一御薬園奉行　五人賄料』

一表方『御』代官三人、定筆者五人、寄廿人計、

御扶持銀　江戸賦并田舎行共ニ四人賦、

一拾弐万石方御蔵入差引仕候、御知行諸外城方〻ニ有之候を下代百姓手前より致取納、代官差圖次第方〻江致拂方候、

一右取納米者御所帯根元ニ而、大坂仕登せ賣米、御國諸扶持米物奉行手形ニて米蔵より出ル、

一殿様御光越之所江差越、御臺所諸物下代江申付相集、御料理方江渡ル、

一諸方ニ而漉調候紙支配方差引之事、

一帖佐與御代官四人、定筆者五人、蔵役弐人、寄廿人計、

御扶持銀

一前〻より新田出米（来カ）候所此代官より差引仕候、凡三万七千石程茂可有之哉、此納者江戸・京・大坂江相詰

候足輕・中間一身賦迄被下方此御蔵より出ル、
一江戸御奥御渡方此方より出ルも有之候、

一御臺所頭一人、筆者弐人、蔵役弐人、料理役弐人、
検者・座横目二人、六月代受込相勤、
御扶持米五拾八俵、江戸・田舎共ニ四人賦、
一御不断御料理方此所より出ル、
一御臺所江諸蔵方相付有之、
一右ニ付候蔵役壱人夜番相勤、昼者役〻皆出勤有之、
一右ニ御小者役とて一身者代官差引ニ而方〻御座へ召仕候、

一客屋評定所預御春屋役壱人、筆者三人、
御扶持米五拾八俵、『四人賄料』蔵役四人、検者・座横目之内より繰廻勤、
一御前御用之外、味噌・酢類調方、御振廻事之節御前廻外御次仕出、御法事之節出家并諸詰衆江御料理出候調方等申付候、
一糺明之節詰人數江御賄調方申付候、

一他國より御使者・輕使・飛脚等参候節、御料理賄方致差引候、
一御用并諸人用蠟燭調方申付候、

一奥御小姓廿五六人、時〻増減有之、
御扶持米廿七俵、支度料銀三枚三拾弐匁、
江戸賦・田舎共ニ四人賦、
一御給仕　御髪月代御支度等仕、　御出之節御供　御先番相勤候也、

『安永九年子八月三日初而被相建、
一御近習番　四人賄料、一奥御小姓同格』

一表御小姓廿人計、時〻増減有之、
御扶持米・支度料銀等江戸・田舎賦奥御小姓同前、
一御前外之御給仕相勤、御側廻江之御用有之節取次相勤、

一御裁許『掛』見習二三人、
御扶持『四人賄料』

一郡奉行見習　右同、
　御扶持『四人賄料』

一大奥御小姓三四人、時〻増減有之、
『〻〻』
　御扶持米拾八表、支度銀、
　江戸・田舎共ニ三人賦、
一奥御小姓同前相勤、奥向江も罷通相勤、

一奥御醫師拾弐人、
『〻』
　御扶持米五拾俵、五人賦、田舎行四人賦、

一御書院方預『數奇屋頭』　筆者五人、蔵役ニ相勤、
『〻〻〻〻』
　御扶持米五拾八俵、江戸五人賦、田舎行四人賦、御床飾等諸御道具都而受込勤、

一奥御同朋両人計、
　御扶持米四拾五俵、『四人賄料』江戸五人賦、

一表御同朋
　御扶持　『江戸四人賄料』

一奥御茶道
　御扶持　『江戸三人賄料』

一小坊主定候人數無之、
　御扶持米拾八表、江戸・田舎賦共三人賦、

一御記録方稽古
　御扶持米弐拾五表、『四人賄料』

一御右筆稽古三四人、時〻増減、
　御役料米三拾四俵、四人賦、

一助教
　御役料米七拾五俵、『四人賄料』

一学校目付
　御役料米

一御鷹匠見習

御扶持

一無役之御近習通
御扶持方御見合次第、

一甑嶋移地頭壱人、付役壱人、
地頭高百五拾石、付役高三拾石并所より夫賃出候、

一此嶋者第一長崎江往還有之故、毎年唐船・阿蘭陀船
等用心専無油断守候地頭也、

一長嶋移地頭壱人、付役壱人、
地頭高百五拾石、付役高三拾石、

一是より方角西ニ而、御城下より遥隔廿四五里程ニ而
候、地頭勤方心入山之口同前也、

一高岡地頭代壱人、

一是ハ穆佐近隣ニ而勤方同前也、此所ハ去川与申御番
所外ニ四ケ外城有之内高岡廣所也、此所を四ケ所之
基とす、

一大口地頭代壱人、
高百石、

一御城下より拾五六里北之方ニて候、高岡与出水之間、
双方ハ大山を挾難所也、地頭代ニ而候得共、勤方者
移地頭勤番同前也、

一出水地頭代壱人、
高百石、高岡勤番同前也、

一都之城中抑両人、内壱人者筑後殿より見合被申出候上被仰付、高百石之所務筑後殿より被遣候一人ツヽ代合詰候也、相談人也、
御扶持

一此所他國近、殊庄内と申所廣所ニ而候故、彼役人共
迄ニ而者難勤故、御當地より二人中抑被仰付、内一
人ハ御見合を以被仰付、高百五拾石之所務筑後殿よ
り被遣候、庄内より申上候儀、皆此人取次ニ而　御
城江申上候事、

一座横目人数不定、百人以上、
江戸・田舎共ニ三人賦、役料無之、高役勤、

一勤方ハ金蔵・出物蔵・進物蔵・御普請方蔵、其外蔵〻江茂相詰、御買入物位・直成等致吟味、御拂物見分直付之検者いたし、其外諸役座江も行廻致見分、田舎江も三ケ月代、（相勤候脱カ）

一横目人数百人以上、座横目同前、高役勤、

一変死者有之節致見分、喧嘩等之節疵口共事之子細相糺、悪黨者捕候節足輕召列相勤、糺明又ハ御仕置者有之節茂相詰、江戸江茂相詰、座横目差支之節者蔵方へも相勤見分いたし候、江戸詰・田舎行共ニ三人賦、諸所津口番所江茂三ケ月代相勤候、

一御家老座筆者

江戸四人賦、田舎行三人賦、御家老座江相勤、御家老座首尾之事不依何篇相勤、

一若御年寄筆者

右御家老座筆者之内より相勤候、

一大御目付座筆者

人数ハ大目付衆之場ニ有之、江戸・田舎行共三人賦、

一御用人座筆者

人数ハ御用人衆之場ニ有之、賦方都而三人、

一江戸・京・大坂其外ニ茂何〻与申御蔵何程有之候哉、

一進物蔵　一御臺所蔵　一御普請方蔵

一御書院蔵　一御納戸蔵　一御兵具所蔵

右江戸御蔵ニ而候、

一京都御蔵　一大坂御蔵

一諸座并蔵方之儀者右本行ニ何〻と有之分ニ而候へ共、猶又左ニ相記候、人数者其場〻ニ有之候、扶持者真・赤・琉米取交弐斗入ニて被下、

一御家老座筆者　役料米三拾四俵

但御帳書筆者ハ弐拾七俵、御側方筆者職分ケ有之、

一御勝手方筭用役　役料米三拾八俵

一右同筆者　同三拾四俵

一大御目付座筆者　同弐拾九俵

一大御番頭座筆者　同
一寺社奉行座筆者　同廿四表壱斗
惣大工　同五拾八表
賦大工　一日ニ米壱升・銀壱匁五分、
應勤日数、
一御勘定所総役　役料米弐拾七表
但勘定役帳役人御支配方筆者弐拾四表壱斗
一與所筆者　同弐拾表
一御側表御用人座筆者　同弐拾七表
一町奉行座筆者　同弐拾七表
一御近習役所筆者　同廿四表壱斗支度料銀
一御納戸御腰物役御時計方
筆者　蔵役　同廿四表壱斗
一御兵具所筆者　同廿表
一御船手検者　同廿九表
筆者　同廿表
惣大工　同五拾八表
御船頭　同六拾五表
脇船頭　同五拾表

一御使番役所筆者　同弐拾表支度料銀弐枚
一御廣敷頭役所筆者　同廿四表壱斗
一御普請方検者　同廿九表
筆者　同廿四表
惣大工　同五拾八表
添惣大工　同四拾表
蔵役　同廿表
一御記録所筆者　同廿四表壱斗
一高奉行所筆者　同廿四表壱斗
総役　同廿表
蔵役　同廿表
一物奉行所筆者　同廿四表壱斗
一御厩方御馬乗　同廿四表壱斗
馬醫　同同稽古廿八表又八廿表
検者　同廿九表
蔵役　同廿表
一御目付役所并御裁許方筆者　同廿表
一山奉行所筆者　同弐拾表
山見廻　同廿表

一郡方筆者　同廿表
　　検者　同廿表
一御細工所筆者　同廿四表壱斗
　　蔵役　同廿表
　　検者　同廿九表
一屋久嶋座筆者　同廿表
　　蔵役　同廿表
一宗門方筆者　同廿四表壱斗
　　横目　役料無之、
一尾畔筆者　同廿表
一御書院方筆者　同弐拾九表
一代官所筆者　同廿四表壱斗
　　蔵役　同廿表
一御臺所筆者　同廿表
一御春屋筆者　同廿表
　　蔵役　同廿表
　右之通被下候、
一金蔵　一出物蔵　一進物蔵
一御厩蔵　一御兵具所蔵　一御船手蔵
一御普請方材木蔵并雑物蔵
一御臺所米蔵并雑物蔵
一御春屋蔵　一新楮蔵　一屋久嶋蔵
一御細工所蔵　一御納戸蔵　一御書院蔵
右御當地蔵〻ニ而候、人数・扶持方等本文夫〻之場江記置候、右外諸外城下代出物蔵五拾ケ所計有之、
一蔵ニ蔵蔵(衍カ)役二三人四人計一年代ニ差越相勤、役料米廿表ツヽ被下候、
一御家老用達二人、役料米三拾四表、四人賦、
一若御年寄用達壱人、同廿七表、
　但江戸詰之節三人賦、
一大目付用達壱人、同廿表、
一御用人用達壱人、同廿表、
一御側役用達壱人、同廿表、
一江戸・京・大坂御留守居御當地ニ而候用達無之、詰中同心用達有之候、士用達者無之候、右御役之外用達無之候、与頭・御番頭以上之人江戸・上方へ被遣候節、用達壱人被召付候、右用達ハ夫〻御役之人本賦人數之外ニ而候、

一諸御役人定役者定役料米被下事候故、旅江出候而も
無差引跡江被下候、寄役者御當地ニ而應勤日數被下
候故、旅跡不被下候、

享和三年癸亥四月書写之、

2

寫

一主従五人ハ　御國行遠近共
一主従七人ハ　日州番所外行之時
御普請奉行　御記録奉行　長崎御附人
高奉行　隅州様御方物奉行　物奉行　御厩別當
一主従四人　但内外共
御小納戸役　隅州様御方御小納戸役　御小納戸役并
隅州様御方御小納戸役并　中通御目附　隅州様御方中通御目附
御目附　御右筆　隅州様御方御右筆
納殿　山奉行　郡奉行
金山奉行　御細工奉行　御祈念方
屋久嶋奉行　宗門改方　磯奉行
尾畔奉行　御茶道頭

但此御役ゝ之内ニも拾人御賦ニ而致江戸詰候人ハ、
御國行遠近共ニ主従五人御賦、且又日州番所外行
主従七人御賦可被下候、納殿之儀ハ内外共可為四
人御賦候、

一主従四人　右同、
唐船請込　寺社方取次　御勘定方小頭
御勘定方吟味役
但書右同断、
一主従四人　右同、
御醫師　御包丁人頭　御書院役人
表方代官　五万石方代官　帖佐与代官
御臺所役　御春屋役
但書右同断、
一主従三人　右同、
御側御小姓　隅州様御方御側小姓　御側御同朋
表御小姓
但書同断、
一右御役之外者此之通、

右之通御國行之節御賦被成下筈今度被相定候条、支配之座〻江可被申渡候、以上

『享保二年』
戌十一月　　（種子島久基）弾正

『右、戌十一月廿六日菱刈新五兵衛御取次を以被仰渡候通達帳』

3

写

江戸・御國元御使御賦、三人賦より五人賦迄ハ都而急料、六人賦より以上ハ現人数迄急料被下候事候処、此節左之通被相改候、

一三人賦、弐人ハ急キ・中急ニ應而急料被下、壱人ハ静料被下候、三人ニ而罷通候ハヽ三人共ニ急料可被下候、

一四人賦、弐人ハ急キ・中急キニ應し急料被下、弐人ハ静料被下候、弐人以上ニ而罷通候ハヽ召列候人数之通急料可被下候、

一五人賦、弐人ハ急キ・中急應し急料被下、三人ハ静料被下、弐人より已上ニ而罷通候ハヽ右同断急料可被下候、

一六人賦以上者被定置候通現人数迄急料被下、其外ハ静料被下候、

一急御使御定日数十八日参着候ハヽ御賦無差引、十九日よりハ御賦割を以應日数返上可申付候、十八日より内参着仕候者江ハ御褒美被下来候得共、右御褒美引替、應日数御賦銀割可被下候、

一中急御使日数廿二日被相定、廿二日参着候ハヽ御賦無差引、廿三日よりハ御賦割を以應日数返上可申付候、廿二日より内参着候ハヽ應日数御賦銀割を以可被下候、

一急キ・中急キ共ニ右之通被相定候間、三道中御賦銀相渡、海陸心次第可相通候、船中参候而も船賃料ハ不被下候、

右者、以前者三人賦之者御使被差越候節者下人不召列者無之候得共、近年ハ三人賦之者御使ニハ下人不召列事之様相成候付、壱人ハ静料被下候、御倹約ニ而御賦之内静料被下候事ニ而無之候、此旨表方へ致通達、御側方・御勝手方へハ写を以可相達候、以上、

元文元年十二月　　（島津久賢）主殿

4

諸御役人正月八日より十四日迄ハ不洗物麻上下着用いたし来候得共、来正月八日より向後平服ニ被仰付

候、十一日・十五日之儀ハ有来通可相心得候、
右之通可被相心得候御差圖ニ而候、以上、
十二月廿八日　　小林中太兵衛（政一）

一御一門方　七拾人賄料
一右之嫡子方　六拾人賄料
一大身分四家　六拾人賄料
一右之嫡子　五拾人賄料
一一所持家督并部屋栖　賄料不相知、
一寄合家督并部屋栖　右同、
一寄合并家督并部屋栖　右同、
右御礼使等被仰付候節ハ時〻之御吟味次第賄料被下候、
表方ニ而江戸詰之節ハ十人又ハ六人賄料時〻御吟味次第、
一小番　十人賄料
一新番　六人賄料
右家格持前御馬廻新番其外賄料重ミ不被仰付内ハ、御小姓與同様三人賄料、
一御小姓與　三人賄料

但伏見御仮屋守・御包丁人頭之儀者五人賄料、
一郷士　右同
一與力　弐人賄料
但御船手與力之内脇船頭四人、仮脇船頭三人賄料、
一足輕　一身
一御納戸御小人　一身
一御口之者　一身
一御数奇屋仕坊主　一身

萬石以上
一主従三拾九人　御家老
一右同弐拾六人　若年寄
一右同拾八人　御番頭
一右同拾弐人　御近習役
一右同九人　御使番
一右同五人　右御小納戸役・御小納戸役并・中通御目付・御右筆・御茶道頭
但右之御役ニも十人賦被仰付置候者ハ主従七人御賦可遣事、
一右同五人　新番

一主従三拾三人　右上同
一右同弐拾人　大目附
一右同拾三人　御用人
一右同拾壱人　御納戸奉行
一右同七人　御近習役并御記録奉行
一右同七人　御馬廻り
一右同五人　御祈念方外ニ具足箱持壱人弓臺持壱人
一右同四人　御側御小姓
但六人賦被仰付置候人ハ五人賦、外ニ挾箱持壱人、

一右同五人　御醫師（ママ）　御醫師

一右同四人　御側御同朋　但外ニ挾箱持壱人、

一上下三人之御賦以下召列候供之者可為〇次第事、

一主従五人御賦已下之人本賦之通可申付候事、

右御賦之儀ハ、小倉・播磨路之御供立之節右之通申付候事、

御一門方より諸御役・諸座付迄旅中御賦定

高不依多少
一主従七拾人　山城殿　美作殿　兵庫殿　安藝殿

一主従六拾人　乗馬弐疋　嶋津左衛門殿　島津首令殿　嶋津図書殿　嶋津筑後殿

右之二男者嶋津左衛門殿なと同前、

右之部屋栖ハ三拾人乗馬壱疋

高不依多少
一主従六拾人　乗馬弐疋　右御城代

一主従三拾五人　乗馬弐疋　右若年寄

萬石以上
一主従六拾人　乗馬弐疋

高不依多少
一主従弐拾五人　乗馬弐疋　右大目付・大目付格

萬石以下
一主従五拾人　乗馬弐疋　右御家老衆

右同
一主従弐拾三人　右大番頭・寺社奉行　御勘定奉行

高不依多少
一主従弐拾五人　乗馬壱疋　右御小姓與番頭・當番頭

右同
一主従拾八人　乗馬壱疋　右御用人・御用人格

右同
一主従拾七人　乗馬壱疋　右町奉行

右同
一主従拾五人　乗馬壱疋　右御側役

右同
一主従拾五人　乗馬壱疋　江戸詰之節　右江戸御留守居、外ニ弐人ハ詰之節馬弐疋相立候ニ付中間賦被下候、右之妻ハ五人賦、

右同
一主従拾五人　乗馬弐疋　右京・大坂御留守居、江戸同様、

一主従拾四人　乗馬壱疋　右御納戸奉行・物頭

一主従拾五人　右琉球在番　但前方御用人相勤候人御免以後、琉球在番被仰付候節ハ拾八人、

一主従拾五人　右久見崎御船奉行　御舟奉行

一主従拾壱人　右御使番

一主従拾壱人　乗馬壱疋　右御近習役并・納殿役人　但銘〻拾壱人賦ニ而當役勤来候人ハ以前拾壱人可為御賦候、

一主従拾人　乗馬壱疋　右御作事奉行・御記録奉行　長崎御附人・高奉行・物奉行・御馬預　但長崎御付人長崎へ被差越候節ハ壱重格也、

一主従六人　右御小納戸役并・中通御目附・御目付・御右筆・納殿・山奉行・郡奉行・金山奉行・御細工奉行・御祈念方・屋久嶋奉行・宗門改方・磯奉行・尾畔奉行・御茶道頭

一納殿役之儀ハ、本拾人御賦之人も納殿役被仰付候ハヽ、六人賦可被仰付候、
但一往拾人賦之人ハ十人賦被下候へ共、其後又〻本文之通被仰付候、御役之勤功を以拾人賦被仰付候者も有之候、
但此御役内ニも十人賦被仰付候者も可有之候、且又御役不被仰付内より十人賦ニ而江戸へ相詰候者ニハ、右之御役被仰付候而も其身計十人賦可被下候、

一主従五人
右唐船方受込・寺社方取次・御勘定方小頭・御勘定方吟味役
但書同断、十人賦可被下候、

一主従四人
右表方・帖佐與・五萬石方御代官、御臺所頭、御春屋頭
但書同断、

一主従四人
右表御同朋
但拾人御賦御格別也、
但書同断、

一主従四人
右表御小姓

一主従三人
右奥御小姓

一御側醫師人数賦之儀ハ段〻依人被仰付候間、時〻證文之可相極事、

一主従五人
右御書院役人

一主従七人
右江戸詰護广所

一主従五人
右醫師

一座付士・外城衆中奥醫師被仰付候節ハ奥寄番醫師与可相唱、賦之儀ハ依人可被仰付候、

一表醫師・寄番醫師之儀ハ今迄ハ五人賦被下候御法候得共、御側醫師同前、以後都而四人賦ニ被仰付候事、

一主従拾人　乗馬壱疋
右御馬廻

一主従六人
右新番

一主従五人
右御包丁人頭

一主従三人
右歩行
但御徒目付御用ニ付京都へ罷上り候節ハ、上下四人賦可相渡候、

一主従三人
右伏見御仮屋守
但伏見へ相勤候節ハ五人賦、

一主従四人
右御家老座筆者・御勝手方筆者・御側詰筆者・御家老筆者与力・若年寄筆者与力
但御家老座・御勝手方寄筆者ハ、江戸上下御賦ハ時〻御證文を以可相渡候、

一主従四人
右御勝手方筭用役
但京・大坂詰之節ハ五人賦、

一主従三人
右御(能カ)机方
但於江戸公界ニ参候節ハ、御(方脱カ)物より人足可相付候、

一主従三人
右御側御茶道
小坊主・御料理役・御茶道表坊主

一主従弐人
右諸座付
但座付士を(相カ)離、表方御奉公衆勉候節、主従三人可為御賦、右之子座ニ付御目見仕御奉公相勤候節ハ、主従弐人ハ可為御賦候、御目見不仕内ハ壱身賦可出候、

一壱身賦
右足輕・御小者・御中間・奥付足仕坊主、(軽脱カ)

右之外も座付ニ而無之者ハ可為壱身賦候、人足御賦ハ格別、

薩藩役職補任

（表紙）

薩藩役職補任　全

御直『ろ』　御家老　五拾人賦

御直『い』　御側詰　三拾五人賦

文久二年戌六月十四日
兼務　小松帯刀殿
『一』

御直『ろ』　若年寄

文久元年酉十一月十五日
『御役料高三百石』　川上龍衛
『三』

三拾五人賦

文久二戌九月
『上ニ同』　島津出雲
『二』

亥八月十五日
『上ニ同』　川田将監
『一』

是より御家老申渡
『ろ』　大目附

貳拾五人賦

『御勘　掛』
『〃〃　〃』

『御役料高貳百石』
元年
『指宿〃居地頭』
『寺社奉行』
〃〃〃〃
町田民部
『二』

相馬事文久三九月
樺山主計
『一』

主計与改名

文久元年酉九月九日
町田内膳
『指宿居地頭』
『寺社奉行勤』
『四』

『西八月十五日江戸詰』
安政六年未十二月廿日
菱刈杢之助
『文久二戌九月大番頭、病ニ而寺社奉行勤』
『三』

文久二戌十一月三日
高橋縫殿
『五』

『ろ』 大目附格 貳拾五人賦

『ろ』 大番頭 御近習廻 寺社奉行同格 『定數貳人』 貳拾三人賦

文久二戌九月廿八日
菱刈杢之助
大目附より勤
〃〃〃〃〃〃

『御役料高百八拾石』
安政五年午四月十六日
島津隼人
『御勘定奉行勤』
『二』

安政四年巳九月六日『二』
安政二卯四月十一日
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
大番頭 伊集院亘
『御勘定奉行勤』
御小姓與番頭より
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

安政七年申正月
竪山武兵衛
大番頭ニ而
御勘定奉行勤
『三』

『四』
御勘定奉行勤亥正月廿七日
文久二戌九月
比志嶋静馬
御勘奉行より
『〃〃〃〃〃〃』

『ろ』 寺社奉行 『三』

『定數貳人』 貳拾三人賦

安政五年四月十六日
鎌田要人

『五』
『御役料高百八拾石』
嘉永三七月十六日當番頭より
『〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻』
郷原轉
『萬延元年申十月四日』

六
巳八月十九日
『安政』ニ而
御側御用人勤
猪飼鉚〻〻〻央太郎
『高百八拾石』

『四』
安政六年未十二月廿二日
末川久馬

『ち』　御勘定奉行
定料四人『マヽ』
貳拾三人賦

『四』
御役料高百八拾石
當番頭勤　嶋津左膳
奏者番是迄之通
安政三辰三月廿九日

五
御役料高百八拾石
伊集院隼衞
安政四巳閏五月十五日

『一』
大目附ニ而
勤
『御役料高貳百石』
町田内膳

『二』
文久三亥正月廿七日
大番頭
嶋津隼人

『三』
文久三亥正月廿七日
大番頭
『御役料高百八拾石』
比志嶋靜馬

『安政七』申正月『廿一日』『高百八拾石』　七
勤方
『御側役勤』
是迄之通　山口直記
『文久二戌三月二丸御側御用人、御側役方御用之儀も兼承候様被仰付候』

戌十一月三日　肝付兵部
『文久二』　八

安政七年申正月『廿五日』
『御役料高百八拾石』竪山武兵衛
大番頭ニ而
御勘定奉行勤
『一』

御役料高百八拾石
大番頭　伊集院亘
文久三亥五月朔日　九

『ろ』　御小姓組番頭

『定數拾八人』　貳拾貳人賦

御役料高百八拾石
一番御小姓組番頭　村橋昇
文久三亥六月八日

『御役料米貳百俵』
安政五午正月
〃〃〃〃〃〃
『五番』川上右膳
『萬延元年申十月十六日』四月廿一日改名
『〃〃〃〃〃〃〃〃』　『十八』

御役料高百四拾石
文久三年亥　四番　吉利群吉
十月廿一日

安政七年
『高百八拾石』
申二月十一日　右衛門
四番組與頭　桂小吉郎
〃〃〃　『十二』

文久三年
亥五月　御役料米貳百表　『八』
貳番組　高橋要人

御役料高百八拾石
大番頭　伊集院亘
文久三亥五月朔日　九

御役料高百八拾石
一□番御小姓組番頭
奏者番兼　島津求馬
安政五午十一月三日
文久三亥六月四御側役勤
『二』　『四』

御役料高百八拾石
二番御小姓組
奏者番是迄之通　相良治部
文久二戌十二月廿七日
『七』　『十五』

文久三年
『六番組』
亥五月　島津右門
『廿一』

戌十一月三日一□
『一番組』
安政五
午正月　嶋津縫殿壬生
〃〃
『文久三亥正月廿七日大番頭寄』

當番頭より　『御役料高百八拾石』
五番組　島津仲
安政三年辰八月廿五日
『亥正月廿七日大番頭寄』　『十六』

御役料米貳百表
安政二卯九月十一日
〃〃〃〃〃〃〃
貳番組　川上源十郎
「萬延」元年申十月十六日」
文久三亥正月廿七日大番頭

「安政四巳十月廿七日」
當務ニ而
「貳番組」
巳御用人　嶋津主殿
戌十一月三日一篇
「文久　戌十二月十三日御側役」
「五」

□「月八日」
御役料高百八拾石　三番組
安政六年未十二月廿二日
○關山紀
「御軍役奉行勤」
戌十一月三日一篇
小根占居地頭　八月三日
「九」

三番　御役料米百表
奏者番兼務是迄之通
文久三亥二月十三日
喜入多門
「十」

三番御小姓組番頭
「十一」

文久二戌九月廿八日
一番御小姓組番頭　彈正
嶋津仁十郎
〃〃〃
奏者番勤
文久二戌□御用人兼務
「三」

文久三亥八月三日
市田隼人

御役料米貳百俵
四番　島津良馬
奏者番兼務是迄之通
文久二戌十一月十五日
文久三亥正月廿七日大番頭寄
「十三」

當番頭勤　文久三亥五月廿六日
四番　島津主計
文久三戌十一月
（ママ）
「十四」

御役料高百八拾石
五番　嶋津頼母
安政三辰八月廿五日
「十七」

御小姓組番頭
御用人兼務
奏者　北郷主水
文久二戌八月十九日
「十九」

文久二戌十二月十日
六番御小姓組番頭
嶋津權五郎
文久三亥五月四日　大番頭寄
『廿』

『ろ』　當番頭

『定數無』□□□
貳拾貳人賦

□『西十月』
□□
□名越左源太
□勤文久二
戌十一月□
『二十』

嘉永七正月十一日　『高百八拾石』
伊集院靜馬
『文久三亥五月廿七日御側御用人勤
一往御勝手方掛寄』
『十二』

御役料高百八拾石
御勘定奉行
島津左膳
『一』

『高百四拾石』
天保十亥正月『舍人』
○御鐵奉行より　仁禮小吉
『亥六月　奏者番兼務』
『十六』

（○ハ朱書ナリ）

文久二戌
御側御用人勤
北郷波江
『五』

『高百四拾石』
嘉永六正月十一日
詰衆より　嶋津矢柄
『十』

嘉永六正月十一日　右近
詰衆より　嶋津掃部
〃〃
『御役料米貳百俵』
『九』

天保十四卯六月十五日
御鐵砲奉行より　平田靭負
『六』

天保十二丑七月十九日
詰衆より　大野多宮
『三』

嘉永六七月十七日　『梢』
御弓奉行より　澁谷喜三左衛門
『高百八拾石』　『〃〃〃〃』
『十一』

弘化二巳正月十一日
詰衆より　島津内記
『七』

一天保十四年正月廿八日
一神職格　井上駿河守
『高百八拾石』
『三十一』

天保十三年六月廿八日より
神職勤　本田加賀守
『四』

戌十二月十四日　高百四拾石
奏者番兼務　北郷數馬
『二十六』

戌十一月三日御用人勤

『御役料高百八拾石』『十三』
『安政四』
巳八月『十二日』　伊集院伊膳
『御用人勤安政申二月十八日』

文久二年戌三月十五日
當番頭　川上東馬
『奏者番兼務』
『二十五』

安政四丁巳
八月廿五日　嶋津務蔵人
『高百四拾石』『十四』

御役料米百俵
奏者番兼務　島津小平太
『文久二戌十二月十九日』
『二十七』

文久元年酉七月廿日
詰衆より　島津主計
『二』

萬延元申八月廿日　『高百四拾石』　『十八』
谷川次郎兵衛
『御側御用人
御側役兼務』
『文久元酉九月九日』

御役料高百四拾石
御用人勤　二階堂源太夫
『八』

御役料高百四拾石
安政五午十一月三日
御側御用人勤文久二戌三月三日
島津織部
『十五』

御役料米貳百俵
安政七申二月　御用人勤文久三亥二月
嶋津兵十郎
『十七』

御役料高百八拾石
造士館掛被仰付、御用透右も出席いたし候様被仰付候、文久元酉七月七日
堀四郎左衛門
『十九』

御用人勤
文久二戌十一月　入來院恰
『二十一』

文久二年戌三月十五日　高百四拾石
奏者番兼務　新納波門
『二十四』

御役料高百八拾石
文久三亥五月八日
樺山要人
『二十八』

高百八拾石
三番御小姓組番頭
文久三亥七月八日
田尻務
二十九

御役料高百四拾石
『文久三亥□十六日』
赤松主水
『三十』

奏者番兼務
文久二戌三月十四日
二階堂蔀
『二十二』

奏者番兼務
文久二戌三月十四日
島津織之助
『二十三』

『い』　御側御用人
御側役
御記録掛
御目付兼役
御納戸掛
奥掛
定數五人
大奥勤向掛
大奥掛
御側奏者番
拾八人賦

當番頭
文久二戌三月　北郷浪江
『四』

嘉永七寅九月　『安政七年申五月』
御使番御抱守勤より
（疑カ）
『疑姫様其外御子様御稽古事等是迄』
中山次左衛門

『文久元酉九月九日當番頭』
嘉永五閏二月　『高百四拾石』
『御側役兼務』
廿四日御勝手方御用人
谷川次郎兵衛『二』

之通』
『高百四拾石』
『四』

『十三』
戌十一月七日『御役料高米貳百俵』
『御勝手方掛
文久三亥六月』
伊集院平次
御趣法方御用人勤
『〃〃〃〃〃〃』
『御軍役奉行勤』

『八』
『六年未』
安政二年卯五月　『高九拾石』
『〃〃』
御趣法方掛
平田伊兵衛
御船奉行より
『〃〃〃〃〃』
『御側役勤　文久元酉十月一篇之勤』
〃〃〃〃

『九』
萬延二酉正月　『高百四拾石』
伊集院周右衛門

『十』
文久元酉十月
一御側御用人
一御軍役奉行　『百四拾石』
岩下佐次右衛門
一御趣法御用人勤
『〃〃〃〃〃〃』
『御勝手方掛兼務』

『三』
文久二年戌三月三日　『高百四拾石』

『文久元申八月廿日當番頭』
（万延カ）
（谷川ノ〇ハ朱書ナリ）

『七』
嘉永二十二月十七日　『高百四拾石』
有馬舎人
御側役格より

『一』
『高百八拾石』
寺社奉行ニ而
勤
猪飼央
〃〃〃鉚太郎

『十一』
文久二年戌三月三日御側御用人

御側御用人
『當番頭』
嶋津織部
〃〃内蔵

『五』
高『百』四拾石
中村新助
安政五年正月
同二月御改革御用掛
文久三亥二月御勝手方掛

ニ而
鐵砲奉行
『〃〃〃〃』
御右筆頭より
『〃〃〃〃〃〃』
龜山甚之丞
『高百四拾石』

當番頭
高百四拾石
伊集院静馬
一御勝手方掛寄
文久三亥五月

『十二』
文久二戌八月
高百四拾石
向井新兵衛
文久三亥二月御勝手方掛

『十五』
高百四拾石
市來次十郎
文久三亥五月廿七日

御隠居御付
『〇』御側御用人
拾八人賦

『い』　御側御用人格　拾八人賦

萬延元申十二月　高九拾石　肥後八右衛門　『一』
御勝手方掛
三島掛是迄之通

『い』　御用人御側御用人同格　『定數八人』　拾八人賦

御小姓組番頭
奏者番兼務　北郷主水　『一』
文久二戌八月是迄之通兼務

一天保八十一月朔日より　『三』
〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
一御勝手方掛
〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
一嘉永二正月十一日當番頭　二階堂源太夫　『御役料高百四拾石』
〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

嘉永五三月廿日　『高百八拾石』　『四』
〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
御鐵砲奉行より御勝手方掛
〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
『當番頭』琉球在番巳六月十一日　伊集院伊膳
〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

高百四拾石
安政六年未三月廿二日　織部　北條次郎左衛門　『九』
〻〻〻〻〻〻

文久二年戌三月三日　『二』
『十月兼務一番御小姓組番頭』
御用人勤　嶋津仁十郎　『彈正』
『奏者番是迄之通』

御役料米四拾八表　『廿』
御馬預勤　岡田半十郎
安政七申七月

百四拾石　辰三月廿七日　『八』
御鐵砲奉行より
〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
川上笑十郎　正十郎
〻〻〻〻

御役料米貳百俵　『七』
當番頭
文久三亥五月　島津相馬

『當番頭』　入來院恰　『五』

『ろ』『正』　御用人格

『文久二』戌十一月三日　勤『當番頭』　島津内記　『高百四拾石』　『六』

戌十一月三日　村橋佐膳　『〻〻〻〻』　柳正之丞　『十』　高百四拾石　文久二戌十一月

屋久島奉行勤　嘉永七寅六月　相良矢一兵衛

未六月十五日　格　勤方是迄之通　山田十介　『一』

『ろ』　町奉行

拾七人賦

文久戌十月　平川宗之進　『四』

安政六年　未十二月廿六日　藤井綴喜　『二』

『御勝手方掛』　格　『久元三亥二月（文久カ）』　伊地知宗之丞

天保　〻〻　六月　御目付より　〻〻〻〻〻〻　土岐平太夫　『高九拾石』　『一』

『安政二』〻〻〻　『嘉永七正月十五日』〻〻〻〻〻〻　御鐵砲奉行より　〻〻〻〻〻〻〻〻　『高　石』　仙波市左衛門

萬延二年酉正月　格　『鐵砲奉行勤』　勤方是迄之通　『〻〻〻〻〻〻〻〻』　『高九拾石』　本田休兵衛

安政四巳閏五月
格　鎌田愛太夫
鐵砲奉行勤
高九拾石
『五』

高九拾石
御使番勤格
文久二戌二月　江田平蔵
『七』

『い』　御側役　御徒目付支配
御小姓□取次
御目付兼役
定數六七人
拾五人賦

『□
日勤ニ不及、御用之節者罷出、
平日ハ門弟中へ指南方御納戸
猶又引行届候様被仰付候』
格　東郷藤兵衛　『高九拾石』
『御納戸奉行勤』
『七』

嘉永七寅八月廿四日詰衆より『二』
『〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻』
島津求馬　『高百八拾石』
『太守様御方
〻〻〻〻〻〻
『文久三年亥六月四日
一番御小姓組頭』

『高百八拾石『二ノ丸御側御用人『二』
御側役方御用之儀も承候様』
天保十七月八日御廣敷御用人より
『〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻』
山口直記
嘉永七正月十五日當番頭
『〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻』
『御勘定奉行ニ而』『申正月より』

亥二月十日
大久保一蔵
『御役料高九拾石』
『四』

『萬延元申閏三月
御納戸奉行勤』
格　東郷長左衛門　『高九拾石』
『五』

『御勝手方掛』
格　松岡十太夫　『高九拾石』
『文久三亥二月』
『八』

『眞了院之御方へ被掛置候』
格　岡田半七　『高九拾石』
『萬延元申九月
御廣敷御用人勤』
『六』

萬延元申八月廿日
〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻『高百四拾石』
谷川次郎兵衛
『當番頭御側御用人兼務』

大御隠居御付
『〇』御側役
『高九拾石』
『九』

宰相様御附
『〇』御側役
『ろ』　江戸御留守居
『定數三人』拾五人賦
文久三亥正月御役料米千五百俵
妻子養料米七拾五俵
定府
岩元太右衛門
御小納戸頭取兼務
『一』
御役料米七拾五俵
文久三亥八月廿七日
『二』

格　蓑田傳兵衛
御小納戸頭取兼務一往奥掛へ被掛

御役料米千五百俵
妻子養料七拾五俵
御小納戸頭取
新納嘉藤二
江戸御留守居見習勤
『三』

『ろ』　京都御留守居　『定數貳人』

『ろ』　大坂御留守居
『京都御留守居同格、定數貳人』

詰銀七貫九百五拾目
妻子養料米七拾五俵
森川孫大夫
文久二戌十二月
『一』

一詰銀七貫九百五拾目
一妻子養料米七拾五俵
文久三亥六月十六日
木場傳内
一御小納戸頭取
一大坂御留守居見習勤
本役同様御用取扱候様被仰付候
『二』

『い　嘉永元申五月廿三日被召上候、御軍役奉行　拾四人賦』

御役料高百七拾石
御側御用人
岩下佐次右衛門
『一』

『い』　御納戸奉行

御役料米七拾三表
伊木七郎右衛門
安政六未十二月
『五』

御役料米七拾三俵
御廣敷御用人勤
梶原清右衛門
安政五午三月二日
『三』

『定數四人』　拾四人賦

安政四年巳正月『高五拾石』
本郷藤兵衛（東カ）
御側役格勤方是迄之通、不及御勤
西九月廿二日
『一』

御役料米七拾三ノ『マヽ』
折田平八
文久三亥八月
『二』

御勝手方掛兼務
文久元酉十月

『安政五年十一月朔日』
『嘉永五十一月』
『〃〃〃〃〃』
本城源七郎
御供目付より
『〃〃〃〃〃』
『御役料米七拾三ノ』
『四』

『文久元』
酉十月廿三日『御役料米七拾三俵』
伊集院周八
『八』

御役料米七拾三俵　文久二戌十月
御廣敷御用人勤
小野仁兵衛
御廣敷番々頭之場ニ而、以来丸田
孫左衛門両人ニ而三田江相勤候様
可仰付候、
『九』

御役料米七拾三俵
御使番勤　伊集院中二
文久二戌十月朔日

文久二年戌『役料米七拾三俵』
『六』

御側役格『高九拾石』
長左衛門
東郷左太夫
御納戸奉行勤
『〃〃〃〃〃〃』
安政七申閏三月
『一』

宰相様御付

『〇』御納戸奉行

御納戸奉行格

『二月』鹿嶋郷十郎
『三郎様御付候、左候而、御小納戸方差支候節ハ差寄相勤』
江是迄之通相勤候様被仰

『六』
御廣敷御用人勤　御役料米七拾三ゾ
格　猿渡嘉左衛門
天保十二丑九月

『十二』
御役料七拾三俵
定府
山﨑拾
澁谷御屋敷預り勤被仰付、左候而御用之節者御馬方御庭方へ罷出御用相勤候様被仰付候、

『十三』
御役料米七拾三俵
御心付銀三枚三拾貳匁
格　重久甚阿彌
御同朋頭勤
安政五年九月廿二日

『十』
御役料米七拾三俵
貳拾人賄料
定府
格　本科　河村宗澹

天保四巳六月
拾八人賄料　嘉永六二月

寛政十三年（ママ）午正月廿六日物頭一篇之勤者已來被相除、三物奉惣（奉行カ）名を物頭与相唱候様被仰渡、物頭を御鑓奉行ニ御繰下　被仰付、御鑓奉行御役之儀ハ天明元年丑十二月廿一日被相替候、

物頭
『〻〻』
『御兵具奉行』
御鑓奉行
『〻〻〻〻』
『ろ』

拾四人賦
『御兵具奉行』
都而御役料七拾三俵ツヽ、

『一』
『御役料米七拾三俵』
嘉永六七月七日
『〻〻〻〻〻〻〻』
山田轉
無役より
『〻〻〻〻〻』

『二』
御役料七拾三俵
安政三辰十月廿四日
新納伊十郎

『八』
御近習通　御近習通
梅田九左衛門
不及日勤、御用之節者□
指南方致出精萬端行届候様被仰□

『九』

『三』

萬延二年酉正月
折田八郎兵衛
勤方元之通
「〻〻〻〻〻」
『御船奉行勤』

安政四巳閏五月
伊集院源之丞

『文久二戌正月
高奉行勤』
山元新左衛門
『十』

御使番勤
江田五郎左衛門
『四』

御役料米七拾三俵
御記録奉行勤
伊地知小十郎
文久三亥二月廿一日
『十一』

安政六未八月十五日
御鐵砲奉行
橋口杢左衛門
御船奉行勤
「〻〻〻〻〻」
『御船奉行勤』
『五』

嘉永六正月十一日
田中仲次郎
御船奉行格御作事奉行勤より
『十二』

安政六未八月廿一日
加藤權兵衛
『六』

文久三亥八月
喜入九郎
御船奉行勤
『十三』

御役料米七拾三俵
御使番勤
安政七□月一日
猪俣爲左衛門
『七』

『ろ』
『御兵具奉行席』
御弓奉行
『〻〻〻〻〻』

『文久三亥五月』
天保八十二月廿三日
「〻〻〻〻〻〻〻〻〻」『高九拾石』
鎌田愛太夫
御目付より
「〻〻〻〻〻」
『町奉行格』
『一』

天保十二四月廿一日
「〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻」『高九拾石』
本田休兵衛
御目付より
「〻〻〻〻〻」
『町奉行格』
『二』

此『三』より外七拾三『俵』ツヽ

御役料米七拾三俵
伊勢平四郎
文久三年亥五月九日
『三』

天保十三七月十一日
河野八郎左衛門
無役より
『四』

嘉永三正月十一日
御目付より　岩下新太夫
『五』

嘉永六七月十七日
無役より　細瀧權八
『六』

嘉永五五月七日
町奉行格ニ而　種子嶋加次右衛門
『七』

安政六年未十一月廿三日
川上郷兵衛
『八』

安政六年未十二月廿二日
種子嶋休蔵
『九』

安政七年申二月十二日
澁谷喜八郎
『十』

御役料米七拾三俵
文久三亥五月九日　伊集院十右衛門
『十一』

大野清左衛門
『十二』

『十三』

御役料米七拾三俵
上村直兵衛
文久三亥五月九日

戌正月廿四日
和田助七
『十四』

御役料米七拾三俵
島津左内
文久三亥五月九日
『十五』

安田助右衛門
『十六』

御役料米七拾三俵
三崎平太左衛門
文久三亥五月九日
『十七』

山田大碩
『十八』

御役料米七拾三俵
上野藤馬
文久三亥五月九日
『十九』

北郷良馬
『二十』

御役料米七拾三俵
小森新蔵
文久三亥五月九日
『二十一』

御役料米七拾三俵
國分平太夫
文久三亥五月九日
『二十二』

高﨑喜兵衛
『二十三』

御役料米七拾三俵
文久三亥五月
倉山民五郎
『二十四』

御役料米七拾三俵
文久三亥五月九日
喜入雄次郎
『二十五』

御役料米七拾三俵
文久三亥五月九日
堀彌八郎
『二十六』

『ち』　久見﨑御船奉行　鹿児島御船奉行同格　拾貳人賦

『ち』　御船奉行　七嶋支配　『定數五人』　拾貳人賦

御役料高九拾石
町奉行
文久三亥八月廿九日
江田平蔵
『一』

嘉永三正月二日物奉行より
「安政六未正月十五日御鐵炮奉行ニ而」
橋口杢左衛門
『二』

文久三亥八月廿九日
御兵具奉行
御船奉行勤ニ而
喜入九郎
『四』

御役料米四拾八俵
御作事奉行勤
嘉永七寅閏七月朔日
松山八右衛門
『五』

安政三辰四月晦日
樺山四郎左衛門

嘉永七四月廿六日
道奉行より
折田八郎兵衛

安政五午正月
御船奉行ニ而物奉行勤
「〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻」
坂本權之丞
『御勝手方調掛』
『産物方掛』
『八』

福崎半次郎
『六』

御役料米五拾八俵
高奉行勤
伊東正兵衛
安政七申正月十五日
『十』

『十一』

御役料米四拾八俵
道奉行勤
肝付清右衛門
文久元酉八月十八日
『九』

『十三』

日高與一左衛門

本田彌右衛門
『十二』

御役料米四拾八俵
川上左太夫
文久元酉十一月十五日

御役料米五拾八俵
格物奉行勤
湯地市兵衛
安政六未二月十一日
『十四』

御船奉行格

嘉永五子七月
未六月一五日
『物奉行勤格』
金山奉行より
月野木萬右衛門
『十五』

『ろ』　御使番

『定數七人』拾壹人賦

巳八月　『七拾三ノ』
御鐵砲奉行
御使番勤
江田五郎左衛門
『二』

安政四丁巳九月八日高奉行
『〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃』
『安政七年申三月』
大山彦左衛門
『八』

嘉永七四月『七十三ノ』『爲』
御右筆頭格より『〃』
猪俣猪右衛門
『三』

戊十月　『七拾三ノ』
『御納戸奉行』
『一箇勤』
『〃〃〃』
伊集院中二
『一』

『六』

『七』

御役料米四拾八俵
安政六未九月十一日
早川務

安政七申正月　『御役料米四拾八ノ』
井上新右衛門

御役料米五拾八俵
道奉行勤
安政三辰四月
丸田泰蔵
『五』

御役料米四拾八俵
御作事奉行勤
嘉永□□
川□九郎
『四』

御役料米四拾八俵
萬延元申九月
肥後五左衛門
『九』

御役料米七拾五ノ
新納彌太右衛門
『十』

『十一』
御役料米七拾五俵
御役料銀壹貫六百目
迫田甚蔵
長崎在勤之節被下候、
長崎御付人勤琉球座物掛
文久元酉五月

『十二』
文久二酉九月
（ママ）
田中源五左衛門

『十三』
文久三亥正月十一日
『御船奉行勤』
黒岩正兵衛

『十四』
亥五月『四十八俵』
鈴木宇左衛門

『十五』
文久三亥八月
汾陽次郎右衛門

『十六』
『郡奉行勤』
相良角兵衛

『十七』
御役料米四拾八俵
御馬預勤
御召馬乗兼務
文久三亥八月
川上十郎左衛門

『十八』
文久三亥九月
平田善太夫

『十九』
寺田平右衛門

『二十』
御役料米四拾八俵

『二十一』
御役料米四拾八俵
格
郡奉行勤
文久二戌正月
山口一次

『二十二』
役料米五拾八ノ
格
道奉行勤
竹下覺左衛門

『二十三』
文久二戌十二月
役料米五拾八ノ
格
高奉行勤
堀與左衛門

『二十四』
御役料米四拾八俵
御庭奉行勤
御鳥預頭取兼務
格
園田郷右衛門

『二十五』
御用之節者是迄之通
御廣敷江罷通候様被仰付候、
萬延二酉三月

御馬預勤
格　檢見﨑四郎
安政五午正月

『い』　御小納戸頭取　　拾壹人賦

文久三亥
御小納戸頭取
正月十五日　山本五郎右衛門　『三』

詰銀七貫九百五拾目
妻子養料七拾五俵
大坂御留守居見習勤　木場傳内　『四』

御役料米四拾八俵
不及日勤、御用之節者罷出候様
被仰付候、且又奥江も御用之節
者是迄之通罷通候様被仰付候、
安政四巳正月　格　有馬衛守　『六』
御祈禱方是迄之通被仰付候、
御軍役方兵道御役者

文久三亥二月
格　阿多六郎
高奉行勤

御役料米千五百俵
妻子養料七拾五俵
兼務　岩元太右衛門　『一』
江戸御留守居
文久三亥正月

御留守居格　七拾五俵
御小納戸頭取
一性奥掛へ被掛置候、
文久三亥八月　蓑田傳兵衛　『二』

御役料米千五百俵
妻子養料七拾五俵　新納嘉藤二　『五』
江戸御留守居見習勤
文久三亥正月

御役料米四拾八俵
御小納戸兼務　『七』

大御隱居御付
〜〜〜〜〜〜
『〇』御小納戸頭取　　拾壹人賦

御隱居御付
『〇』御小納戸頭取

格
樂水殿付　櫻井半之丞

『い』　御廣鋪御用人　　拾人賦

御役料米五□文□七月廿六日
御役料銀三枚三拾貳匁　久土目月窓
高輪福壽亭御神殿掛　格
是迄之通　『廿二』

御役料米七拾三ノ
天保十二九月　『三』
御納戸奉行格ニ而　猿渡加左衛門

御役料米四拾八ノ
文久二戌二月　『十一』
三郎様御方へ　國分藤十郎
相勤候様被仰付候、

御役料高九拾石
御側役格　岡田半七
眞了院之御方江被掛置候、
萬延元申九月
『一』

御役料米四拾八俵
勝姫様御方へ被掛置候、
文久二戌六月
相良治兵衛
『十三』

文久二戌十月
『廿一』

文久二戌十月
河野仲次郎
『十六』

御役料米四拾八俵
一性是迄之通玉里江被掛置、眞了院ニも掛同様兼相勤候様被仰付候、
萬延元申九月廿五日
有馬伴左衛門
『十二』

梶原清右衛門
『二』

文久元酉八月
三郎様御方へ被掛置候
河俣仲太夫
『八』

御役料米四拾八ノ
安政四巳六月
相良左衛門喜
『六』

文久二戌十月
御役料米七拾三俵
御納戸奉行御廣敷番々頭之場ニ而、以來丸田孫左衛門両人ニ而三田江相詰候様被仰付候、
小野仁兵衛
『四』

『九』

御役料米四拾八俵
文久三亥五月
藤井良蔵

御役料米四拾八俵
御廣敷番々頭勤
文久三亥三月
中西十郎左衛門
『十七』

御役料米四拾八俵
御切米百廿俵
中西十郎左衛門
『十七』

御役料米四拾八俵
御役料米四拾八俵
文久二戌六月
友野七郎右衛門
『十四』

格本科
三郎様御方へ相勤、
御本丸御用も兼相勤候様被仰付、

御役料米七拾俵
御同朋頭勤格
安政七申正月
上村良阿彌
『廿』

嘉永七七月
物奉行より
福永仁右衛門
『御役料米四拾八ノ』
『五』

『十八』

巳八月
御廣敷御用人　孫兵衛
土持強兵衛
役料五拾八ノ
『七』

文久二戌二月
三郎様御方へ相勤候様被仰付、

文久三亥五月
肝付甚左衛門
『十九』

御役料米四拾八俵
二丸江相勤候様被仰付候、
文久二戌十月
中西水之丞
『十五』

御役料米四拾八俵
眞了院之御方江被掛置候、
文久二戌六月
山本十多郎
『十』

役料米四拾八俵
汾陽正左衛門
勝姫様御方へ被掛置候、
萬延元申五月

御隠居御附

『〇』御廣鋪御用人

『い』　教授　御用人格
『定數壹人』　拾人賦

御用人格　未六月十五日
嘉永五正月　山田十助
〃〃〃〃〃
御記録奉行見習助より
〃〃〃〃〃〃〃〃〃
御役料高百四拾石
『一』

『い』　御右筆頭　『定數□人』　拾人賦

御役料米五拾八俵
道奉行勤　永田與右衛門
文久二戌十月
『一』

役料米五拾八俵
大迫藤十郎
文久元酉六月
『二』

御役料米五拾八俵
川上十郎兵衛
文久二戌十二月
『三』

弘化四年未四月
格　曾山喜惣太
道奉行勤
『四』

御役料米五拾八俵
格　井上備前守
神職勤
弘化二年午正月
（ママ）
『五』

是より御用人申渡、

『ち』　御作事奉行　『定數五人』　拾人賦

嘉永七閏七月　『御役料米四拾八メ』
御船奉行ニ而　松山八右衛門
『〃〃』
『一』

『二』
嘉永五二月『御役料米四拾八ノ』
御使番　川上七九郎

『三』
嘉永三見習より　黒岩庄兵衛
『御使番ニ而勤方是迄之通
文久三亥正月十一日』

『四』
金山奉行勤
安政五午正月　濱田源右衛門

『五』
『安政七年申正月十一日　御役料米三拾ノ』
嘉永二七月
『〃〃〃〃〃』　帖佐爲右衛門
御目付より
『〃〃〃〃〃』

『六』
御役料米貳拾七俵
御役料銀三枚三拾貳匁
萬延元申九月廿日　伊集院早太

『七』
文久元酉十月　迫水善左衛門

『八』
御役料米貳拾七ノ
文久二戌正月　高崎藤太

『い』　御記録奉行御近習通『定數三人』　拾人賦

『七』
御役料米七拾六ノ
助教勤
文久二戌十月朔日　山内作次郎

『四』
御役料米七拾五俵
御藥園奉行勤
萬延元申四月　木原甚助

『十一』
御役料銀六枚三拾目
文久三亥八月　西筑右衛門

『九』
御供目付勤
文久二戌六月十六日　山口彦五郎

『十』
御役料米貳拾七俵
文久三亥正月十四日　平田藤五郎

『八』
御役料米六拾三〆
佐多佳八郎
文久二戌十二月

『三』
『御役料米六拾三俵』
嘉永五五月見習より
『〻〻〻〻〻〻〻〻』
伊藤彦介
『安政六未九月』

『二』
御役料米六拾三俵
町田孫一郎
安政四巳八月

『一』
安政四巳九月八日御使番ニ
『〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
而勤方是迄之通、
〻〻〻〻〻〻〻』
『御役料米七拾三俵』
伊地知小十郎
『御兵具奉行
文久三亥二月』

『五』
『萬延元申五月』
『〻〻〻〻〻〻〻
嘉永三戌四月より
申
『〻〻』
五月
橋口與一郎
『御役料米六拾三俵』

『六』
『御役料米六拾三〆』
萬延二酉正月
五代孫次郎
格ニ而添役勤
『〻〻〻〻〻』
『習□頭取勤』

『ろ』　長崎御附人『定數貳人』　拾人賦

『一』
『御役料米七拾五俵　御使番文久元酉五月』
嘉永七正月奥掛書役勤より如元、
『〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻』
迫田甚蔵
『御役料銀壹貫六百目
長崎在勤之節被下候、　琉球座勤掛』

『二』
御役料米五拾八俵
御役料銀壹貫六百目
竹下清右衛門
長崎在勤之節被下候、
文久三亥九月四日

『ろ』　長崎御附人格

『一』
御役料米五拾八俵
御用部屋書役勤
伊集院助六
御徒目付兼役
安政四巳四月

御軍賦役勤
萬延元申閏三月
坂元彦五郎
『三』

『道奉行　文久三亥五月』
〃〃〃〃〃〃〃
格
野村彦兵衛
勤方是迄之通、
〃〃〃〃〃〃〃
『御役料米五拾八ノ』
『二』

安政七年申三月
〃〃〃〃〃〃〃

『ち』　高奉行

『定數五人』　拾人賦

安政七年申三月
〃〃〃〃〃〃〃
『十一』
勤方是迄之通、
〃〃〃〃〃〃〃
井上嘉左衛門
『屋久島奉行勤　文久二戌十一月』

御役料銀三枚三拾貳匁
御役料米貳拾七俵
『四』
堀八郎右衛門
御細工奉行勤
嘉永四亥二月

『山奉行勤　役料米三拾貳俵』
『十二』
上村半兵衛
萬延二年
酉正月
『御役料米三拾俵』
五代庄太夫

『御細工奉行勤同年同月』
『十三』

『御細工奉行勤』
『安政三正辰正月
〃〃〃〃〃
中村八兵衛
『御役料米廿七俵
御役料銀三枚三拾貳匁』

『御兵具奉行』
『一』
嘉永三正月
〃〃〃〃〃
『御役料米四拾八ノ』
山本新左衛門
御使番ニ而
〃〃〃〃〃
『文久二戌正月』

嘉永五正月
『三』
御使番格ニ而
〃〃
寺田平右衛門

『安政二卯十二月　一篇之勤被仰付候』
『八』
嘉永二十一月
〃〃〃〃〃
迫田賢助
御勝手書役より、勤方如元、
〃〃〃〃〃〃〃

御船奉行ニ而
〃〃
『御役料米五拾八俵』
『二』
伊東正兵衛
高奉行勤
〃〃〃〃〃
『安政七申正月』

御役料米五拾八俵
御使番格　堀與左衛門
文久二戌十二月
『五』

御使番格
文久三亥二月　阿多六郎
『六』

御役料銀六枚三拾目
山奉行勤　大山彦右衛門
文久元酉四月
『十四』

御役料銀六枚三拾目
金山奉行勤　黒葛原新左衛門
嘉永七寅正月
『七』

御役料米廿七俵
銀三枚三拾貳匁
御細工奉行勤　境田善助
安政四巳閏五月
『十』

御役料米三拾四ノ
御勝手方書役勤　日置半兵衛
文久二戌正月
『十五』

御役料米五拾八俵
御船奉行格　湯地市兵衛
安政六未二月
『一』

『ち』　物奉行

御役料米四拾八ノ
御廣敷番頭　小田十郎左衛門
文久二戌八月
『十六』

御役料米四拾八俵
御廣敷番之頭勤　中村傳作　定府
文久二戌八月
『十七』

『定數五人』　拾人賦

『戌四月』　『萬延元申四月』
『〃〃〃』
御小納戸より
『〃〃〃〃〃〃〃』
『一性金山奉行寄掛り』　伊東仙太夫
『〃〃〃〃〃〃〃〃〃』
『十八』

□奉行格
嘉永二十二月
〃〃〃〃〃〃
御小納戸格
〃〃〃〃〃
文久三亥三月
『米四拾八俵
〃〃〃〃〃』
友野清右衛門
『三』

申十二月
『米四拾八俵』
安政四丁巳九月八日
〃〃〃〃〃〃〃〃〃
『五郎』
三原藤十郎
『〃〃』
『萬延元申□月□』
『廿一』

御役料米四拾八俵
御船奉行格
安政六未六月
月野木萬左衛門
『二』

『安政元子十二月』（ママ）
嘉永七十二月
『〃〃〃〃〃〃〃』
四本休左衛門
御目付より
『〃〃〃〃〃』
『十』

『米五拾八俵』
嘉永七九月
『〃〃〃〃』
高田尚五郎
御裁許掛より
『〃〃〃〃〃〃』
『九』

嘉永三二月
産物方掛
『〃〃〃〃』
黒木源右衛門
『四』

米四拾三〆
寺社方取次勤
川上林助
格
嘉永六丑九月
『三十五』

文久三亥□月十一日
『銀六枚三拾目』
見習格より
『〃〃〃〃〃』
橋口次郎太
『廿八』

嘉永七四月
『子』（ママ）
谷元吉左衛門
御小納戸格より
『〃〃〃〃〃〃〃』
『米四拾八俵』
『八』

嘉永七子二月より（ママ）
篠原伊右衛門
米三拾俵
『七』

『織屋掛　安政六未六月』

米三拾俵
郡奉行勤
文久三亥六月
吉田七郎
『三十』

安政四年
□月
『米五拾八俵』
中村喜多右衛門
『琉球産物方掛』
『十三』

御役料米貳拾七俵
郡奉行勤
文久三亥六月
黒葛原源助
『卅二』

『米貳拾四俵壹斗』
『十五』

安政三辰七月
勤方是迄之通、
『〃〃〃〃〃』
郷田源八
『御勝手方調掛
是迄之通』
『銀六枚三拾目』
『十二』

銀六枚三拾目
郡奉行勤
文久三亥六月
田中休左衛門
『卅一』

『安政二卯三月』
天保四七月
『〃〃〃〃』
『米八拾七俵』
見習より
基太村助左衛門
御勘定方小頭より
『〃〃〃〃〃〃〃〃』
『銀三枚三拾貳匁』
『十一』

銀六枚三拾目
鑄製方掛
『十四』

『御徒目方（マヽ）江も掛被置候』
竹下覺之丞
『安政六未十月』

御近習通
成田正右衛門
錫鑄物方へも心添いたし候儀是迄之通相心得候様被仰付候、
安政六未九月

御勝手方調掛是迄之通、
三原善兵衛
安政七申十月
『十六』

萬延元申五月
御代官勤
土師十兵衛
『十九』

御役料米四拾三俵
織屋掛
吉崎壮八郎
萬延元申六月
『廿』

御勝手方調掛
琉球産物掛
橋口次兵衛
是迄之通、
萬延元申九月
『廿三』

御細工奉行勤
倉野善助
安政三辰六月
『十六』

御細工奉行勤
三雲太郎左衛門
安政五午正月
『十八』

『定數六人』

御馬預

拾人賦

安政七申正月
三原次右衛門
『十七』

文久元酉十月
市來清十郎
『廿四』

寺社方取次勤
田原仲之丞
安政六未正月
『十九』

文久元酉九月
税所七郎右衛門
『十九』

嘉永二二月
「ヽヽヽ」
川北十郎
御徒目付より
「ヽヽヽヽヽヽ」
『四』

『四亥』二

御役料米三拾四俵
御細工奉行勤
重久七太夫
安政七申二月
『十四』

『米貳拾七俵　銀三枚三拾貳匁』
嘉永七（ママ）『子』正月
早川黒
御小納戸見習より
「ヽヽヽヽヽヽヽヽ」
『六』

『八』

嘉永七（ママ）子五月　六村清左衛門　『銀八枚四匁』
御馬預見習より
『〻〻〻〻〻〻』『御召馬乗勤』『定府』

安政七申正月　田中七右衛門　『十三』

嘉永七（ママ）子十二月七日　林藤一郎　『銀六枚三拾目』『九』
見習より
『〻〻〻〻』

銀六枚三拾目　田原正左衛門　『廿四』
御召馬乗兼務
文久三亥六月

金山奉行勤
萬延元申六月　奥勇蔵　『十六』

萬延元申十二月　伊地知長兵衛　『十七』

嘉永七（ママ）『子』正月廿二日　志岐小左衛門　『銀六枚三拾目』『七』
見習より
『〻〻〻〻』

『安政元』『米貳拾九俵』
辰正月　吉田次郎四郎　『十一』
『安政四巳八月
一篇之勤被仰付候』

『安政七』『米四拾八俵』
申二月十日　相良彌兵衛　『十五』
御馬預りニ而
山奉行勤

御役料四拾八俵
御使番格　檢見崎四郎　『二』
安政五午六月

米四拾八俵
道奉行　岡田半十郎　『三』
萬延元申五月

御鳥見頭勤
嘉永六丑八月　寺尾庄次郎　『五』

米三拾〆　野村太左衛門　『九』
一性御召馬乗勤
文久二戌正月

安政七年申正月　竪山八郎　『十二』
『米四拾八〆』

『安政七年申二月』『米四拾八俵』『一』
『〻〻〻〻』
『嘉永五閏二月御召馬乗兼務
『〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻』川上十郎左衛門
『文久三亥八月
御近習通是迄之通、御使番勤方是迄
之通』

銀六枚三拾『マ、匁カ』枚　志岐正兵衛　『廿三』
文久三亥二月

御役料米三拾俵　『十』

『い』　御小姓頭取　『定數貳人』拾人賦

一性御召馬乗勤
安政二卯□月
義岡八次郎

『い』　御側目附　『定數貳人』六人賦

『〇』大御隠居御付
御側目付

『い』　御小納戸『□掛□定數五人
御目付兼務』　六人賦

御小納戸頭取
三郎様方へ相勤
山本五郎右衛門
候様被仰付候、
文久三亥正月
文久二戌七月十人賦料
『一』

米四拾八俵
御小納戸頭取格
櫻井半之丞
樂水殿へ被付置候、兼務
『二』

文久三亥正月十五日『米四拾八俵』
御小納戸
岸良七之丞
『十』

文久元酉九月

申春江戸
〻〻〻〻〻
安政六未六月廿一日
花謙蔵
『三』
御小納戸見習
〻〻〻〻〻〻
『米四拾八俵　文久二戌正月　十人賦料』

文久元年酉七月廿日
『米四拾八俵』
野村傳左衛門
『六』

『文久三亥五月』
『米四拾八俵』
松方助左衛門

文久元酉五月見習より
『〻〻〻〻〻』

米四拾八俵
文久元酉十月
須磨守之丞
『六』

米四拾八俵
格
有馬金之助
樂水殿江被掛置候、
嘉永三戌五月
『十三』

米四拾八俵　格
英之進殿へ
被掛置候、
文久三亥三月
町田龍右衛門
『十四』

『米四拾八俵』
法元太郎左衛門
鈴木宇左衛門
〻〻〻〻〻〻
『九』

『文久二戌九月』

『七』

『三郎様
和泉様御附』『御方江相勤候様被仰付候』
『〻〻〻〻〻〻』御小納戸 坂元平左衛門『四』
一 御役料米四拾八俵

『十五』
御役料米四拾八俵
格 本田孫九郎
圖書殿へ被付置候、
文久二戌三月

『十六』
格 山田小平太
圖書殿御付
文久二戌九月

『十七』
御役料米四拾八俵
格 篠崎甚七
二ノ丸御子様御付
文久□□三月

『十八』
米四拾八俵
田中清右衛門
周防殿江被掛置候、
文久□三月

『十九』
格 貴島平八
二ノ丸御子様
御方へ被掛置候、
文久□三月

『廿』
米四拾八俵
周防殿江被掛置候、
格 新納休右衛門
文久三亥八月

『八』
米四拾八俵
谷村小吉
三郎様御方へ
相勤候様被仰付候、
文久二戌六月

『十二』
御役料米四拾八俵
森岡清左衛門
文久三亥八月

米四拾八ノ
木藤角太夫
文久二戌六月

『〇』御隠居御付
御小納戸 六人賦

『〇』御小納戸格
『い』 御抱守 六人賦

『〇』御小納戸見習 六人賦料

『い』 御供目附 御近習通『定數六人』 六人賦料『十一〻〻』

『十一』
米四拾八俵
高田十郎右衛門
文久二戌十二月

『十』
米四拾八俵
海江田武次
文久二戌五月

『九』
米四拾八俵
吉井中助介〻
蒸汽船乗頭
文久三亥五月

『七』

『十二』
『米四拾八俵』
安政二年卯五月表御小姓より
『〻〻〻〻〻〻』
平田平六
（ママ）
『文久二申
格目附 御軍賦役勤 文久三亥七月』

『六』

文久元酉十月　大山仲兵衛

御役料米四拾八俵
文久三亥七月　江夏蘇介　『十四』

京都□江勤　『米四拾八俵』　『十三』
『孝』
□二郎
『〃〃〃』

□
□五郎
『安□十人賄料』

米四拾八俵
安政二卯四月　篠崎彦次郎十郎
〃〃　『三』

御役料米四拾八俵
萬延元申四月　前田龍五郎

嘉永七（ママ）『子』『八月』七月
『〃〃』　『米四拾八俵』
四本休次郎
御馬廻より
『〃〃〃〃〃』

米四拾八俵
□
中原周助　『四』

安政七年
〃〃〃〃
二月十一日
〃〃〃〃〃〃
岡八郎太夫
『〃〃〃〃〃〃』

安政七年『米四拾八俵』二月十一日
原田才之丞　『五』

『〇』御供目付格

『ろ』　御目付　『表御目付拾五人
御□八人』六人賦

文久元酉十月
御供目付　奈良原喜左衛門　『八』

米四拾八俵　銀七枚廿壹匁
格　立花直記　『十五』
江戸御留守居付役勤
安政六未三月

米貳拾七俵
銀三枚三拾貳匁
文久三亥六月　五代東之丞　『廿九』

『安政四巳七月』　『三』

『米貳拾七俵　銀三枚三拾貳匁』
嘉永五子四月
『〃〃〃〃〃〃』

宮原源之丞

米貳拾七俵
銀三枚三拾貳匁
鮫島吉左衞門
文久二戌十二月
『廿六』

文久三亥
七月
有川矢九郎
『三十』

米五拾八俵
最上善之助
道奉行
御裁許掛勤
文久三亥二月十二日
『一』

鈴木彌藤次
安政三年辰十一月
『三』

白尾登五右衞門
『安政七年申正月十二日』
『表御小姓より』
ゝゝゝゝゝゝ
『十』

日勤ニ不及、御用之節者罷出、平日門弟中指南方猶亦行届候様被仰付候、

銀六枚三拾目
西郷宗次郎
文久三亥二月
『廿七』

銀六枚三拾目
文久三亥五月
小倉喜右衞門
御裁許掛
『廿八』

米貳拾七俵
銀三枚三拾貳匁
福崎助七
安政六未□
『七』

米五拾八俵
肥後直次郎
萬延五申『マヽ』
閏三月
御裁許掛り
『十四』

安政四巳
九月
『米貳拾七俵』
野村勘兵衞
『銀三枚三拾貳匁』
『四』

『米貳拾七俵』
文久元酉十月廿七日
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
川口市左衞門
御目付
『ゝゝゝ』

安政
申二月十二日
鎌田十五
『銀六枚三拾目』
『十二』

安政五午十一月
永江伊右衞門
『六』

『米貳拾七俵 銀三枚三拾貳匁』
『安政四』
巳
九月
小林一學
『五』

『米貳拾七俵』
『十一月』
安政六未六月
ゝゝ
藥丸猪之助
『銀三枚三拾貳匁』
『八』

御裁許掛
『文久元酉十一月宗門改役勤』『廿一』

銀三枚三拾匁
文久二戌十二月
御軍賦役勤　小野強右衛門
文久三亥八月
『廿五』

御役料米四拾八俵
安政六未十二月
碇山八郎右衛門
『九』

米五拾八俵
御裁許掛
萬延元申六月
樺山休兵衛
『十五』

道奉行
御裁許掛
園田彦左衛門
『十六』

米貳拾七俵
『十九』

御役料米貳拾七俵
銀三枚三拾貳匁
文久二戌十二月
三雲藤一郎
『廿四』

安政七申□月
琉球産物掛
米五拾八俵
御裁許掛
安政七申正月
米良助右衛門
『十一』

御役料銀六枚三拾目
安政七申二月
谷川次郎左衛門
『十三』

米五拾八俵
御裁許掛
萬延元申九月
近藤七郎左衛門
『十七』

『十八』

銀三枚三拾貳匁
萬延元申十月五日
伊集院金之進

米五拾八俵
文久元酉□月
谷村孫八
『廿二』

米四拾三俵
萬延元申十二月
益滿新之丞

文久元酉六月
名越彦太夫
『廿』

『嘉永□
五月廿三日
被召立候』

『御軍賦役』
『御目付兼役』
『〃〃〃〃』

『六人賄料』

米七拾五匁
助教兼務
文久元酉十一月
伊地知正治
『四』

米三拾五俵
文久元酉十二月
坂元廉四郎
『五』

米三拾五俵
文久二戌十月
大山格之助
『八』

米三拾五俵
文久二戌八月
田代宗次郎
『六』

『一』

『七』

嘉永五八月
「〻〻〻〻〻〻」
勘定方小頭横目勤より
「〻〻〻〻〻〻〻〻」
坂本彦五郎
『長崎御付人格
萬延元閏三月』

米四拾八俵
御供目付
文久三亥七月
平田平六
『十』

米三拾五〆
文久二戌十月
鈴木壮七

米三拾五〆
集成館掛
文久三亥八月
中原猶助
『十二』

米三拾五俵
助教兼務
文久三亥正月
五代競太
『九』

安政二二月
『米三拾五俵』
田原直助
『二』
鑄製方掛より
「〻〻〻〻〻〻」
『書籍方掛年号可糺』

御役料米四拾八俵
安政四巳七月
御廣敷番之頭勤
岩山喜平次
『十三』

嘉永五八月御裁許掛より
『銀六枚三拾目』
「〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻」

米四拾三俵
定府
御廣敷番之頭勤
西村仁平
『十二』
高輪鶴之渡へ相勤、上御屋敷・高輪御庭方へ被掛置候、
嘉永六丑四月

嘉永五八月十九日
御勘定方小頭勤より
野村彦兵衛

嘉永五十二月御裁許掛より
『米五拾八俵』
「〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻」

『十』
肥後平九郎
『安政六未八月廿六日
〻〻〻〻〻〻〻〻〻
當御役ニ而宗門改役勤
〻〻〻〻〻〻〻〻〻』
『御細工奉行勤　萬延元申十一月』

『二』
『米五拾八俵』
安政三辰四月　丸田泰蔵
御使番ニ而
『〻〻』

『一』
米四拾八俵
御船奉行
文久元酉八月　肝付清右衛門

『五』
『米五拾八俵』
弘化四『未』四月　曾山喜惣太
御右筆頭格より

『九』
最上善之助
『安政六未八月廿六日
〻〻〻〻〻〻〻〻〻
當御役ニ而宗門改役勤
〻〻〻〻〻〻〻〻〻』
『文久三亥五月』

『廿三』
『萬延元』
申十二月
三原喜之助
『米五拾八俵』
嘉永二九月
『〻〻〻〻』
御勘定小頭横目勤より
『〻〻〻〻〻〻〻〻』

『十五』
米四拾八俵
安政三
辰正月　川上彌四郎

『三』
『米五拾八俵』
弘化二八月
『〻〻〻〻』　竹下覺左衛門
『御使番格』
唐船改役より
『〻〻〻〻〻〻』
『安政六未六月』

『廿二』
『米五拾八俵』
嘉永四七月
〻〻〻〻　土師吉兵衛
見習より
〻〻〻
『萬延元申五月』

『六』
『米四拾八〆』
安政五十一月
『〻〻〻〻〻』　愛甲清之丞
御右筆より
『〻〻〻〻』
安政二『卯』正月御作事奉行

『廿四』
御役料米四拾三俵
御廣敷番之頭勤
織屋掛　谷村彦助
文久三亥三月

米貳拾四俵壹斗
山之内庄之丞
萬延二酉三月

『米四拾八〆』
弘化二十一月
『〻〻〻〻〻』　兒玉喜藤太
御目付より
『〻〻〻〻〻』
『嘉永五子七月　一篇之勤被仰付候』

『廿五』

御役料銀六枚三拾枚『マヽ、匁カ』
西高十五郎
御勝手調掛是迄之通、
文久元酉四月
『廿六』

郡奉行勤
文久二戌十月
山田平蔵
『廿九』

銀六枚三拾目
郡奉行勤
文久二戌正月
猿渡彦左衛門
『廿七』

米三拾四俵
格
勘定方小頭勤
安政六未六月
川西嘉右衛門
『三十四』
『終』

（上下段ヲ分ケル線ハ編者ニヨル）

備忘抄

（表紙）

備忘抄　上

1

備忘抄上三冊

宮中流矢事

宮ノ御首ヲハ取テケリ、悲ト云モ疎也、寺法師律淨坊日印本書十四巻作日亂下傚之、ノ弟子ニ伊賀坊、乗圓坊慶秀カ弟子ニ刑部房、残留テ命モ惜ス戦ケリ、白刃ヲ拭ニ隙ナシ、爰ニシテ飛驛判官カ郎等多討レニケリ、律淨坊日印モ討死シテ失ニケリ、心ハ猛思ヘ共、小勢ハ力及ハスシテ、伊賀房・刑部房奈良ノ方ヘ落ニケル、彼律淨坊ト申ハ、兵衛佐頼朝流人ニテ伊豆ニオハシマセシ時、忍テ諸寺諸山ノ僧徒ニ祈ヲ附給ケルニ、寺ニハ此律淨坊ヲ以テ師匠ニ憑給ヘリ、日印長門本作日亂□八幡宮ニ参籠スル事千日、無言大般若ヲ讀ケルニ、七百日ニ當ル夜、御寶殿ヨリ金ノ鎧長門本作甲、ヲ賜ト示現ヲ蒙タリケレハ、悦ヲナシ、夜ヲ以テ日ニ継伊豆國ヘ馳下リ、此由兵衛佐殿ニ語申、聞給テ、如何様ニモ末憑モシキ事ニコソト夢合シ給テ、世ニ候ハヽ思知ヘシト宣タリケルカ、長門本云、騒動アリト聞、日亂急馳上リ此事ニアヒテ死ニケリ云々、平家滅亡ノ後ニ兵衛佐殿三井寺ヘ尋給ケルニ、治承ノ比高倉宮ノ御伴申テ光明山ノ鳥居ノ邊ニテ打死也ト申タリケレハ、不便ノ事ニコソ、且ハ祈ノ師也、此下長門本注于下、又夢ノ勸賞モ充給ハント思シニ、死ケル事ノ無慙サヨ、但其人ナケレハトテ、兼テ存セシ事争カ空カルヘキトテ、伊賀国山田郷ヲ三井寺ヘ寄ラレテ、長門本云、夢ノ勸賞ニモ孝養スヘシ、是併律淨坊カ故ナリトテ云々、律淨坊カ孝養報恩退轉ナシトソ聞ユル、

右参考源平盛衰記、

東鑑治承五年五月八日條云、園城寺律静房日胤弟子僧日慧号帥島津本師公公、参著于鎌倉、彼日胤者千葉介常胤子息、前武衛御祈禱師也、仍去年五月、自伊豆國遥被附御願書、日胤給之、一千日令参籠石清水宮寺、無言而令見讀大般若經、六百卷之夜、眠之内自寶殿賜金甲之由感霊夢、日据島津本、潜カ成所願成就思之處、翌朝聞高倉宮入御于三井寺之由、高倉宮密々入御三井寺、治承四年五月十五日、挑武衛御願書於日慧、奔参宮御方、遂同月廿六日於光自治承二年九月至四年五月十五日大抵六百日、又盛衰記七百日、逆量至明山鳥居為平氏被討取訖、而日慧相承先師之行業、果二年六月、千日所願、守遺命欲参向之處、都鄙不静之間、于今延引之由申之云云、

廿二箱三十五

忠久御下向之日記表裱紙一軸也、

鎌倉若宮八幡宮別當八月一日八幡御寶殿之トヒラ開カントシ玉ヘハ、日来ナカシ虫食トヒラニ出來リ玉フ、能々立寄リ奉見ハ、右大将頼朝ノ姫君ニテアリト顕レタリ、自ラ死テ七日ト申ニ、都率ノ内院ニ迎ヘラレマイラセ候ト虫食ニ顕レ候、リ脱カ上ハ無面目御事にて候へ共、自カ男ニテ候木曾ノ義隆ヲ無情モ殺玉フ事無面目子細ナリ、故ニ依テ命ヲ捨テヽ義隆来世マテ契ヲ成スヘキ故ニ命ヲ捨ルナリ、頼朝卿朝臣於テハ七代マテノ崇ヲ成スヘシ、中ニモ頼家・實朝コソウラメシク存候へ、返々モ自カ願ヲ遂テタヒ玉ヘト、北条四郎時政ハ九代マテ可守ト若宮八幡ノ御寶殿ノ戸ヒラニ顕玉フヲ、別當ハ是ヲ奉見テ、ケニ〳〵事アリ也ト思玉テ、軈テ此由ヲ右大将殿ニ申サレケリ、其時頼朝則若宮八幡詣リ御寶前ニ参籠シ玉フ、時ニ頼朝別當ニ仰ケルハ、立ヨリ虫食ヲ見ニ、都率内院ノ迎程ノ物ナレハ、丸カ子孫ヲ崇ルヘキ事不可有疑、姫カウラミモ事アリヤト仰レテ涙ヲ流シ玉イケリ、其時別當モ八ケ国ノ大名モ上下萬民ニ至マテ哀極泪ヲ流ス許也、良有頼朝仰ケル事ハ、別當何ニ丸カ子孫ヲノコシ置クヘキ由仰ケレハ、別當ハ尺取直シ、愚僧カ申ヘキ事ハハヽカリナレ共、平重忠ヲ召尋ソロヘト申玉ヒケリ、其時頼朝重忠ヲ召シテ仰ケルハ、云何カ重忠承レ、丸カ子孫ヲ崇ルヘキ由申所道理ナリ、然ニ三郎ヲ重忠ニ任スル也ト仰ケレハ、重忠承テ、恐ニテ候へ共若君ノ御事請取申候ト申ケル、頼朝聞食シ大ニ御詠嘆シ玉フ、重忠重テ申ケルハ、同ハ今日若宮之御前ニテヱホシヲキセ奉ラント申ケレハ、

大将殿聞食シテ、菟モ角モ重忠法弟也ト仰有ケレハ、
其時重忠軈テ名乗ヲ忠久ト申奉ル也、其時八ケ國之大
名ハ一同ニ重忠ヲウラヤマヌ人コソナカリケレ、其時
頼朝又三郎ニ所領ヲ取セント思食シ、重忠ニ仰ケレハ、
何國ソト御尋アリケレハ、北国ニ越前國、若佐之國、
伊勢国、信（濃カ）国コソ未守護モ定候トアリケレハ、其時
頼朝四ケ国ヲ取スルト仰ケル、重忠重テ申ケルハ、同
ハ大隅、薩摩、日向ヲソヱテ七ケ国給リ候ケリ、忠久
薩摩へ下シ申サントト申サレケレハ、頼朝ハ菟モ角モ重
忠法弟也ト仰ケリ、六十六ケ國内ニ七百七十七津ハ忠
久ニ取スルト仰ケル、承久元年八月一日忠久七ケ国ヲ（相馬系改文）
給リ御知行定候、此モ重忠ノ申状ニ依テ也、承久三年（相馬譜改文治宜改元暦而十八歳之時云則合矣、）
六月一日下着候畢、（治二年、）
丹後ノ御局ハ惟宗ノ卿カムスメナリ、
忠久ノイモセコノヘ殿ノヒメナリ、
於樹佐木之朝臣是ヲ堅固ニ可用物ナリ、能〻可秘之、

宗親

4 百練抄七

六條帝仁安二年十一月十八日、（七月廿六日摂政基實薨、元年八月十二日故摂政薨奏、）贈官贈位、従三位平盛子（故摂政北政所、前太政大臣女、）被下準三后勅書、
治承二年七月十五日、白川殿（故摂政室）書寫金泥一切經、奉納春日社、
三年六月廿日、従三位平盛子（中摂政室）有贈位、去月十七日薨去、今日被仰廃朝、
十一月十五日、今日関白前太政大臣（基房）云〻解官、以二位中将基通卿可為関白内大臣氏長者之由宣下云〻、
四年五月十五日、法皇第三宮（号三条宮、御名以仁、）新院御舎弟、改源以光、配流土佐国云〻、

5 山槐記

仝二年閏六月十六日（十一カ）癸卯天晴、卯時右二位中将基通室家（入道大相国女）産女子、（去年産男、但彼児（卒脱カ））
三年二月八日丙申天晴、今日春日祭也、近衛使右少将兼（宗脱カ）、侍九人、（左衛門尉成清、左兵衛尉久方、忠久、左馬允公定、親綱、高清、内舎人清實、景基、宗廣、）

6 仝

7

承元三年己巳十二月十五日乙亥、近国守護補任御下文
備進之、其中云々、小山左衛門尉朝政申云、不帯下御(本カ)
下文、曩祖下野少拯(掾カ)豊澤為當国押領使、如檢断之事、
一向執行之、秀郷朝臣天慶三年更賜官府(符カ)之後、十三代
數百歳、奉行之間、無片時中絶之例、但右大将家御時
者、建久年中亡父政光入道就譲與此職於朝政、賜安堵
御下文許也云々、

8

元禄十丑五月金鐘寺書出

一嘉禄三年丁亥雪月十二日
丹後之御局郡山於厚地御逝去、御年八十二、御廟所厚
地ニ有之、

9

政佐 初清重 鎌田小藤次 修理亮
忠久主文治二年丙午六月朔日發駕関東、同八月一日
下着薩摩国山門院、政佐在供奉之列也、

10

一巻　忠久公より忠宗公迄
畠山重忠西忍ナトアリ、

一巻　武久公まで
一巻　忠昌公まで
一巻　勝久公まで　丹後御局丹後ニハアラス、是も近衛殿御家人也、
一巻　勝久公まで
一巻　貴久公まで
一巻　義久公・義弘公まで
一巻　義久公・義弘公まで
一巻　久保公まで
一巻　光久公まで
〆古系圖十巻、

11

(マヽ)ハ 嶋津相馬系圖　垂水町田七郎兵衛
不写カ
諱眞明 「口ナシ」元利

12

○正文在島津筑後　抑留内之浦坂元主左衛門同本

右大将
○頼朝
頼家親王　左大臣　母遠江守時政娘也、

實朝親王　右大臣　征夷将軍
忠久親王　大政大臣

白河法王ヨリ為猶子定置福宇征夷将軍ト宣旨ヲ下シ給フ也、
御袋ハ園祇之ィ延喜ィ御門三代末惟宗卿比幾判官藤四郎義數カ娘也、忠久十八歳之御時高蔵倉ィ宮ニイハ祝ィレ給フ、也ィ玉也
忠久御下向ニ付、子細白河法皇王ヨリ宣使町田本ナシヲ成給フ、
九州ノ諸士忠久ヲ可用ト被仰也ィテ、三宝祇王ィ殿ヲ被召食ィテ西国ノ勅使之由ヲ宣使出旨ヲィシ梟ル、三宝祇殿承、
隨宣使旨ィ九州ニ下給フ、去程ニ九州ノ諸士宣使ヲ戴テ、中國安藝國ニ忠久ノ打迎之ィ下向ニィニ参梟ル、黒木護所ヲ作、雑償賞ィヲ上申御目得ィ懸リ候、敏参テ御目ニ懸故仍敏者ィ参上ト号ス、九劔ノ物共敏ク参テ御目懸故仍テ敏参上ト号ス、是ハ同忠久ノ被仰状也、
鎌倉之若宮八幡宮ノ別當八月一日ニ八幡ノ御寶殿ノ扉ヲ開カントシ給ヘハ、日来ナカリシ虫食有リ、扉ニ出来、能クィ立寄リ奉見玉ィヘィハ、右大将頼朝ノ姫君ニテ有トテ、死テヨリ七日ト申ニ、都率ノ内院ニ被向レ玉ィィ迎参セ候ト虫食顕レ玉フ、無面目申支ニテサウラヘトモ、自カ男ニテ候ィ木曽ノ義隆ヲ無情殺シ給事無念也ィ之子細也、故ニ命ヲ捨テ義隆ニ来世ニ及契ヲ成ヘキ故ニ仍命ヲ捨也、頼朝ノ子孫ニ於テ七代ニ及テ崇ヲ成ヘキ、中ニモ頼家・實朝コソ怨メシク存シ候、返ンモ自カ願ヲ遂テタビ給ヘト、北条ノ四郎時政九代ニ及可守若宮八幡ノ御寶殿ノ扉ニ顕レィシ給フ、別當ハ是ヲ奉見見現シ奉ルニ云ヘ、現ニ〻是モ理也、軈テ此由ヲ右大将殿ニ申サレケレハ、其時頼朝モ別當モ若宮八幡ニ参詣被召、御寶前ニ参籠シ給フ、時頼朝ナシィ別當ニ仰ケル、立寄テ見レハ、都率ノ内院ニ進程ノ者ナレハ、丸カ子孫ヲ崇ルヘキ事不可有疑、姫カ申モ理ナリト仰有テ泪ヲ流シ給ケリ、其時別當八ケ国之大名上下萬民ニ至テ哀ナシヲ極涙ヲ流ス計ナリ、良有在ィテ頼朝仰在ケル事ハ、何丸カ子孫ヲ残置ヘキ由ヲ仰ケリ、其時別當笏取直シ申レ梟ル、愚僧カ申ヘキ事ハ憚ノ事ナレ共、平ノ重忠ヲ召サレテ御尋候ヱト仰ケル、何重テ承リ候コト恐

ニテサフラヘトモ、若宮君ノ御叉請取申候ト申ス、
頼朝聞食大ニ御叡感シ給フ、重忠重テ申ケレハ、
同今日若宮之御前ニテ烏帽子ヲ着セ奉ラント申サ
レケレハ、大将殿聞食テ、菟モ角モ重忠法弟ヨト
仰有ケレハ、其時重忠軈テ名乗ヲ忠久ト申奉也、
其時八ケ国之大名一同ニ重忠ヲウラヤマン人コソ
無リケリ、其時頼朝又三郎ニ所領ヲ取ラセント思
食、重忠ニ仰ケレハ、何國カ吉國ノ有カト御尋有
ハ、北国越前、若狭、伊勢、信濃ノ国コソ未守護
モ不定候ト申ス、其時頼朝四ケ國ヲ取スルナリト
仰ケル、猶重テ申様、同ハ大隅、薩摩、日向ヲ副
七ケ国ヲ給候テ忠久薩摩ヘ下申サント申サレケレ
ハ、頼朝菟モ角モ重忠法弟ナリト仰ケリ、其時六
十六ケ国ノ中ニ津ハ七百七十七津也、是ヲ忠久ニ
取スルナリト仰ケル、文治元年八月一日ニ忠久七
ケ國給リ所領之御知行定候、是モ重忠ノ依申状ニ
也、
一忠久十八歳之御時、文治貳年六月一日関東ヲ立、
都ニ上洛有テ内裏ニ参籠申シ、西國ニ御下向ノ由

ヲ奏聞ス、君ハヱイラン有テ宣使ヲ下シ給フ、一
年モ宇治ノ平等院ニテ打レタル高倉ノ宮ニ似タル
事ノナツカシサヨト被仰テ涙ヲ流シ給テ、西国ヘ
ハ下スマシキ事也、丸カ子ニセント宣使ヲ成給テ、
高蔵宮ニ十八日即位シ給フ、此由ヲ頼朝聞食、廿
一度ノ御託事有テ内裡ニ奏聞シ給ヘハ、君モヱイ
ラン有テ宣使有ケリ、頼朝カ申モ事ハリ也、サア
ラハ西国ヘ下スヘキトノ宣使有、福宇征夷将軍ト
示シ給フ、然ハ将軍ノ騎馬ハ三十騎之物也、三十
三騎ノキハヲ打セヨトノ宣使有テ使ヲ蒙ニ依、故
ニ卅三騎ノ騎馬ヲ打セ候、去程ニ西國三十三ケ國
ヲトラス也トノ宣使也、
本田ハ幡ノ奉行、酒匂ハ沓ノ役、猿渡ハ御劔之役、
左近尉ハ幡指ノ役也、鎧之役ハ渡野邊、甲ノ役ハ
左曹、剝楯ノ役ハ立山、籠手之役ハ二ノ宮、腹當
之役ハ蓮香・難波・瀬能・長野・石墓・福崎、何
モ此人々ハ西国ノ軍奉行ニテ候也、
健久六年乙卯始テ薩摩ヱ下向ス、

○忠久親王　大将大臣　大夫判官　諱ハ徳佛、イ

自白河鳳皇忠久之親王大将大臣ト示給候、

右正文島津筑後　嶋津之継圖

一當家之幕之文事(紋カ)蓬萊之亀ニテ候、亀之上ヲ十文字ニ縫セ候、彼十文字ト申ハ天地ヲ表タル物也、是ハ天下之総文ニテ候、自頼朝給候、家ニ續時口傳ヲ相傳ス、本朝帝皇圖ト題シテ天神七代ヨリ系起シ忠昌公ニ訖ル系圖ノ拔書也、

但右ノ中義仲ノ子義隆ノ傳ニ、義隆御臺頼朝娘也、夫ヲ打ルヽカ故ニ仍崇(崇カ)ノ神ト成給、七代マテ可崇トノ誓願也、故ニ仍忠久ヲ西国ヘヲトシ給フ、是ハ重忠カ計支也、

13 ○島津筑後忠直格護

辰　文書系圖写

御兄弟争位候テ、御兄弟ニ（ママ）云々、

清和天皇

右系起中略、

頼朝　正治元年正月十三日、五十三死去、十四歳テ伊豆國ニ流罪、

範頼　蒲之御曹子　三川守

義経　源九郎　伊与守　正(ママ)位　牛若　沙名王丸

平家十六万騎云々、

頼家　従二位西将軍　山城守　右大将

實朝　従二位東将軍　相州大守

能寛

御分國七ケ国、和泉劔・信劔・越前・伊勢・大隅劔・日向劔・薩摩劔、

忠久　豊後守　判官位　従四位　童名法師房丸

忠義　豊後守ト号、左衛門三郎

近衛之姓ヲ賜テ始テ藤原ト号、此由ハ頼朝之子孫(孫カ)可絶ト云虫食ノ正八幡宮柱ニ(ママ)ヲ於源氏ノ始還テ九劔下向縁(候)テ鎮西之将軍ト申也、

童法師丸

右系切ハ忠昌公、伊集院ハ熙久、川上ハ忠豊子ノ虎五郎等ニ絶筆ノ本也、

14

○同忠置格護

仁王五十六代
清和天皇ト系出中略、

- 頼行
  - 源三位頼政　治承四年庚子四月高倉宮御謀叛時打死也、
    - 女　二條院讃岐
  - 伊豆守仲綱
  - 伊豆蔵人兼綱　源太夫判官
    - 頼茂　判官代
  - 仲家　二条蔵人
    - 頼兼　蔵人

義仲弟ニテ養子、

15

又一本當家御系圖清和ヨリ貞久迄、

- 頼朝
  - 忠久　号始嶋津家、母但後御（局脱カ）

建久六年八月一日薩广三ケ国下着、御年十五歳、

衛門兵衛佐　豊後守　大夫判官

16

○川上上野久尚系圖文書寫

嶋津者継圖源家也、頼朝之為三男故如此候、雖然然八（本ノマ）、文字殿一節奉養候故ニ先者惟宗氏也、其後近衛殿御養子故藤原也、又承久之比、光明峰寺殿（関白道家）御子天下之為關白、其時實基公之御養子トシテ藤原氏給ラセ給ケル叉、然者両度也、御ヨボシ親ハ畠山秩父平重忠也、然モ皮重忠之御聟トシテ建久七季丙辰三ケ国へ御下向也、又丹後之局者比城藤四郎ノ姉也、惟宗卿之御娘也、其故也、

17

○正文在伊集院善太夫

人王五十六代云々
清和天皇ト系出、

- ●●頼朝
  - ●●實朝
  - 頼家

18 ○正文在長島士四本嘉左衛門　見寫

抑留出水川俣平右ヱ門同系

清和天皇ト系出、

貞觀元六一日御即位

忠久　左衛門頭　豊後守　分国七ヶ国　日向　大隅　薩摩　越前　若狭　伊勢　信濃

母儀丹後御局、承久三年六月一日右兵衛佐、大夫判官、内裡ニテ元服、近衛殿之姓ヲ借号藤原（テイ）、法名得佛

忠久　豊後守号島津判官、法名得佛、弘安九年丁亥三月廿一日薨去、承久三年六月為近衛殿養子、改惟宗氏号藤原、其母丹後ノ御局也、

- 島津太郎　忠季　若狭守
- 次郎　忠經　御母本田次郎親經女也、平朝臣義時退治之時、為京方於宇治川戰死、

19 ○正文在島津備中

孝親　五品　大学少允
- 孝言　四品　掃部頭　詩作
  - 基言

使五品　豊後守　忠久　左兵衛尉　左衛門尉　島津判官

右大将家御代関東参候、母丹後局、比企判官婦、嘉禄三年死去、八十二、元暦二年八月十七日、嶋津庄三ケ国守護兼惣地頭職并所御恩、

- 豊後太郎兵ヱ尉　法名生　忠高
  - 同三郎　法名　忠春
  - 同八郎　忠澄
- 同弥三郎　忠直
  - 同彦三郎　忠俊
- 同彦四郎　忠氏
- 同彦五郎　忠継
- 女子
  - 同五郎三郎　忠綱
    - 同孫三郎　忠時
  - 尼圓心
- 同又四郎　範忠
- 同弥三郎　忠員
- 同六郎　忠行
  - 惟宗氏女

従五位上　大隅守　法名道佛　忠義　改忠時、文治五年己酉生、

三郎兵衛尉　左衛門尉

修理亮

最明寺御代出家、

文永九年九月廿二日死去、

- 従五位下　下野守　法名道忍　久時　修理亮
  - 父四十三　寛喜三年　六十五　法光寺御他界時出家　時宗也、弘安七四月四日卒トアリ、四日出ケ、
  - 母畠山重忠女

弘安七年後四月十二

八十四、
文暦年改姓藤原、
忠綱 使五品 周防守 法名道阿
五郎左衛門尉
年六十四死去、
忠量 五品 常陸守 法名素信
イ景 五郎左衛門尉 廷尉
續古今作者
法光寺御他界ノ時出家、
正安二年五月死去、六十、
忠宗 五品 豊後守
五郎左ヱ門尉
應長元年死去、四十五、
忠秀 五品 常陸介
五郎左ヱ門尉 判官
忠直 六郎左ヱ門尉
直經 太郎左ヱ門尉 法名行親
泰忠 三郎左衛門尉
時忠 弥六左ヱ門尉
光忠 左京進
日死去、五十四、
長久 大炊助 法名教佛
母同
女子 野本備前守母
母同
忠継 式部丞
女子 平賀三郎左ヱ門入道後家
忠實
忠祐 左衛門尉 法名阿妙
頼祐 弥三郎

20の1
忠光 九郎 蔵人
景村 十郎左衛門

20
元録十五年閏八月日帳
閏八月十九日晴天

忠氏 次郎左ヱ門尉
忠重 三郎左ヱ門尉
忠弘 三郎
忠家 彦三郎
忠泰 孫太郎
忠長 彦太郎
滿忠 宮内左ヱ門尉
女子
忠村 彦太郎
忠經 次郎
忠光 九郎 蔵人
景イ 十郎左ヱ門尉
置村
女子 梶原源太左衛門尉妻
女子 小田常陸前司母
女子 又イ 三浦大太郎式部妻
女子 美濃局 御所官女

┣女子　梶原源太左衛門妻
┣女子　小田常陸前司（ママ）
┣女子　三浦大太郎式部妻
┗女子　美濃局　御所官女

右之人数　御前ニ被召置候折本御系圖ニ忠久公御子忠朱一本行之状伊勢平蔵従江戸御使ニ為罷下由候て、今日當座へ被致持参候事、時・忠綱・忠直与小田常陸介室与有之候女子与之間ニ系り入筈ニ先年諸系圖撰前ニ伊地知助右衛門（重英）役儀之節古系之内より見出押札いたし、御前江被差上置候ニ付、系り可入儀欤考候而可申上由御意候、是ハ御文書箱之内江有之候十巻計之古系圖之内ニ壱巻右之人数為系入有之欤と覚申候、其許ニ而御見合御考、御両人思召之程究而急便ニ可被仰越候、我等存候ハ、　龍伯公御代御究被遊候黄地紙之御系圖ニ茂見へ不申候、尤御記録ニ茂系り入無之候、川野六兵衛（通古）書調被差上候御系圖ニ茂無之候、然者此節系り入候儀ハ不入事之様ニ存候、殊ニ梶原源太左衛門なと御縁中之儀旧記ニ茂見得不申候、各御了簡究而可被仰越候、恐惶謹言、

田中五右衛門

21

八月廿五日　　國明判

市來源右衛門（家年）殿
肥後仁右衛門（盛香）殿

覺

御前江被召置候御系圖　忠久公御子　忠時公・忠綱・忠直・女子与有之候、然処ニ、先年古系圖之内より被見出候　忠久公御子之次第相替候付御系圖ニ御系入被成度之旨、先役人伊地知助右衛門御方御同役之節被申上置候、右付此節　忠久公御子之次第古系図之写御遣致拜見候、右之通ニ　忠久公御子系り入候御系圖御文書箱之内見合申候処ニ、右通ニ系候御系圖壱通茂無御座候、依之、越前島津之系図写嶋津備中殿へ有之由候故、取寄見申候處ニ、御方より被書候　忠久公御子之次第不相替候、且又志布志衆中山田七郎右衛門當座ニ被差出置候壱枚古系圖ニ　忠時公御兄弟之次第委敷系候而有之、慥成古系圖と相見得候故、引合せ見申候得者、其方より被遣候書付ニ相違之所も御座候、左候得者、此節御系入可被成儀不入儀欤与存申候、為御見合

右七郎右衛門古系圖之写遣申候間、其元ニ而御引合せ
可有御覽候、被仰聞候通御系圓之儀ハ先役人被究置、
天下ニ茂被出置候御系圖之儀ニ御座候得者、此中之通
ニ被召置可然存申候、乍然御家ニ付差立候訳茂有之、
慥成證書出申、不被系入候而不叶儀ニ御座候ハヽ、御
穿議之上を以可被系入事御座候得共、其通ニ茂無之、
七郎右衛門古系圖ニ茂不致符合候得者、御方より被仰
越候通、此節御系之儀者不入儀与御同意ニ存候、我〻
了簡之通可申入之旨承候故、如此ニ御座候、以上、

御記録所

市来源右衛門（家年）
肥後仁右衛門（盛香）

22

（元禄十五年）九月二日

田中五右衛門殿（国明）

向之島萩原介大夫
五年若菜の巻ニ
出家して西山ニうつりすませ給ふ、

23

此間

本云元亨三年癸卯八月　日
第二本云正中二年十月下旬
第三正平廿一年丙午卯月一日任本書付了、
應永卅五年卯月一日
正長貳年己酉二月五日

主小野氏千代王丸

平等王院

奥切

24

小根占川北村百姓善次郎由緒書ノ中

従清盛時代迄頼朝之代王卽位之次第
白河院云〻、中間略ス、
後白河院人王七十六代、廿九歳即位、治三年、建久三年（壬カ）子三月十三日崩御、六十六歳
二條院人王七十七代、十六歳即位、治七年、永萬元年乙酉七月廿一日崩御、廿三歳、此時南都与延暦寺額打ノ論アリ、
六條院人王七十八代、二歳卽位、治三年、安元二年丙申七月十七日崩御、十三歳、
高倉宮　無即住（位）、治承四年庚子五月廿三日宇治橋合戦之時南都へ落給フ処ヲ奉打、
道尊僧正　東寺一長者号安井僧正、

25

還俗宮　木曽義仲奉取、

高倉院仁王七十九代、(建)堅春門院御腹、八歳即位、治十三年、清盛入道聟也、廿歳ニシテ位ヲスヘテ後嚴島ニ御幸アリ、治承五年辛丑正月十四日崩御、廿一歳、王子四人、

一宮安徳天皇仁王八十代、建礼門院御腹、三歳即位、治三年、文治元年乙丑三月廿四日於長門国二位尼奉懐入海中、八歳也、

二宮無即位、

三宮无即位、

四宮後鳥羽院六歳即位、治十五年、此院ハ木曽左馬頭以来ノ為王、木曽ニモ頼朝ニモ義經ニモ北条四郎時政ニモ輒ク成院宣給シハ此王也、是偏後白河法皇御計也、仍頼朝逝去之以後成頼経之代、承久三年兵乱之時隱岐国ヘ被流、後号隱岐院、延暦元年己亥三月廿二日崩御、(応)三十六歳也、

元亀三年壬申卯三日於高山書、　尭政筆

嶋津ノ豊後守頼朝ヨリ前ハ平氏岩ヲニ松、頼朝ヨリ後白十文字、家ノ子ハ伊藤・つちもち(おひ・くしま)也、頼朝ノ御時、嶋津ニ実子ニ付テ頼朝ノ二男ヲ嶋津ニ被下、其ヨリ源ト氏チ白十文字是也、大原やおしおの山のよこ雲にたつハすミのけふりけりトあそはし候、嶋津者頼朝ノ正すち、将軍ノ家ト申傳ル事也、嶋津越前國厨浦(くりや)ニ居住有事今にいたるまて十六代也、當國在々所々ニ嶋津七頭(かしら)トテ有之、今ハ一人も御座なく候、頼朝・儀經(義カ)・高氏将軍代々御かん状拝見仕候、今ハ方々ニさんさひ候て高氏将軍ノ計あまた御座候、涯分調法仕進上申度心中迄候、厨浦ニ寺を造立シ西徳寺トテ一宇立、我等ニ今ニ弟子ヲおき申候、嶋津殿すしハ皆々浦人ニ成、如此にて候、次ニ越後房しなのいつなへまいるへきよし申され候へ共、方々とりあひにて候、料足壱貫文あつかり申候、いつまてなりとも御くたり時渡申候へく、貴殿様此越後房へ御目かけられ候者大慶申盡かたく存候、諸事重而可申上候、

右松山平田宥堅坊より抑留之古書也、

26

外題光久公于時尊齢七十三元禄元年也

一御寶鑑壹帖　十五折、竪一尺四寸六分、横二尺一寸五分、

頼朝卿御袖判元暦二年六月十五日伊勢國波出御厨御拝領之御下文ヨリ高武蔵守師直康永三年十二月廿二日奉書迄五十三通、

仝

一同壱帖　折數竪横寸尺同上、

足利直義貞和四年正月十二日證判ヨリ将軍義昭公二天
正十五年カ
月廿六日御内書まて五十四通、右二帖絹裱紙、下繪有、金袖裏十文字御紋摺、赤銅金物、紫縮緬袷巾包之、

仝
一同壹帖　十三折、竪壱尺七寸、横二尺三寸二分、
家康公十一月十一日御書より秀忠公十月廿九日御内書迄三十三通、
右三帖御番所御格護、

外題無、
一同二帖　十三折、竪一尺四寸六分、横二尺一寸五分、裱裝金襴、裏金十文字御紋大小摺交、四方金物赤銅八双、淺黄服紗包之、
御文書六十四通、
伊作家一帖御文書五十三通、ィ五十一通
右二帖岩崎御文書蔵御格護、

一御巻物一軸　長一尺七寸五分、袖絹織物、袖裏金砂子若松模様、軸箔磨、啄木、
右高麗唐島御戦功ニ付御朱印御感書五通、

外題白帋
一御軸物一巻　長一尺六寸、袖絹織物、袖裏金地十文字御紋大小摺交、軸箔磨、啄木、
右御檢地後御拝領高之御朱印二通、

仝
一同壹軸
右摂州播州御拜領高之御朱印五通、
一同一軸　長ヶ壹尺六寸、袖絹同上、袖裏金砂子もやう、
右　義久公御文書三十四通、
一同一軸　寸尺等同上、
右　義弘公御文書五十二通之内、
一同一軸
右　義弘公　久保公朝鮮御在陣ノ御文書貳十六通、

外題白紙
一同一軸　寸尺等同上、軸なし、
右　家久公朝鮮御在陣御文書九通、
一同一軸　長一尺一寸五分、袖絹同上、裏金砂子、無軸、啄木、三之巻
右渋川右兵衛佐滿頼裏判之御文書古寫六十三通、
一同壹軸　二之巻　寸尺等同上、
右今川伊豫入道了俊裏判之御文書六十三通、
一同一軸　一之巻　紺裱紙、啄木、
右　忠宗公御裏判之御文書二十五通、

外題無シ、啄木アリ、
一同一軸　六之巻
右御文書三十通、

外題ナシ、啄木アリ、
一同一軸　五之巻　裱装同上、
右御文書二十九通、接目裏判名不詳、
一同一軸　四之巻
右御文書二十六通、
但御家老酒匂入道貞阿裏判
申六月七日
弐拾六通与下札ニ書記候巻有之、内相改候処、四拾通及以上候、尤酒匂入道貞阿也有之候、時代等引合候へ者、弐拾六通と有之下札之巻ニ相違有之間敷相見得候付、右之巻ニ究置候事、
外題、藤色模様砂子菊水、
一同一軸　長一尺二寸二分、紺裱紙、袖裏白帋、軸ナシ、啄木、
右　貴久公　義久公御文書貳拾七通、
師久公一流　外題無シ、裱装同上、
一同一軸
右　貞久公并伊作家御文書拾八通、
一同一軸　一之巻　同上、
右伊作家御文書三拾貳通、
一同一軸　二ノ巻　右同、
右伊作家御文書二十三通、
一同一軸　三ノ巻　右同、
右同四十一通、
一同一軸　四ノ巻　右同、
右同三十一通、
外題金帋、啄木赤白浅黄斑打、
一古御系圖一巻　長一尺一寸六分、袖紺紙吹掛砂子、裏金紙蓬萊ノ繪、
右自　清和天皇　義久公迄系次、
外題右同、
一同一巻　長一尺一寸二分、袖絹金入織物、裏砂子、
右自　清和天皇右馬頭忠将迄系續、
一同一巻　長〔ママ〕九寸、裱装同上、
右自　清和天皇　武久公迄、
一同一巻　長九寸七分、裱装同上、
右自　清和天皇　勝久公迄、
一同一巻　長ケ一尺一寸、裱装同上、
右自　忠久公　忠宗公迄、
但下野彦三郎左衛門尉与神代郷相論之時被差出候ものと見へ、一枚帋也、
一同一巻　長ケ一尺八部、同上、
右自　淳和天皇　忠昌公迄、

一同一巻　長一尺六分余、同上、
右自　清和天皇　光久公迄、
一同一巻　長九寸五分余、同上、
右自　清和天皇　義久公迄、
一同一巻　長八寸八分、裱装同上、
右自　忠久公　勝久公迄、
外題、藤色金砂子ニ松、
一同一巻　長一尺六分、袖絹浅黄地金砂子薔薇文、裏金紙、緒付金、
右自　清和天皇　義弘公迄、
持明様常々　御襟ニ被為掛候御系圖之由、

廿四番
一御正統御記録箱　一竿
百十三冊　十一帙
廿五番
一續編家久公御譜　仝
七十九冊　八帙
廿六番
一御支流御記録箱　仝

九十六冊　八帙
廿七番上
一島津正統續譜　仝
百三十一冊　十三帙
廿七番中
一仝　仝
百四十八冊　十四帙
廿七番下
一同　仝
百六冊
廿八番　廿九番　壹荷
鎌倉流犬追物并弓馬記録入一番二番両箱入付帳
一番箱
六巻一結　「十五巻一結　五巻一結」
廿一巻ト有トモ廿巻アリ、
十行一結　十一行一結　八行一結
四行一結　十四行一結　他流
右總七十一行一番箱ニ入、
二番箱

十行一結　十四行一結　八行一結
八行一結　三行一結　七行一結
二行一結　二行一結　二行三冊
右総テ五拾六行二番箱入、
三行一箱　内黒塗鞭一　天保四巳八月五日虫干ニ不見、
右元禄十三辰正月七日田中五右衛門・阿多太仲改入付帳ノ通、
三十番
王子村櫻田邸犬追物圖三幅
三十一番ヨリ三十四番迄、
元禄年間御調進
御繪圖并御用書付目録写
繪図箱一番ヨリ四番迄、
繪圖箱一番入日記　平箱
一薩隅日〻扣三枚　一琉球国〻扣三枚
一薩隅日并琉球国郷帳扣六冊
元禄十五年午八月廿七日、国繪圖御奉行若御年寄井上大和守様へ被差出候分、
二十三行
繪圖箱二番入日記　平箱
三十四行
繪圖箱三番入日記
三十四行
仝四番入日記　長持
一薩摩国諸外城縄引帳九十五冊内横折二冊
一大隅国縄引帳七拾六冊
一日向国諸縣郡縄引帳八十二冊　々一冊
一薩广國村里糺帳四十三冊
一大隅仝四十四冊
一諸縣仝三十冊
一諸外城論所書付二百廿九通
一七行
元禄十六年未十一月六日、嶋津帯刀より被相渡候、
天保九戌十月
三十五番
御繪圖五番入付目録　扣

三十五行

第十四
写有之、

しまつの三郎さゑもんたゝよしかくんこうにたまはりたる所、

貞久公譜ノ目録ニ二位殿御書とあり、十一月十三日

（本文書ハ「旧記雑録前編一」三一六の1・三五六号文書ニ当タル）

第十五
写有之、

仰給候事こまかにうけ給候ぬ、さい京して御心さしの

文ノ二乙末

閏六月廿九日　　在判

泰時

豊後修理亮殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」三八八号文書ニ当タル）

第十六
写一巻

将軍家政所◎〈下　和泉国和田郷住人

仁治三年二月廿二日

（本文書ハ「旧記雑録前編一」四〇九号文書ニ当タル）

第十七
正文在隈之城有馬休右衛門

薩摩國新田宮所司神官等申神王面破損下手人間事、

七月二日　　前大隅守忠時　證文

（本文書ハ「旧記雑録前編一」四一〇号文書ニ当タル）

第十八
正文同前

大番已被勤仕候早、其上者被帰國之条、

建長六年四月八日　　在判

宮里郡司殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」五一九号文書ニ当タル）

第十九
在比志嶋左京

薩摩國満家院比志嶋・河田

正嘉元年八月廿二日　　前大隅守在判

比志嶋太郎殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」五六五号文書ニ当タル）

第二十
写在指宿助左衛門忠鏡

京都大番事、催具薩摩國御家人

弘長二年七月十日　　武蔵守　御判

嶋津大隅前司入道殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」六三九号文書ニ当タル）

第廿一
同上、

京都大番勤仕事、

弘長二年八月十一日　　沙弥　在判

薩广平十郎殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」六四一号文書ニ当タル）

第廿二
正在比志島左京

右同文、

弘長二年八月十一日　　沙弥　御判

満家非志嶋太郎殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」六四三号文書ニ当タル）

第廿三

右同文、在財部延時藤左衛門

同年同月同日　　沙弥

薩摩郡平三郎殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」六四二号文書ニ当タル）

第廿四　大隅殿さいらくの状

右同文、写隈之城有馬休右衛門、

年月日同し、

宮里郷郡司名主御中

（本文書ハ「旧記雑録前編一」六四四号文書ニ当タル）

第廿五
正在其家

京都大番役事、

弘長四年正月二日　　道仏　御判

比志嶋太郎殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」六七二号文書ニ当タル）

第廿六

右同書出、正文在延時藤左衛門

弘長四年正月十三日　　道仏　御判

成岡二郎殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」六七三号文書ニ当タル）

第廿七
写在山田七郎右衛門久通

薩摩國名主等、令對捍

文永二年五月七日　　相模守御判

嶋津大隅入道殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」六七八号文書ニ当タル）

第廿八
前文欠、裏判残接目、

しなのゝくに太田庄内

こしまのかう

文永四年十二月三日　　沙弥道佛
御判

（本文書ハ「旧記雑録前編一」七〇五号文書ニ当タル）

御用　但寫ヲ可被下也、

27

○正文在志布志山田七郎右衛門　五通ノ内

- 忠久（島津判官 豊後守）
  - 忠時（修理亮 大隅守 三男）
  - 厨入道　嫡子　所領厨
  - 女子　二女　所領常陸国小田四郎左ヱ門尉
  - 忠綱（周防守 四郎）　常陸守　豊後守　五郎左ヱ門尉

28の1

○町田本　島津相馬系圖

- 貞久
  - 頼久　河上
  - 宗久　幡广国ノ赤松殿ノ住縁、十九ニテ逝去、
  - ●イ 師久　上総介　法名道觀　伊久時代父子弓箭始メ、
    - 伊久　忠明ハ甥ニ守護ヲ渡ス、故ニ同伊久仰、塩房

口引返し

豊後殿御子孫系圖

備前邑久郡有長沼郷、

- 忠直（所領下長沼郷 六郎左ヱ門尉 三郎左ヱ門尉）
  - 時忠（弥六左ヱ門尉）
  - 光忠（左京亮）
- 忠光（九郎 四郎入道 蔵人 所領上浅野郷）
  - 定光（五郎太郎）
- 忠村（所領今井郷 十郎左ヱ門尉）
  - 景村（三郎右ヱ門尉）
  - 孫三郎
- 女子（所領上長沼郷 林局）　夫三浦又太郎　式部丞　式部三郎太郎
- 女子（所領下浅野郷）　夫大隅二郎右衛門入道頼佐（馬三郎）　下浅野當知行

28の2

（ママ）
久安
忠安
氏久
光久
氏忠

丸ニ守護渡シサウラヘト仰ケルニ仍父子中不安ニナリ候、去程ニ氏久頼兵乱ヲ取越、元久・久豊父子三人同心有リ、塩房殿抱取玉テ同伊久御同心有リ、渋谷當伊東ハ塩房殿ニ至敵ヲ忠明ヨリ従山東ノ支ハ伊東ニ遣シ候也、（使候也イ）貞久ヨリ伊久（モロ）へ宝ヲ渡申候、飛帰太刀ニ血吸シ骨ハシ并ニ大小文小十文字鳥切蛇丸松風ト謂琵琶阿弥陀三尊小袖ト云太刀、以上十一渡申候、相馬ノ家ノ支嶋津殿ヨリ分ル也、伊久時代ニ相馬ノ家闕代スルニツイテ上野ヲ名乗コト、

守久（久世犬太郎丸）
久照（北殿法名道言）
森久（塩千代丸上野）

忠明（上総介）
久國
久重
久朝（相馬石見守）

法名道眞仏　二代也、其後貴久代ニ上野石見守相馬ノ家ヲユルサレ名乗来ル也、
忠久ハ頼朝ノ三男也、忠久藤原ノ重忠ノ猶子ニナルアルニツイテ畠山ノ姓ヲ名乗ル也、故ニ藤原ノ朝臣也、

29

久年
久兼
兼門（上野大膳亮）
女房（上）

右上系ノ中　内之浦坂元主左ヱ門蔵相馬氏系圖モ同之、

●為義
●義朝
義賢

木曽殿頼朝ヲ背元暦元年二月廿日ニ木曾殿打ル、頼朝誅聟頸ヲ、

仲家
義仲
義隆（ママ）

義隆御臺頼朝娘也、夫ヲ打ルヽカ故ニ仍崇（崇カ）ノ神ト成イ志水冠者雖為頼朝公之聟、依義仲之謀叛、元暦元年甲辰四月廿四日、堀藤次親家郎従藤内光澄等於入間川原誅之、此事武衛姫君仄聞而断水玉フ、七代マテ可崇ト誓願也、故ニ仍忠久ヲ西国ヘヲトシ玉フ、是ハ重忠カ計コト也、穀、二位政子殊以哀傷云、

30

大系圖

- 基通（七年メ、天福元年五月廿九日、七十四、）
  - 家實（十六年メ、仁治三年十二月廿七日、六十四、）
    - 家通
    - 家輔
    - 兼經（正元元年五月四日、五十、）
      - 基平（文永五年十一月十九日、二十三、）
  - 兼平（永仁二年八月八日、六十八、）
    - 基忠（正和二年七月七日、六十七、）
      - 冬平
      - 冬教（建武四年正月廿六日、年四十、）
        - 師平
          - 冬通（至德三年六月十九日、五十七、）

31

仁礼覺之丞系圖

- 基實（法性寺殿）
  - 實實（本ノマヽ、）
  - 兼經
    - 家基
- 基平
  - 冬教
    - 冬通
- 基忠　仁和寺殿　此御養子嶋津忠久、
- 了暁僧正　仁和寺
- 忠久　嶋津判官　七歳ニテ在京、了暁僧正之御門弟、藤原姓ニ改也、建久九年御下向也、
- 忠義

32

見于加世田士仁禮覺兵衛古文書

忠久公ハ他腹たるニより、鎌倉龜かやつ長江ノ江太常諸家大概、大江姓江田氏忠久公御廻文なとへ小野太郎家綱と有之云々、陸介ニかくし守護し奉る、御年七歳ニて御上洛有て、又花尾社御神躰ノ鏡ノ裏ニ、當国守護所惟宗忠久并小野氏悉地成就ノ仁王寺ノ了暁僧正ノ門弟ニ成せ給ふ、了暁僧正ハ前関為メトアリ、小野姓江田氏カ、可糺也、白基忠公ノ御舎弟なり、依之忠久公改源被任藤原ノ姓、被補薩隅日三ケ國守護式、其時ニ前ノ大橋中将殿ハ於日州冨田生涯させ、それより三ケ國一統ニ忠久公ヲ守護と奉仰、法名得佛云々、

33

○正文在阿久根士伊地知權左衛門

此御肴ハ宮肴と申也云々、

又御當家に門屋をきらひ候ハ、門屋なき所に御宿をめされ候て、十三の年まて御せいしん候之間、其御佳例を引也、

さるほとにわかミやの戸ひらにむしくいしけることあ

り、そのゆへハ、より朝の御むすめきそのよしたかのかミさまにならせ給ふを、より朝よしたかハのちにむほんやあらんとて、御むこなれともちうし給ふ、そのうらミにかのひめきミもはやくうせ給ふか、わかつまのよしたかうたせ給へるそのうらミには、をやなからもより朝をうらミ申さん、きやうたいなからもよりいへ・さねともうらミ申へし、さりなから三郎御さうしハそのうちミやうしかへ給ふへし、さあらはなかくより朝のかう子とならせおわすへし、そのならすハ先三郎とのかいのちをめされ給ハんとの虫くいとそさたしける、別當このよし申給へハ、より朝ハ大きをとろき給いて、わか身同クよりいへ・さねとものミのうへを御ちかへあり、さま〳〵の御きねんめされけり、そのことくわかミやに御参りありて、むさしの國のや（ママ）はたけ山ちゝふとのめしよせ、此三郎にゑほしきせ、御ミの子となつけ候へとのたまへハ、かたしけなく候とてやかて御ゑほし奉り、その御なを又三郎とのとかうしたたり、（本ノマヽ）御なのりもしけたゝの忠と云字をかたとりたゝ久とさため申されけり、その時よりともいまたしか〳〵のぬしさたまらぬ國なれはとて、ゑちせん・しなの・伊勢・わかさ四か國を給ハらせ給いて、やかてあつま御打立とさたまりけり、その時ちゝふとのほん田二郎ちかつねかむすめをちうあいし給ふか、その腹にひめ君一人おハし給ふを、かの又三郎とのに奉り、とりむこにこそ申させ給ふ、そのまゝ又三郎との御とし十三にてあつまの御大将めさるれハ、はたけ山とのふく将軍にて御ともし給ふ、又その時より朝菊とち一つけそへさせ給へかしとのたまへハ、しけたゝ申されけるやうハ、このゑとのとゝめ給ふハすなわち、かすか大明神の御とゝめ給ふに是をなし、ことにあつまのいくさもあまりもうせい打ニみなれハ、しせんミちかへなと申さん時も、此菊とちをしるへに御ふさた申ましけれハとて、もとのことくにてたゝせ給ふ、それよりいくゑめさるゝもそのことし云〻、

34 ○野田曖口上書写

口上覚

野田屋地村若宮大明神由來之儀、　忠久様初而御入部

之砌、右在所へ被遊御座候御屋地其紛無御座由候、然者御供仕被罷下候市來崎之何某　忠久様御尊形建立仕、若宮大明神与奉安置候由申傳候、依之右市來崎氏神之由唱來候、御尊形之様子者冠装束ニ而被遊御座候、右座主西前寺と申候、則御宮之脇へ有之、天正年來迄者右寺慥ニ為有之由候へ共、只今者御蔵入ニ罷成候、右申傳之儀別条無御座候、以上、

野田曖
吉満善左衛門印

丑六月廿七日　　右同
肥後仁右衛門殿　　橋口清左衛門

35 鹿籠神田千六抑留

○嶋津御家記上

抑薩摩ノ国ノ太守嶋津殿ト申云々、日向ノ国へ流サントテ摂津国住吉ノ原迄烈下リケル、比ハ養和元辛丑ノ歳十二月大歳ノ夜ノ事トカヤ、彼住吉ノ松原ニテ俄ニ腹氣ニ付セ給フ間、道ノ辺ニ平ク大キ成ル石ノ有ケルニ御輿ヲ掛云々、

36 ○カコ松下七郎右衛門御家記録上ノ抄

頼朝仰ニ西国へ忠久可下着由仰出サレ、十三騎馬ヲ給リ都ニ御上着ナサレ参内シ給ヘリ、法皇宣旨有ケルハ、先年宇治平等院ニシテ被討シ高倉宮ニ似タリシ叉ノ不思議サヨト思召、高倉養子ト宣旨ヲ蒙リ給フ、已ニ高倉宮ニ備給フ、頼朝被聞召大ニ瞋リ給ヒ、急キ可有下向ト被仰間、則奏聞アツテ西国御下著アリ、

忠久御供ノ人衆云々、

慶安五年壬辰三月初九写之、

隅州國府之産藤原忠與

37 ○同人蔵

島津御先祖代々次第

島津判官忠久者源氏頼朝之三男、丹後之局之御子也、畠山重忠カ申状ヲ以テ近衛殿之猶子トシテ藤原ノ姓トナル、子細ハ、頼朝ノ御家ニ近衛殿ノ崇(タヽリ)アリ、春日ノナギノ葉ニ虫クイアリ、重忠異見ヲ以テ忠久ヲ其家トシテ此三ケ国ニ坂東四ケ相加テ七ケ国之太守トシテ下向アリ云々、

慶安五壬辰十月廿有二写之、

主　松下四郎兵衛久常

38　○正文在市来八左衛門　同本在加世田市来二郎兵衛、

嶋津殿　惟宗氏時之御系圖

元祖　蘇我大臣

孝親施樂院使

就至要略往代分也、

『吉記　治承五年三月廿三日　己亥

奏　除目事申弾正忠　大学少允惟宗孝親　伊勢　初斎　宮并造賀　茂舎屋功、

孝言　掃部助

基言　日向守

長久四年九月惟宗孝言』

千載集作者

後樂院使　従四下　廣言　筑後守

忠久

忠季

張紙

文学傳

大江音人子

澄江孫佐国頗善詩文、長久四年與惟宗孝言・源時綱等試於校書殿、百錬鈔・扶桑略記

具瞻　従五下　陰陽頭

正邦　従五下　陰陽守

孝親　従五下　能登守

忠言　伊賀守　掃部助

是国分執印市来方之系圖、

紀中納言

忠方

宗大納言

知国

國廣

忠友

忠康

忠久

忠季

當家惟宗氏時者國分方之系圖ヨリ御出候之間、非同姓、ちかくまいりて候にて被申候、加世田本よし被申候、既ニ奉行所へ忠泰、忠久ト被出候、又當國之守護代阿蘇谷久助雖為惟宗氏、別名之由被仰、奉行所ニ被出系圖蘇我大臣より廣言、忠久と御出候、わかさの三方殿方ニ此系圖アリ、

口上書朱也、加世田本

惟宗氏系圖當家市来さうろんのけいつ也、

39　○仝

醍醐天皇第五王子

康平六年丙申始賜惟宗姓早、

惟宗親王

慶頼王

頼房　イ五上　伊勢守　母中納言朝成卿女

重賢

朝明
教親　字名奥州三郎
孝言（ノリノブ）　字名奥州四郎　日向守　同国司
基言（モトノブ）
廣言（ヒロノブ）　八文字民部太輔○和歌之達者、日向国之国司、忠久ト一腹之兄弟一人アリ、従　頼朝将軍丹後ノ局ヲ給、（島津庄住イ）
忠久　又三郎　法名得佛　御分国七ケ国越（前脱カ）・若狭・伊勢・信濃・
薩摩・大隅・日向
太夫判官　衛門兵衛尉　御母儀丹後局
忠康（イ）　息男忠綱、分国越前・若狭、
承久三年六月一日改惟宗氏号藤原氏、
母チ、部父畠山重嵩女、重忠姉タリ、（イ）
忠季　若狭守　於宇治戦死、　若狭国三方郡ヲ給テ三方ト号ス、
母丹後局（イ）
忠經　若狭兵衛尉　於宇治戦死、
女―友成　市前御前
女―友成　勢至御前
○政家　左衛門尉　歌道之達者
笠懸之上手
法名道證

以下略ス、

40
○都城相馬長存坊蔵
義經
女子　文治五年閏四月卅日泰衡討義經云々、入持佛堂先害妻子、
妻河越太郎重頼女、于時廿二歳、女子四歳、仁安三年戊子生　文治二丙午生
千歳丸　母礒禅師女静前、文治二年丙午五月廿九日誕生、棄于由比浦、

41の1
四
廿二番箱
御當家始書　到天文十、
御當家一巻書（イ）
攝州
當國住吉にて御産氣出來と見へ給ふ、（ニイ）其あたりニ御宿をかられけれとも、社領ハふしやうをいむよし申て一宿をたてまつる所なし、さて有へき叉ならねハ、御輿をとある石の上ニ撥居ヱ、宿（御旅イ）を求（給イ）○問御産の紐を解給ふ、則チ男子にておハします、かくて一夜を明給ふニ、大雨しきりニふりて深夜のいぶせさ限なかりしに、一狐來て火を灯云々、（其アタリヲ奉守護風情也云々、）

41の2

五

御當家始書　到尊氏世、

當國(攝州イ)住吉ニて御産近付タリト申、御一宿ヲ可奉無所、角テ可有ニ不叶者、御旅宿を尋間ニ御輿ヲ為有石上に立奉レハ、則御産紐ヲ解給フ、則忝男子ニテ御座ス、已ニ一夜ヲ明シ給フ、折節大雨頻降て闇夜之難忍、乍思兼者一之狐来テ火ヲトホシ、其當リヲ守護シ奉ル風情也云々、

財部百姓　『朱　古今要用之記　平田純正ノ集ナルベシ』

波田野太郎(ママ)廣御供

42の1

嶋津忠久西國下向事

承久三年六月一日忠久立鎌倉西国御下向之時騎馬之衆

『本田代々侍所幡之奉行ト大島殿書物ニ有也』

一先陳之衆

『総領騎馬奉行国綱ト大嶋殿本ニ有也』

佐々木　三尾屋　玉作　達手　結城　小山　宇都宮

志和屋　難波　酒匂　本田　猿渡　齊藤　佐武　毛利

曾我　長野　豊司河原(テシカハラ)　豊嶋　篠崎(イニナシ)『原イ』　田代　岡崎　伊

『東イ』藤　二宮　岡邊　奈古屋　布施民部　雲野　望月　中

条　大宮　那須　鹿島

頼朝仰ニハ西国へ『忠久』可流ト仰出シ、十三騎ノ々馬ヲ給テ都へ上リ　大裏ニ参籠シ玉へハ、　法皇宣旨有リケリ、先年宇治ノ平等院ニテ被打シ『玉フイ』高倉宮ニ似タル叉ノ不思議サヨトテ昵(ナツカ)シク思食、養子被召御子ト定置玉、既ニ高倉宮ニ備へ玉梟ルヲ、鎌倉殿聞食シ、(大ニ『是非西国へイ』瞋リ給イ、西国へ)急(イナシカ)(キ令)下向仕候へト仰セケリ、

頼朝ノ御意ヲ背カス大裏ニ御暇『ヲ御』申玉ヘハ、　法皇左モ右モ忠久ホウタイト宣旨ヲ出給ヘハ、忠久大裏ヲ罷出ント仕レハ暫シ有レト宣旨アリ、忝モ　法皇曰、『存分有シ公』『云イ』西国三十三ケ國ヲ取『ス』ル也、西国ノ将軍ト成ルヘシト宣旨ヲ蒙リ、復征夷将軍ト定玉、還々(『又』『ヘリ、返々』)モ九刄ノ諸大名忠久ヲ用ヘシトノ宣旨(成(『也イ』)テ、軈テ西国へ下向ス)、

『以下大島長二郎殿本ニテ如此』

『二承久三年八月吉日『ニ』(『十』『廿』)築紫ノ諸侍七百騎ニテ安藝国東(『ナシイ』)西条マテ御向ニ参、同八月廿三日『薩州』山門ニ着セ玉フ、

『朱大島殿本』

一御供奉之衆　元亀貳季戊午卯月十六日書之也、伊作宗兵衛尉慶久忠房　本ニ校合シテ直ス、

鎌田　國綱　鮫島　達手二郎　佐武　神崎　雲野　三

蒲　武石　渡辺　甲斐　土井　岡崎　玉手井ィ　和田　葛
木　森　塩屋尾ィ『イ』　藤井　奈古屋『二宮』鉢屋　蓮我　矢
部　進藤　惟宗氏八文字民部大夫　寺尾　山内　東条
安達　隅田　漆崎　横山　遠山　市木崎　用藤　鳴海
中山　大井　井上　長尾『佐藤』鳥取　大石　高橋
岡邊　海老原　立山　佐澤　愛郷『甲ィ』　岩下　薗田　有馬
『伊梁瀬一本無伊』　村上　入間河イニ下　奈須上『イ』　佐野『郷ィ』　宇那上『郡ィ』△
簗瀬△　西郷　勢野能イ『イ』　白河　達手　町ノ鼻　〔玉作イニナシ　安
藤　後藤　佛崎『四名一本』〕豊嶋　白鞍　加藤　『白川ィ』　難波
貴嶋　奈古谷　海老原　森山　純友能ィ〔　谷山　別府
野辺　三俣　大寺『居ィ口』　矢木　若松　藤澤　星ノ屋　科河シカ『川ィ』
野間田　穂辻　兼澤　岩崎　成田　篠原　天階　志田
『日高ィ』　臼井　美豆間　宮崎　瀬ノ下　大田　天明
熊谷　小野　阿野河ィ　佐藤　田古浦『下』　小林『上』　大野　森崎『嶋ィ』
井俣　邊見　小杉板　安部　下山　鳴尾　久木崎『能施』
江口　釼持　弓削
『能瀬治部大夫　日高　平木間　惣以上
二百五十騎ィ　廿八』
『大島殿本ノ寫　古今要用之記ニアリ、
平田純正ノ集ト見ユ』

一丹後御局ト申ハ、冷泉天皇『院ィ』ノ御末惟宗〔ノ卿蕚ヒキ比企ノ〕藤四
郎〔義數姉也『ト』云人ノ御子也〕、頼朝〔大臣之イナシカ〕思人也、無程懐妊
ノ身ト成給ヒ御ィ二位殿聞食、御身ヲ〔料玉ハカラフ〕ヘキ由仰有
〔ケル『リ』〕、頼朝聞食、サテハ〔トテ我仰ケルハ、丸カ〕天下
ノ将軍ト成ヒモ時政〔家ノイナシカ〕故ソカシ、去ラハ『一節』
『カノ』丹後ノ御局ナシヲ西国ヘ流スヘシト〔テイナシカ〕流。〔シ玉ヒ〕ケル、サントイニ『リ』
其時御局ナシ住吉ニ御参籠有ケレハリシニ、住吉ノ御前ニサレテ大歳ナシ
之夜ノ事ナリケルルガイニニ、平石ノ有ケルニ、其ヲ産屋ト〔誘『住吉ノ御前ニ』シテ『シテ』
ヘ、御〕産ノ紐ヲ解玉フ、去程ニ明神驚玉イテ、八旬
計ノ翁ト現レテ、〔覺悟『格護』〕ノ叉ヲ仰有ルル『ル』ノ来給ラン『カ』ニリテ、其時八人ノ
女房達何ナシクヨリ〔トモ不知出〕來、未タ無シ屏風・障子、
疊ヲ敷テ炭火ヲ起シテ〔念比イナシカニ覚悟加責シ玉フ〕、先ツ産ノ
腹ニハ粥コソ藥ニテ候〔ヘイナシカ〕トテ粥ヲ煮サセ〔タヒイナシカ〕玉フ、
八人之女房達各々色々ノ藥ヲ以テ得サセ玉フ、〔程无イナシカ
ク〕夜モ明ケレハ明神ノ神主出仕申玉ヘハ、夜ニマキ
レテ女房達ハ〔何方トモ不知一人モ不見〕失玉フ、正身ノ稲荷ニテ
在ス、巳ノ時ニモナシ成ルハ、車軸〔ヲ流ス様ナルノヤウナル〕大雨降
テ住吉ノ庭ヲ清メ玉フ、神主御産ノ子細ヲ申テ鎌倉ヘ
〔人進『ニテア』〕レハ、頼朝〔聞食テイナシカ〕仰ルハ、男子ナラハ
〔注進申ケ〕

〔能覚悟スヘシトテ〔イナシカ〕〕八文字ノ民部大夫ニ『輔廣征』仰付ラレ、住吉ニ罷下丹後ノ御局ヲ覚悟申候此、〔ナシ〕

『一』三郎若君程ナク成人有梟ハ、其後頼朝丹後ノ御局之事民部太夫ニトラスル〔ナシ〕也ト仰ケレハ、忝モ〔仰ヲ蒙リ〕〔イナシカ〕丹後ノ御局ヲ〔覚悟申ハ『婦ト定ム』〕〔ナシ〕程無〔トイ〕久〔男子一人出来リ玉フ、此由ヲ将軍ヘ申ケレハ〔『ニ』〕〔聞食テ〕〔イナシカ〕〕軈テ民部大夫ニ〔所知ヲ〕〔イナシカ〕トラセント仰アリテ〕若狭国三方郡ヲ給テ三方ト号ス、忠久ニハ〔ナシ〕一腹ノ兄弟也、〔去間〕〔イナシカ〕丹後ノ御局〔ナシ〕〔ケハヒ〕粧所〔『国々ニ』〕〔六十六ケ国ニ〕一所充〔ツ、『是アリ』〕給ル、是ハ『モ』三郎若公ノ謂也、〔忠久〕〔イナシカ〕ヨリ已来〕維宗氏ヲ名乗玉フ支丹後ノ御局ノ謂也、去程ニ蟇判官ハ市來郡給テ居住ス、維宗ノ卿ト申ハ冷泉院御門之三代之孫也、『八冷泉三代孫也』

張紙

一忠久下向已後、久恒之弟　口六ケ國ニ手付テ島津ヲ滅サントセシ時、肝付ニ打入テ山城ヲ始テ取リ、二年半ニ運ヲ開支如何ト云、三月十八日、十五六計ナル女三俣ヨリ来テ、畠山禮部只今大ニ噪〔サハク〕支候、其ヲ如何ト云ニ、三ケ国ノ圖田帳ヲ披見シテ喜フ所ニ、霧嶋ノ嶺ヨリ鷹一飛來テ、畠山重代太刀并圖田取リ、本ノ如ク飛皈ケリ、礼部大ニ力ヲ落、迷惑スル支限リナシ、是ハ只今ノ支也、久恒急ニ庄内ノ如クニ御出候ヘト云、攪ケス様ニ失ニケリ、彼女ノ訓ノ侭、久恒去ハトテ打出ケレハ、荻峯ニテ程无ク三千余騎ニナル、高木ニ付ケレハ八千余騎ニ成ニケリ、終ニ礼部戦負テ喪ニケリ、其後忠宗ノ御時、二齡ノ頼長三ケ国ヲ手ニ付テ二年半知行致、此時モ山城ニ篭リ、打出テ大慈寺ノ山門ニ二齡腹ヲ切ル、惣シテ肝付緩怠致六度也、其後高氏之御下向ノ時伊作ニテ腹ヲ召サンセシ時、急キ忍落玉テ大宰府ノ小貳ヲ憑玉ヘハ、小貳程ナク憑マレケリ、是ハ貞久ノ御時也、軈テ高氏對治申ヘキ為甲〔カフト〕三百廿〔ママ〕人殺六万八千人也、終運ヲ開キ玉テ西国ノ将軍ト喚ハル、其已後大宰小貳カ六ケ國ヲ手ニ付テ三ケ国ヲセハシメケレ共、肝付ノ山城ニ閉篭リテ運ヲ開テ小貳ヲ攻隨ヘテ運ヲ開支、偏ニ稲荷ノ御計コト也、我等カ家ヲ傳ルヘキ者ハ稲荷ヲ能々信仰可申也、第七度マテ肝付緩怠ヲ致ス支アリ、是ハ貞久之御時也、

八十五才
季安補帖ス、

右張紙酒匂氏古寫有リ、

丙寅正月廿五日

一忠久下向ノ已後云々、
右、承久三年八月吉日ト有之裏ニ有、
朱カキ
一東西条ト号ル謂ハ、忠久御下向之時九州ノ諸侍早ク御向ニ馳参タル所ナル、故東西条ト号シ候コト也云々、
右者御本ハ朱書也、

在口裏、
嶋津殿御下向時御供次第
廿二箱三十五
忠久様御下向騎馬日記　青袴紙巻物
廿一
忠久公御下向御供人数帳

（本文書中ノ〔　〕ハ異本トノ相違ヲ示ス線ニヨル）

42の2

『伊作忠房古本ヲ写ス』

『○』一東西条号ス謂ハ、九州ノ諸将早ク御向ニ参タルニヨツテ『○』忠久之仰ナリ、

『○』一承久三年六月一日立鎌倉ヲ、『○』忠久西国ヘ御下向之時騎馬之衆、

一先陣之衆　佐々木　三尾屋　玉作　達手　結城　小山　宇都宮　志和屋　難波　酒匂　本田　猿渡　齋藤　佐武　毛利　曽我　長野　豊司河原　豊嶋　篠崎　田代　岡崎　伊藤　二宮　岡邊　奈古屋　布施民部　雲野　望月　中条　大宮　那須　鹿嶋

『○』頼朝ノ仰ニハ西国ヘ可流ト仰出シ、十三騎ノ騎馬ヲ給リ都ニ上リ、大内ニ参籠シ玉ヘハ、法皇宣旨有ケリ、先季宇治ノ平等院ニテ被打シ高倉宮ニ似タリシ事ノ不思議サヨトテ昵シク思食シ、養子ニ被召御子ト定置玉イ、既ニ高倉宮ニ備ヘ玉イ梟ルヲ、鎌倉殿聞食大ニ瞋リ給イ、西国ヘ急ニ御下向仕候ヘト仰ケリ、頼朝ノ御意ヲ不背大裏ニ御暇ヲ申玉ヘハ、法皇左モ右モ忠久ホウ退ト宣旨ヲ出給ヘハ、忠久大裏ヲ罷出ント仕レハ暫其有ト宣旨有リ、忝モ法皇云、西國ヘ三十三ケ国ヲ取スル也、西国之御将軍ト成ヘシト宣旨ヲ蒙リ、復征夷将軍ト定玉フ、還々モ九州ノ諸大名モ忠久ヲ用ヘシト宣旨也ト、軈テ西国ヘ御下向ス、

『○』承久三年八月吉日ニ築紫ノ諸侍七百廿騎ニテ安藝国東西条マテ御下向ニ参、同ク八月廿三日ニ山門ニ着

セ玉フ、

一御供奉ノ衆　鎌田　國綱　鮫島　達手二郎　佐武
神崎　雲野　三浦　武石　渡辺　甲斐　土井　岡崎
玉井　和田　葛木　森　塩尾　藤井　奈古屋　鉢屋
蓮我　矢部　進藤　此宗氏八文字民部大夫　寺尾
山内　東条　安達　隅田　添崎　横山　遠山　市来
崎　用藤　鳴海　中山　大井　井上　長尾　鳥取
大石　高橋　岡邊　海老原　立山　佐澤　愛郷　岩
下　薗田　有馬　村上　奈須　入間河　佐野　宇都
上　築瀬　西郷　勢能　白河　達手　町鼻　豊嶋
白鞍　加藤　難波　貴嶋　奈右左　海老原　森山
能友　谷山　別府　野邊　三俣　大寺　矢木　若松
藤澤　星屋　科河　野間田　穂辻　兼澤　岩崎　成
田　篠原　天階　志田　臼井　美豆間　宮崎　瀬下
大田　天明　熊谷　小野　河野　佐藤　小林　田古
浦　大野　森崎　井俣　邊見　小板　安部　下山
鳴尾　久木崎　江口　釼持　弓削

『○』一丹後御局ト申ハ、冷泉天皇ノ御末維宗卿蟇藤（比企）四郎ト云ヘル人ノ御子ナリ、　頼朝大臣ノ思人也、程ナク懐妊ノ御身ト成給ヌヲ二位殿聞食、御身ヲ計フヘキ由ヲ仰有ヲ頼朝聞食、去ハトテ仰ケルハ、丸カ天下ノ御将軍ト成ヌモ時政ノ家ノ故ソカシ、去ハ丹後ノ御局ヲ西国ヘ流スヘシトテ流サントシケル、其時御局住吉ニ御参籠有ケレハ、住吉ノ御前ニテ大歳ノ夜ノヌナルカ、住吉ノ御前ニ平石ノ有ケルニ、其ヲ産屋ト誘ヘ、産ノ紐ヲ解玉フ、去程ニ明神驚玉イテ、八旬計ノ翁ト現シテ、覚悟ノヌヲ仰有ケリ、其時八人ノ女房達（何脱カ）クヨリ共不知出来リテ、未無ク屏風・障子、タヽミヲ敷テ炭火ヲ覚悟シ玉フ、先産ノ腹ニハ粥ヲコソ薬トテ、粥ヲ煮サセテタヒ玉フ、八人ノ女房達各々色々ノ薬ヲ以テ得サセ玉フ、程ナク夜モ明ケレハ明神ノ神主出仕申玉ヘハ、夜ニマキレテ女房達モ何方トモ不知失玉フ、正身ノ稲荷ニテ在ス、巳ノ時ニモナリケレハ、車ノ軸ヲ流スヤウナル大雨フリテ住吉ノ庭ヲハ清メ給フ、神主御産ノ子細ヲ申テ鎌倉ヘ進人ヲ、頼聞食（朝脱カ）仰ケルハ、男子ニテ有ハ覚悟スルヘキ也トテ八文字民部大夫ニ仰付ラレ、住吉ニ罷下丹後ノ御局ヲ覚悟申候、三郎若公ホトナク成人

アリケレハ、其後頼朝丹後ノ民部ノ大夫ニ取スルナリト仰ケレハ、忝モ仰ヲ蒙リ丹後ノ御局ヲ覚悟申候、程ナク男子一人出来リ給フ由ヲ将軍ニ申ハ、聞食テ軈テ民部大夫ニ所知ヲ取セント仰テ、若狭ノ国ヲ三方郡ヲ給テ三方ト号、忠久ニハ一腹ノ御兄弟也、去間丹後ノ御局粧所六十六ケ国ニ一所充給ル、是ハ三郎若公ノ謂也、忠久ヨリ此方維宗氏ヲ名乗玉フ支丹後ノ御局ノ謂ナリ、去程ニ蟇判官ハ市來院ヲ給テ居住ス、維宗卿ト申ハ冷泉御門ノ三代之孫也、

『○』一忠久御下向ノ以後、久経之帯(弟)口六ケ国ヲ手ニ付テ嶋津ヲ滅サセントセン時、肝付ニ打入テ山城ヲ始テ取リテ云々、

『○』一忠久ノ御下向ノ後チ云々、忝モ稲荷大明神當家ノ家ヲ守フルヘキトノ御チカイ也、稲(荷カ)ハシメ奉(ママ)支、忠久ノ御時御勸請也、

承久三年十一月吉日

『○』一久經御時、アイラノ庄二百八十町并ニ男山八幡大菩薩御寄進也云々、

『○』一九州之運奉行之事、

難波・石塚・長野・福崎是四人也、

藤原伊作宗兵衛尉〈慶久
忠房

永禄元年

元亀貳季 戊午卯月十六日書之也、

43 写在市来衆北山調左ヱ門

下　嶋津御庄政所

補任　北郷弁済使職事

日置兼秀

右以人、依今度奥入御共之奉公、所補任彼職也、御庄官等宜承知、更不可違失之状如件、以下、

文治五年十一月　日

前左兵衛尉惟宗御判

（本文書ハ「旧記雑録前編一」一四六号文書ト同一文書ナルベシ）

右、忠久公兼留守職之故(下カ)サレシ下文ノコト、元久二年七月　日ノ言上ニアリ、

44
土持權兵衛家来冨次右衛門（山脱カ）
冨山刑部丞子息小童、母相具可上洛之由、可令申（旧所）也、
早件小童ヲハ付母堂、可被上洛也、仍執達如件、
五月九日　花押
嶋津左衛門尉殿
（本文書ハ「旧記雑録附録一」五〇一号文書ト同一文書ナルベシ）

45
寫
薩摩郡内山田村本領主大蔵氏所進折帋獻之、如状者、
右近将監友久狼藉無遁方欤、早相尋子細、所行若実者、
可令召進関東給候、仍執達如件、
十月廿七日　右京權大夫（北条義時）　在判
嶋津左衛門尉殿
建保六年十月廿七日給了、
（本文書ハ「旧記雑録前編一」二五四号文書ト同一文書ナルベシ）

46
（花押）
薩摩郡内山田村の名頭職事、大蔵氏女帯證文等、可令
安堵由依訴申、任文書之道理、可令領知之由、所成賜
外題也、早無其煩、件村に大蔵氏を可令為居之状如件、
建保六年十一月廿六日　中務丞（旧忠俊）〔公往〕奉
薩摩方地頭代官（旧殿）
（本文書ハ「旧記雑録前編一」二五五号文書ト同一文書ナルベシ）

47
可令早左衛門尉惟宗忠久、為信濃國太田庄地頭職事、
右人、可為彼職之状、依仰下知如件、
承久三年五月（旧八）七月十八日一本　陸奥守（北条義時）平朝臣在御判
（本文書ハ「旧記雑録前編一」二七〇号文書ト同一文書ナルベシ）

48
可令早左衛門尉藤原忠久、為越前國守護人事、
右人、任先例、可致沙汰之状、依仰下知如件、
承久三年七月十二日　陸奥守（北条義時）平判
（本文書ハ「旧記雑録前編一」二八四号文書ト同一文書ナルベシ）

49
廿九之内
坊泊之一乗院

一忠久十八歳之御時西國之将軍ト成給支、
白川法皇御院宣ニヨリ復政夷将軍ト号ス、殊ニ高倉院
ニ忠久似サセ玉フトテ御養子有リ梟リ、

50

大口士曾木庄右衛門本
一大隅国菱刈郡曽木之継圖

- 忠通（大政大臣法性寺）
  - 基實（正一位近衛殿）
    - 慈鎮（三寶院）
    - 基房（松殿正一位）
      - 師家
    - 忠良（正三位）
      - 兼實（正一位月輪公）
        - 良經
  - 基通（從一位関白普賢寺 近衛殿）
    - 忠良（正二位大納言）

51

在若松十左ヱ門
清和系出ニテ　　頼朝

- 頼家（二位）
- 貞暁（法印）

52

- 忠久（信刕・越前・泉刕・伊勢・隅刕・日刕・薩刕守護、法師房　得佛　大夫判官　豊後守　畠山息女御臺）
  - 忠季（宇治川打死、忠久一腹、非頼朝子、）
- 忠久（豊後守　号島津、判官　法名得佛　弘安九年丁亥三月廿一日薨矣、）

承久三年六月、為近衛殿養子、改惟宗氏号藤原、
其母丹後御局也、
右伊集院善太夫系圖、

53

仝
寛喜二年十一月十三日庚子
経高卿給大隅國、元周房知之、又給東北院庄、近日悦喜馳走
云々、日来清貧由謳五噫之間、有此支欤、按察弥忿怨
欤、

54

明月記　寛喜三年三月大
三日己丑、風適休、朝間小雨、已後止、未時天晴、今

日聞、貞暁法印鎌倉右大将息、二ナリ年四十六、去月廿八日乙酉也逝去、及廿年籠居高野山、不食病臨終正念云々、母禅尼依被悲歎又待時、行覚扶持、件禅尼共在摂州云々、云々、

55 在平山次郎右衛門　八

忠久

御母丹後御局参詣住吉、於神前忠久御誕生、其場稲荷依灯火于今稲荷大明神崇氏神給也、丹後御局三浦介息女也、比岐藤四郎姉ナリ、三浦ハ義朝御最期時自害、依之藤四郎ハ頼朝公御近習也、

56

乍恐申上候、私元祖八文字民部太輔惟宗廣言事、　忠久公之御母堂丹後局を自　頼朝公廣言江被下候ニ付、忠久公於廣言宅奉養育御成長候、因茲惟宗忠久公与奉申候、然者御幕之御紋者廣言幕之紋蓬莱舞鶴ヲ被遊御付之由候、後迄ニ十文字之御紋ニ蓬莱山ヲ被遊御加之由候、廣言者日向國司之由候、廣言初之妻ハ畠山重忠姉ニテ御座候、此腹ニ出生之子忠康と申候、宇治川ニテ戦死仕候　忠久公一腹之御舎弟忠季ニハ　忠久公ヨリ若狭國守護ニ成御申候而、嶋津称号迄被成御免候、忠久公御二男忠綱ニハ越前守護被進、御三男忠直ニ者甲斐國波加利庄被進候之由候、忠季・其子忠經皆〻承久乱致戦死候故、廣言一族之國分友成ヲ養子ニ仕、市來院尼道阿養娘ニ嫁、政家ヲ出生仕、外祖之譲ヲ以市來ヲ領知仕、左候而、惟宗ニテ罷居申候、政家事阿蘇谷氏ト家争之事舊記ニ有之由候、元弘建武之比市来太郎左衛門氏家与申者軍労仕候事、證書歴然ニ御座候、其上氏家ハ蹴鞠之名譽在之ニ付、自　後醍醐天皇被召出、於禁庭御相手ニテ鞠ヲ仕候、持明院法皇・近衛殿・徳大寺殿・花山院殿・難波殿・高武蔵守師直、以上八人其圖于今在之候云〻、

巳七月九日　　市來太郎左衛門印

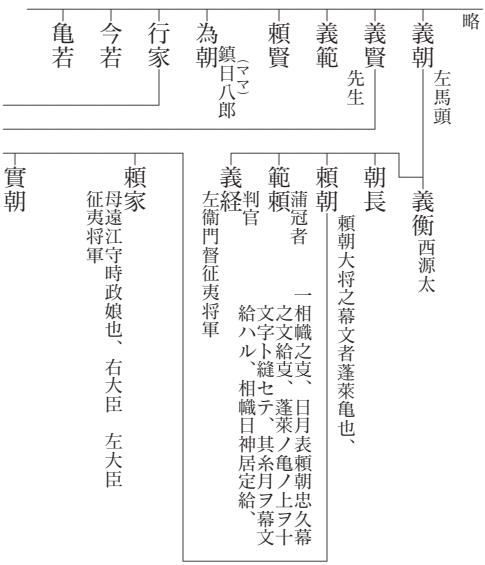
57

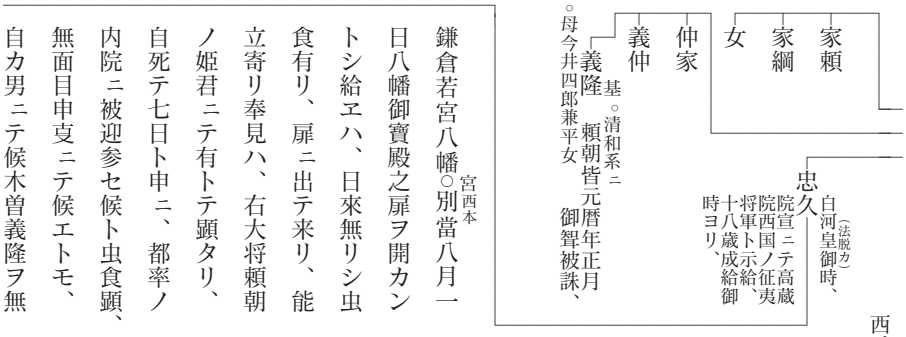
執印久馬系圖

判官忠久母義丹後御室之兄康友也、頼朝御子

忠久養子仕候而薩摩国譲申太郎ヲ号ス、執印
二男ハ号国部、

58 ○加世田士若松十左衛蔵（門脱カ）
一幕之文事
惣領者五布懸也、庶子ハ三布懸定也、
㊥ ✝ 同所士西掃部兵衛本
人王五十代御門
桓武天皇　此間略ス、





西氏本ニ承久元年八月一日
忠久御知行七ケ国定候、
忠久十八歳御時西国下シ給、六月一日ニ関東ニ立給、都ニ上洛有テ内裏ニ参内申シ、御下向ノ由ヲ奏聞ス、君ハエイランアツテ　宣使下シ給フ、ヒトヽセ宇治ノ平等院ニテ打タル高倉宮似ル叉ノナツカシサヨ被仰テ、ナミタヲ流シ給テ、西国エハ下スマシキ也、丸ガ子ニセントセン（衍カ）ト　宣使ヲ成給テ、高倉宮ニ十八日卽位

鎌倉若宮八幡（宮西本）○別當八月一日八幡御寶殿之扉ヲ開カントシ給ヱハ、日來無リシ虫食有リ、扉ニ出テ来リ、能立寄リ奉見ハ、右大将頼朝ノ姫君ニテ有トテ顕タリ、自死テ七日ト申ニ、都率ノ内院ニ被迎参セ候ト虫食顕、無面目申叉ニテ候エトモ、自カ男ニテ候木曽義隆ヲ無

情殺シ給ヮ無念ノ子細也、故ニ命ヲ捨テ義隆ニ來世及契ヲ成ヘキ故ニヨツテ命捨也、頼朝ノ子孫ニ於テ七代及祟ヲ成ヘシ、中ニモ頼家・實朝コソ怨メシク存候、返モ自願遂テタヒ給ヱト、北条四郎時政九代マテ可守ト、若宮八幡ノ御寶殿ノ扉ニ顕シ給フ、別當是奉見、現々々理也思行テ、　軈テ此由右大将殿ニ申サレケレハ、　承久三年六月一日関其時頼朝則若宮八幡ニ詣リ、東ヲ立、御寶前ニ参籠シ給フ、時ニ頼朝別當ニ仰ケル、立寄テ見ニ、都率ノ内院ニ進ル程者ナレハ、丸カ子孫ヲ祟ルヘキ叉不可有疑、姫カ恨モ理ナリト仰セテ涙ヲ流シ給ケリ、其時別當八ケ国ノ大名モ上下萬民至テ哀ヲ極メ涙ヲ流ス計也、良有テ頼朝仰ケル叉ハ、別當何ニ丸カ子孫給フ、此由頼朝聞食西氏本○廿一度ノ御ハヒ叉○サアラハ西国下スアツテタイリニソウモンシヘシトノ宣使有、給、御門モエイランアツテ不空征夷将軍ト示給宣シアリケリ、頼朝モ申モフ、西国卅三ケ國ヲ叉ハリナリ、トラスル也ト宣使ヲ蒙ル、サルホトニ内裏ヲ御イトマ申西国ニ御下向、薩广國山トノ郡ニ八月廿三日ト申ニツキヲハン、承久三年六月一日関ニテ候ヘトモ若君之御叉請取申候申ス、頼朝聞食大ニ御叡感給フ、重忠重テ申ケルハ、同ハ今日若宮ノ御前ニテ烏帽子ヲ着奉申、大将殿聞食テ、兎モ角モ重忠法弟也仰有ケレハ、其時重忠軈名乗ヲ忠久ト奉申也、其時八ケ國之大名一同ニ重忠ヲ裏病ン人コソ無カリケレ、其時頼朝又三郎所領取セント思食、重忠仰ケレハ、何レノ国カト御尋有ニ、北国ニ越前國、若狭国、伊勢国、信濃コソ未守護モ不定候ト申ス、其時頼朝四ケ国ヲ取スルト仰ケル、重申様、同ハ大隅・薩广・日向ヲ副テ七ケ國給候、忠久薩摩エ下申サント申サレケレハ、頼朝兎モ角モ重忠計フヘシト仰ケリ、六十六ケ國中ニ七百七十七津ハ忠久ニ取スルト仰ケル、承久元年八月一日、忠久七ケ國給リ御知行定候、是モ重忠依申状、承久三年六月一日御着下候早、西氏本下着

丹後ノ御局ハ惟宗ノ卿ノ娘メ也、忠久妹婿近衛ヲ残置ヘキ由仰ケレハ、別當笏取直シ、愚僧カ申ヘキ叉ハ憚リナレ共、平重忠ニ御尋候ヘト申玉イ、其時頼朝重忠ヲ召テ仰ケルハ云何カ、重承テ、恐（ママ）（忠脱カ）ニテ候ヘトモ若君之御叉請取申候申ス、頼朝聞食大ニ御叡感給フ、重忠重テ申ケルハ、同ハ今日若宮ノ御前ニテ烏帽子ヲ着奉申、大将殿聞食テ、兎モ角モ重忠法弟也仰有ケレハ、其時重忠軈名乗ヲ忠久ト奉申也、其時八ケ國之大名一同ニ重忠ヲ裏病ン人コソ無カリケレ、其時頼朝又三郎所領取セント思食、重忠仰ケレハ、何レノ国カト御尋有ニ、北国ニ越前國、若狭国、伊勢国、信濃コソ未守護モ不定候ト申ス、其時頼朝四ケ国ヲ取スルト仰ケル、重申様、同ハ大隅・薩广・日向ヲ副テ七ケ國給候、忠久薩摩エ下申サント申サレケレハ、頼朝兎モ角モ重忠計フヘシト仰ケリ、六十六ケ國中ニ七百七十七津ハ忠久ニ取スルト仰ケル、承久元年八月一日、忠久七ケ國給リ御知行定候、是モ重忠依申状、承久三年六月一日御着下候早、西氏本下着

丹後ノ御局ハ惟宗ノ卿ノ娘メ也、忠久妹婿近衛

殿姫也、遠江守又三郎得佛、西国ノ副将軍、豊後守左衛門

分国ハ七ヶ国越前・若狭・伊勢・信濃・薩摩・大隅・日向、御母儀丹後御局之本領、

①忠久

大夫判官　得佛　衛門兵衛尉

忠秀　若狭嶋津

①忠義　三郎左衛門　大隅守　初心時畠山

重忠息女　中間ニ　法名道佛　左近尉

本田ハ幡之奉行、酒匂沓役、猿渡御劔之役、幡指左近尉、

59

○頴娃中島仲左衛門本

良文　忠道　三郎　生輔

頼将　伊佐平次

良碁　平大建　嶋津御庄建立　萬壽三年丙寅年　日向・大隅・薩摩也、

忠道

60

○頴娃士山口弥市兵衛蔵

山口之系圖

兼輔　平五大夫

忠久不空征夷将軍御下向時御供申候、是ハ初テ西国ニ御下向ニテ候、于時文治二年丙午六月一日、立関東御供申候、八月廿三日卜申ニ薩摩國山門郡ニ着畢、去程ニ将軍ヨリ給リ候本地之叉、坂東武蔵國由留間河三千貫ノ所ヲ給候、其以後豊前國菊郡二千五百貫ノ所ヲ給候、并ニ筑前国多々良ノハマノ合戦ノ時高名仕候故依テ、トキ吉ノ郡長野庄五百貫ノ所ヲ給候、是ハ総州貞久将軍ヨリ給候、代々将軍七代間傳リ申候、

61

○頴娃開門社家上野筑兵衛

宮原千鎌何モ兄弟末也、宮原系圖

一頼朝大臣ヨリ　仰叉、忠久富征夷将軍御供之由依被出仰、西國御下向御供申候、承久三年六月一日ニ関東立、八月廿三日卜申薩摩国山門院ニ着畢、将軍ヨリ給候本地之叉、河辺郡神殿十八町給候、并古殿五丁・宮

下八丁給候云々、

62

○加世田大山増右衛門系圖

忠久征夷将軍ヨリ給候本地之事、日向国三間郡南郷三百町・同国之郷之内柏原七十五町給候畢、

63

幸綱子
實綱　尾張守　本ハ佐々木兵部少輔、
御供文治二年丙午下向、

64

本城藤田曽右ヱ門持御系図

忠久

安貞元年丁亥正月廿一日薨、御年六十八、

65

長島士四本嘉左衛門

忠久

母儀丹後御局、承久三年六月一日右兵衛佐大夫判官内裡ニテ元服、近衛之姓ヲ借号藤原ト、法名得佛、

能寛

└一法師

66

牛根二川氏

頼政　号源三位入道

仲綱　伊豆守

宗綱　前肥前守　治承四年十一月立都、州廻下着、領彼土、隅

兼綱　大夫判官

廣綱　駿河守

有綱　左兵衛尉

宗義　兵庫三郎

67

仁礼覚之丞系圖　元禄十六年癸未二月六日夜、自宅類焼ニ燼ス、依願再寫史局本、五月廿七日、肥後盛香・市来家年以副書授覚之丞、

基實　法性寺殿

家實

兼経

家基

基平　法性寺殿

按鷹司家ノ人、

冬教

全

冬通

全

基忠　仁和寺殿　此御養子嶋津忠久

了暁僧　仁和寺

『東鑑建久三年壬子四月十一日壬子、若公七歳、御母常陸入道女、乳母事、今日被仰野三刑部丞成綱（仰脱カ）・法橋昌寛・大和守重弘等、而面々固辞之間、被長門江太景国畢、仍来月潜奉相具、可上洛之由被定云々、他人辞退者、御臺所御嫉妬甚之間、怖畏御氣色之故也』

忠久　嶋津判官　七歳ニテ在京、了暁僧正之御門弟、藤原姓ニ改也、建久九年御下向也、

『東鑑建久三年壬子五月十九日庚寅、若公令上洛給、是為仁和寺隆暁法眼弟子為入室也、長門江太景国并江内能範・土屋弥三郎・大野藤八・由井七郎等扈従云々、自常陸平四郎由井宅進発給、去夜暮下潜渡于其所（去脱カ）、奉御剱給云々、六月廿八日戊辰、由井七郎自京都参着、十六日、若公渡御于弥勒寺法印隆暁仁和寺坊、一條殿能宗（卿脱カ）被奉具之、於彼坊有御贈物、参河律師隆邊取之（能保卿カ）』

忠義

68

末吉貴島氏系圖

仲綱　伊豆守　與父於同所戦死、

兼綱　大夫判　頼茂　左馬権頭　與父俱戦死、　○承久元年、隱謀露顕於大内自害、

頼兼　蔵人

文治三年、下向于出雲国住宅杵島郷、由是始号貴島、

頼忠　若狭守　法名道阿

建久七年丙辰　島津左衛門尉忠久公日隅薩三州之為太守而入部也、頼忠亦有其供奉之列、而後居住于日州矣、

69

加世田市來次郎兵衛

此御肴ハ宮肴と申也、其謂あり、忠久住吉にて御産の紐をとき給時、所も住吉にて候へ者、軈而宮肴にて御儀式ありけるあひた、その佳例を引て今ニ此方ハ古躰ニ用らるゝ也、

一頼朝之御時、ひきの藤四郎か娘御宮仕申而居たりしを内〻御寵愛ありける、名ハ丹後の局と申たりけるを御てうあひにて、軈而くわひたいになり給ふ、左候あひた、八文字民部太輔と申て是ハ御奉公申てありけるか、頼朝御意候けるハ、局いつかたへも局（衍）いつかたへもく（カ）して民部大輔御供申候へと承給て、攝津國住吉ニまかりつく、松原に局ハかくし申、御産のひもをとかせ申

さんために、あたり宿をかり候へとも、さんを火を殊にいむかたなれハ、人〳〵宿をまいらせす、かへり候て松原を尋見申候へハ、大きにひらく候石の上にて御産の紐をとき給ふ、大輔めてたくおもひ、男子にてわたり候へ共とりて捨をき、宿をかりうけおき申、能〻いたハり申ける程に、十三の御年まてハ隱しのはせ給ふ処に、其比奥州秀平と申者緩怠あり、是を頼朝御せいはつあらんと思召候へ共、大将にさためられん人もなし、畠山しけたゝに御尋有けれハ、重忠申されけるハ、今日の御座敷ニひたりをりのゐほしきたりけるわか人か御大しやうと申、頼朝不審の事を申物かなとおほしめして、軈而御らん候へハ、重忠申やうに是ハ何ものかと御尋ありけれハ、其時しけたゝ申けるハ、是こそ丹後の局の懐たひにてわたりし時、民部大輔か預申てなかしまいらせ候しとき、住吉にて御産のひもをとき給ふ御子にて渡り給ふと申せハ、頼朝大きにめてたしと御らん候て、やかて重忠を父と号給へと御意下り候程ニ、重忠の忠と云文字をまいらせ忠久と申たり、其後丹後局ハ八もんし民部大輔ニ給てさいあひをなし、男子二人出来たりけるニ、忠久うち川を渡シ時御供申、河をわたし候ける、御馬弱くて河ニうつもれうせしあひた、子孫なし、其時鞍の文ニ桜のもんを仕りけるあひた、當家嫌候、又御當家ニ門屋きらひ候ハ、門屋なき所ニ御宿をめされ候て、十三の年まて御せいしん候之間、その佳例を引候、

一三日まて松原の中にひらくして大きなる石有、其上に此御子捨をき申、三日すき候て八もんし民部大輔今ハとにもかくにもとならせ給ふらんと心におもひ、参候て見申候へ者、白き狐か二あり、このきつねか乳を参せて居たりし見申候て、軈而御宿へ懐かへり、十三まて住よしニ御座候、これにより申事あり、八もんしかうちハ惟宗氏也、市來殿先祖ハ八文字也、ひところ市來殿申され事ニ、我等か家より嶋津殿御出候ほとにこれむね氏にて候と申され候、惣してミなかミをたゝし申さは源氏にてこそあるへけれ共、此方へくたされ給ひし時氏しけたゝか養子として氏をハ近衛殿ニ御申請給ふ、御家の名乗の字ハ重忠のたゝと云もんしをまいらせ忠久と申也、つくしニ御下り候程に、御幕の文何

にて候する哉と重忠頼朝に申されけれハ、おりしも御臺時分にてありけれハ、箸を座敷ニ御なけ候て、これかことくにてあるへしと御意下る、時御箸十文字ニなる間、今にかくのことし、人〳〵十文字と心得候へ共、十文字にてハなく候、御はしのちかふ物也、しきの十文字のやうに筆の勢はねたるもんしのすかた努〳〵あるへからす、御ミぬひと幕の文ハ此方へ御下り候しるし也、人〳〵かやうなる御當家の御事ハくはしくしらぬ也、御ゑほしハ前ニへ書付おく、

一忠久此方へ御くたり候、日向國嶋津庄と申所ニ御下り候ほとに、所の名ニ應して嶋津と号也、

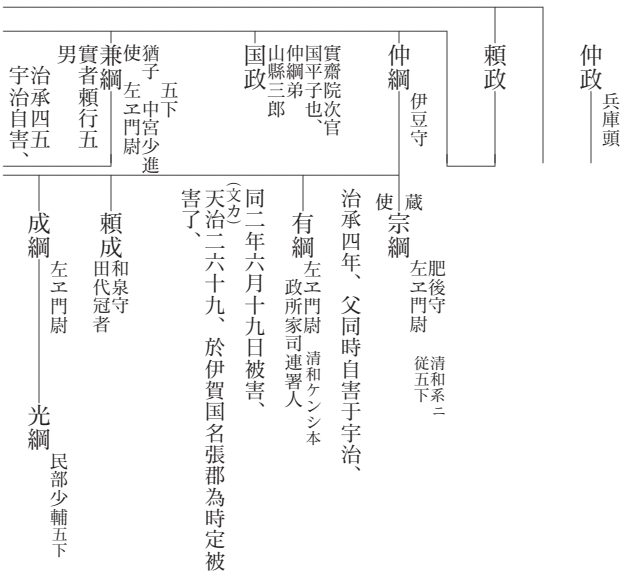
一忠久御はゝハ始ハ丹後殿と申御すゑかたの人なりしを、頼朝御てうあひありしニよて、後ハ局ニなり給ふと言名付候、故ニたんこの局と今ニ爰もとのいはれ人しらぬ也、

70

加世田士市来次郎兵衛蔵

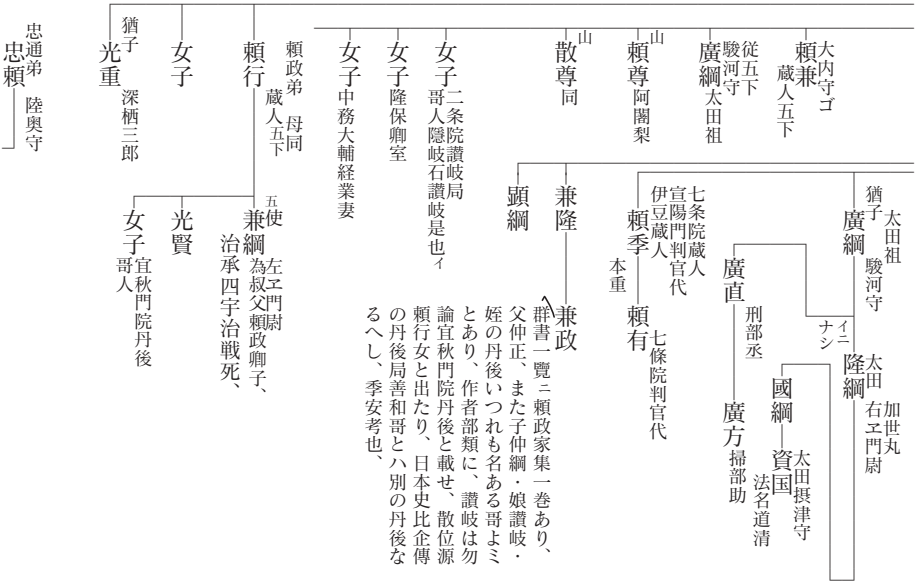
御一家中の様又は殿中外様のえんきむかうていの昔よりめしつかはれて候やうとも存知之分書付候て参候と、

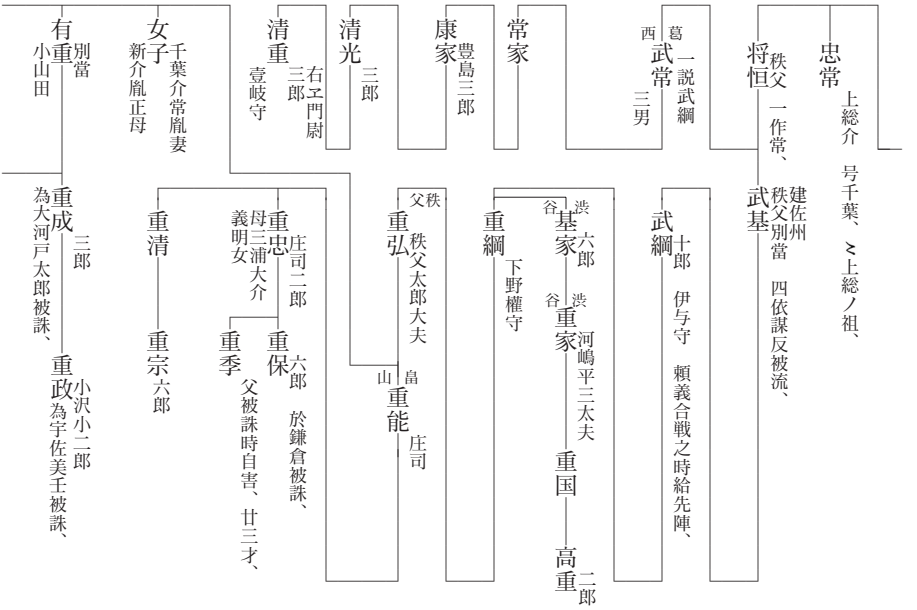
71



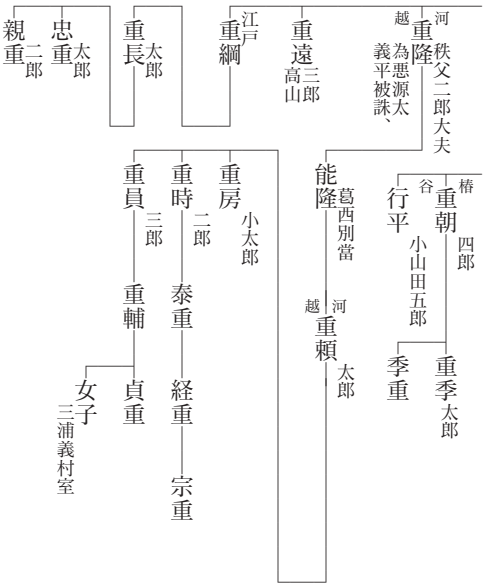
去年鹿児嶋にて承候云〻、忠久もはしめハ惟宗氏、承久三年姓を御かへ有て藤原と号、民部大輔ハ日向ノ國ノ司にて候ける間、庄内之内嶋津に居住候間、嶋津民部大輔と云、忠久茂其故を以三ケ國に御下、已後嶋津に御住居候間、嶋津殿と申奉也云〻、

72

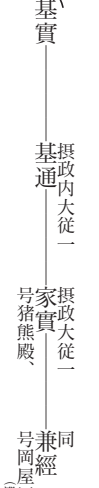

忠通弟
忠頼 陸奥守
猶子
光重 深栖三郎
女子
頼行 頼政弟 蔵人五下 母同
五使
兼綱 左ヱ門尉 為叔父頼政卿子、治承四宇治戰死、
光賢
女子 宜秋門院丹後 哥人
女子 中務大輔経業妻
女子 隆保卿室
女子 二条院讃岐局 哥人隱岐石讃岐是也ィ
散尊 山 同
頼尊 山 阿闍梨
廣綱 従五下 駿河守 太田祖
頼兼 大内守ゴ 蔵人五下
顕綱
兼隆
兼政 群書一覽ニ頼政家集一巻あり、父仲正、また子仲綱・娘讃岐・姪の丹後いつれも名ある哥よミとあり、作者部類に、讃岐は勿論宜秋門院丹後と載せ、散位源頼行女と出たり、日本史比企傳の丹後局善和哥とハ別の丹後なるへし、季安考也、
頼季 本重 七條院判官代
頼有 七條院蔵人 宣陽門判官代 伊豆蔵人
廣直 刑部丞
廣方 掃部助
廣綱 猶子 太田祖 駿河守
隆綱 太田 右ヱ門尉 加世丸
イニナシ
國綱
資国 太田摂津守 法名道清


忠常 上総介 号千葉、〻上総ノ祖、
将恒 秩父 一作常、
武基 建佐州 秩父別當 四依謀反被流、
武綱 十郎 伊与守 頼義合戰之時給先陣、
武常 葛西 一説武綱 三男
常家
康家 豊島三郎
清光 三郎
清重 右ヱ門尉 三郎 壹岐守
女子 千葉介常胤妻 新介胤正母
有重 別當 小山田
重成 三郎 為大河戸太郎被誅、
重政 小沢小二郎 為宇佐美壬被誅、
重清
重宗 六郎
重忠 庄司二郎 母三浦大介 義明女
重保 六郎 於鎌倉被誅、
重季 父被誅時自害、廿三才、
重弘 秩父 父 秩父太郎大夫
重能 畠山 庄司
重綱 下野權守
基家 渋谷 六郎
重家 渋谷 河嶋平三太夫
重国
高重 二郎

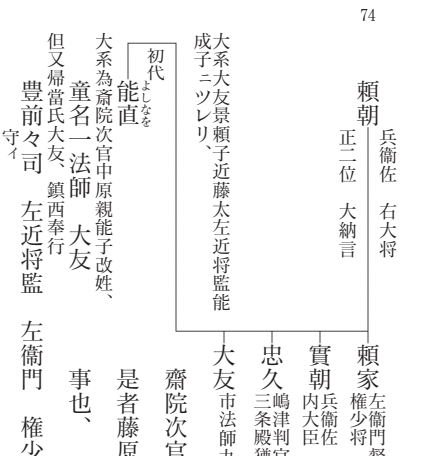
73



鎌倉志、畠山重保石塔ハ由比濱ニアリ、五輪ヲ云、明徳第四癸酉霜月日道友ト切付、後人ノ建タルカ、其石ノ西方ヲ畠山屋敷ト云、重保旧宅ナラン、俗ニ重忠宅ト云ヘトモ、重忠カ屋敷ハ筋替橋ノ西北ニアリ云〻、



74



斎院次官親能為猶子也、是者藤原姓也、能直之事也、

童名一法師　大友
但又帰當氏大友、鎮西奉行
豊前々司　左近将監　左衛門　権少尉　検非違使
従五位上　法名能連　掃部頭親能為猶子、母者大友四郎大夫経家娘也、承安二年壬辰御誕生、建久六年乙卯六月十一日下着、貞應二年癸未霜月廿七日、御年五十二而大野藤北逝去、

二代　親秀　利根次郎　大炊助　出雲路殿　号寂秀、寶治二年十月廿四日死去、母者高山四郎入道女也、

三代　頼泰　童名藥師丸　大炊助　式部大夫　初號丹後守、号泰直、
大系鎮西奉行
出羽守　法名道忍　母者三浦肥前々司家連女也、

※
右、垂水島津玄番(蕃カ)忠直家臣内之倉利兵衛蔵大友氏古系圖、肇自貞純親王迄于廿二代左兵衛督義統古本ノ寫、

但死去年月ハ初代・二代ノ分ニ見ヘ、餘ハ廿代義鑑ニ、四十九ニテ二月十二日親子五人同横死也、同庚戌トアル耳、他ハナシ、

※（行間）

「日本史大友・少貳傳、大友貞宗豊後人也、五世祖能直、其母大友氏侍源頼朝得寵有身、出嫁藤原親能生能直、能直因冒母姓大友氏、及長為左近衛将監、従頼朝討藤原国衡有功、又従獵富士野、會曾我祐成・弟時復（致脱カ）父讎、營中大擾、頼朝欲親出拒、能直曳袂争而止之、頼朝嘉其忠誠、恩眷加渥、尋授豊前・豊後守護、又任左ヱ門権少尉兼検非違使、子孫襲其守護、世雄西士云々」

75の1

- 魚名二男鷲取曽孫 中納言 山蔭 従三
  - 作者 前丹後守 藤頼景 秋田城介義景子
  - 道洪 城介藤泰盛子 千八遺一玉一 遺一方三玉一才三今二
  - 有頼 但馬守
    - 玄孫 遠江守 相任
      - 三男 秋田城介祖 上野介 相継 従四下 備前守
    - 玄孫 城介 盛長 安達六郎 小野田藤九郎 母備前守平忠盛妹也、

鎌倉実記、永暦元年頼朝卿流時盛長二十六隨仕、子景盛初正治二年四月廿六日卒、六十六、為門脇養子、据準后記、

- イ盛景 景盛 従五下 出羽権介 秋田城介
  - 母門脇少将女丹後内侍、見武家系圖元禄十三年板、建保六二月六日任出羽介、同七年正月廿七日出家、法名大運、宝治二年五月十八日於高野（ママ）
  - 義景 城介 従五上 評定衆 建長五年六月三日卒、四十四、
    - 母武蔵豊前守頼任女、イ佐
    - 女子 号松下禅尼、本イ時氏室 經時・々頼等母、
- 評定衆 大曽根 時長 次郎兵衛 法名能蓮
  - 母同景盛、
  - 女子 蒲参河守範頼室
  - 母（ママ）
- 曽孫 泰盛 城介 陸奥守 正五下
  - 応ニ正嘉二年正月十七日甘縄宅火、弘安七年四月四日出家、同八年十一月十七日被誅、義景女北条時宗室ニテ貞時母也、弘安七年寡居為尼鎌倉ノ東慶寺開山志道和尚也、

清和天皇十人

範頼
- 三川守　従五下　号蒲生冠者、
- 母遠江守池田宿遊女　文治二於伊豆北条依舎兄源二位命被討了、（国ィ）
- 範圓　吉見中納言　順天寺阿闍梨
  - 母藤原（イナシ）藤九郎盛長女
  - 源昭　範暁ィ　慈光寺　順天寺等別當　二位僧都

建治二年八月廿七日、久時補伊作庄日置庄地頭職、廿八日、城介泰盛為我拜命以書報之、十二月十日、報公書賀之、（政所下文）

鎌倉実記三

頼朝蛭児嶋御舘事

頼朝の配所蛭児嶋云々、およそ海道十五ヶ國高名の家多けれとも、誰か佐殿の郎従ならざる、下野國住人安達藤九郎盛長ハ口藤のわかれにてハ所領も多く、母ハ備前守忠盛の女なれは、入道相國の為にハ従弟なり、又盛長かおさなき子を門脇殿の養子とせられけれは、平家にハふかき縁躰なりしかとも、（鎌倉殿の御代となりて秋田城介景盛とハ是也、）

先祖たりし者の八幡殿への契約をわすれす、頼朝左遷のはしめ盛長二十六歳より丁僕のことくにつきそひまいらせ云々、

安達藤九郎盛長者、太政大臣房前五男正正（ホノマ）二位魚名五代後胤山蔭中納言子従五位下上野拯相国、其子出羽介国重、其子小野田三郎兼廣子也、母備前守忠盛妹也、右大将頼朝卿配流時生年二十六、隨在忠義勲功竟ニ顕鎌倉吉書始也、六十六歳卒、子息景盛初為門脇養子、事頼朝自出羽権守移秋田城介、鎌倉評定衆頭也、（右依准后記、）

准后親房記トモアリ、

鎌倉実記四

頼朝八牧目代兼隆を討事

其比都に散位康信といふ者あり、康信か母ハ頼朝の乳母なりけれは、頼朝に志ふかく、月に三たひつゝひそかに人を下して洛中の子細を告しらせ申されけるか、治承四年六月、康信か使來りて、今度高倉宮御謀叛につき、令旨を給ハる諸國の源氏悉く追罰あるへき朝議

一定せしよし告まいらせけれハ、頼朝さこそあらん、今ハやミかたき時こそ來れ、猶豫あるへからすと、藤九郎盛長を以て累代の家人を催し、時政をはしめ狩野・宇佐美・土肥・佐々木・岡崎・千葉・三浦の輩一人ツヽ、閑所にめされ、御密談あり云々、

79 印本日本史

範頼ノ傳、二子範圓・源昭共為僧、範圓娶安達盛長女生為頼、為頼依外家傳其領邑、居武蔵吉見、稱吉見二郎、子義春稱太郎、永仁四年三月、謀起兵為北條貞時所殺、子義世稱孫太郎尊卑分脉、亦以十一月見殺、　保暦間記○本書以義世為範頼玄孫頼氏子、然據尊卑分脉及吉見系圖、頼氏範頼曾孫而義春弟也、故不取、按将軍執權次第、以義世之死為永仁五年五月、

子尊頼仕吉野行宮為中務大輔、尊卑分脉、

義経　壇浦之戦建禮門院在義經舟、頼朝疑与之姦、初頼朝以河越重頼女配義經、而義經又納平時忠女、　三年二月、与妻河越氏及従士為修驗者、經北陸道至陸奥、又依秀衡云々、

80 保暦間記下

義世謀反事

永仁四年十一月廿、吉見孫太郎義世三河守範頼四代孫吉見三郎頼氏男、謀叛ノキコヘ有テ召取、良基僧正同意之間遠流セラル、義世ハ（ママ）龍ノ口ニテ首ヲ刎ラレ畢ヌ、

81 重忠列傳

文治三年、伊勢神人（ママ）ニて、頼朝命復其本領、但奪伊勢沼田御厨賜吉見頼綱、

能員傳

頼朝遇禅尼最渥、屢至其家讌飲、東鑑、命以盛長女嫁範頼、重頼女配義經、祐清妻再醮平賀義信、吉見家譜、

三浦泰村謝曰、宗族甄列官爵兼数国守護、領荘園數萬町、

相良三郎長頼、建久九年下向玖广、生六男一女、季曰
頼村、号上村七郎、

82 東鑑

養和二年壬寅五月廿七日為壽永元年、

三月大

九日己卯、　御臺所御著帯也、千葉介常胤之妻依殊仰、
以孫子小太郎胤政為使献御帯、武衛奉令結之給、丹後
局候陪膳、

八月

十二日庚戌霽、　酉剋御臺所男子御平産云々、戌剋河
越太郎重頼妻比企尼女依召参入、候御乳付、
十八日丙辰、　七夜之儀千葉介常胤沙汰之云々、以胤
正母秩父大夫重弘女為御前倍膳云々、

83 壽永

三年四月五日

國富庄日向　十所之一也、

以上八條院御領

麻生云々、
右庄園拾陸箇所、注文如此、任本所之沙汰、彼家如元
為為(衍カ)有知行、勤(勅)状如件、

壽永三年四月六日

84

元暦二年七月小　廿二日壬寅、日向國住人富山二郎大
夫義良以下鎮西輩之可為御家人分者、他人不可令煩之
旨、今日所被成遣數通御下文也云々、
文治元年乙巳九月小　一日辛巳、廷尉公勅使(朝為脱カ)参營中、
二品對面云々、彼宿所比企四郎東御門宅云々、
建長二年庚戌三月小
一日丁卯、　造閑院殿雑掌事、為被進覧京都、云本役
人、云始被付分、今日悉被注緝之、深澤山城前司俊平、
中山城前司盛時等為奉行云々、
其目録様

後日被注入分

霜臺東　　備後前司
掃部寮戸屋　　綱島左衛門入道
閑院殿造營雑掌

紫宸殿　相模守
清涼殿　甲斐前司
仁壽殿　修理權大夫跡
廿ケ条略
北弘御所　嶋津豊後前司跡
同西屋　周防前司入道

85

鎌倉萬年山正續院圓覚寺所安奉佛牙舍利、即實朝将軍遣使宋国所乞求也、自其所産舍利子数十粒累々如貫珠、東武増上寺五十六世大僧正教譽乞其産子三粒於圓覺寺、供養于銀多宝塔、迨文政元年戊寅八月、齊興公訪寺閑談僧正、感　公信心分献二粒、藥王寺一雲快忍記事、建保五年五月、實朝遣葛山願成・雪下良眞等十二人齎金銀貨財材木、渡宋国假仏　舍利而帰京師、　順徳帝聞召鳳闕供養于内道場不授之、使者空皈鎌倉、　實朝大怒、自身上京欲瞻礼、藤九郎強請使者、遂反命安置勝長壽院、後移大慈寺、

86

重忠列傳

頼朝論功行賞三浦義村等賞賜頗厚、賜重忠葛岡郡、

下河辺行平傳

文治中、河越重頼座源義經事、政義為重頼婿、以故収以義經姻属故、収河越食邑、見文治元年、食邑、

頼朝傳

八田知家云々、称四郎本書曰、知家本源義朝子、為宗綱養子、未称八田局、平治之乱知家匿宗綱養為子、然保元物語有下野人八田四郎、則先是知家既在下野可知、而宗綱女嫁小山政光為頼朝乳母、疑系圖由是致誤、故今不取、

首藤経俊云々、助道生親清、丶丶生義通、號山内云々、
經俊稱瀧口三郎云々、經俊母頼朝乳母也、

壽永元年安德紀

五月十九日戊子、以延暦寺僧永雲・顕眞送以仁王子及源仲綱子於源義仲所、流永雲於薩广、顕眞於土佐、源平盛衰記、

養和元年辛丑五月六日辛巳、吉野僧徒蜂起、有稱以仁王子者、法皇敕奈良僧徒索捕之、玉海、

文治元年十一月、又請為總地頭、（保厂間記、）法皇心難之、公卿皆憚違頼朝意、遂聽之、（平家物語・保暦間記、）頼朝既為總地頭、諸国地頭皆以家臣為之、（参取承久記・増鏡、）國司之権移於守護、領家皆喪其地、而朝廷愈衰矣、（神皇正統記、参取保暦間記、）

建久元年、　初朝廷往々遣追捕使於（マ、）諸追捕使於諸国、（マ、マ、）糺察姦盗、（朝野群載、）頼朝亦嘗以家臣為總追捕、按檢近畿諸国、（東鑑、）至是請為天下總追捕使、廷議許之、（係是年据増鏡・保暦間記、）。（平家物語為文治元年事、恐誤、）

元久元年、實朝娶婦、重忠長子重保與北条政範等往京師迎之、重保候平賀朝雅、重忠・朝雅俱時政女婿、而重忠妻其前妻子也、重保与朝雅飲而忿争、座客和解而止、朝雅猶蓄餘怒、悪重保父子於妻母牧氏、牧氏銜之云々、

建久六年七月還鎌倉、武蔵地頭平賀義信有治績、下書褒美、

安達盛長稱藤九郎云々、正治二年死、子景盛・時長云々、初景盛女適北條時氏、生経時・時頼、及時頼執政最見尊礼、

泰盛称九郎、及父死襲秋田城介、為評定衆、（関東評定傳、）以善騎名於世、（徒然草、）弘安中兼陸奥守、請解秋田城介、以子宗景代聽之、尋祝髪改名覺眞、泰盛素與北條氏連姻、女又適時宗生定時、（貞カ）及貞時執権、恃勢肆横、貞時宰左衛門尉平頼綱亦驕縦、頗弄威福、與泰盛相軋、而宗景狂躁奢侈甚於父、自謂曽祖景盛實頼朝之子也、遂改姓源氏、頼綱因説貞時曰、宗景私懐覬覦之心、改姓一事最不可掩、貞時信之、遂殺泰盛父子、滅其後（族カ）云々、

87 保暦間記下

弘安比ハ藤原泰盛權政ノ仁ニテ、陸奥守ニ成テ雙ナシ、其故ハ相模守時宗ノ舅ナリケレハ也、然ル處ニ、弘安七年四月四日、時宗三十四歳ニテ出家、（法名道杲、号宝光寺、）同日西ノ時ニ死去ス、嫡子貞時（于時左馬権頭、）生年十四歳ニテ、同七月七日彼跡ヲツイテ将軍ノ執権ス、泰盛彼外祖ノ義ナレハ弥ヲコリケリ、其比貞時カ内官領平左衛門尉頼

綱不知先祖、法名杲圓、ト申者アリ、又權政ノ者ニテ有ケル上ニ、驕ヲタクマシクスル事泰盛ニモ劣ラス、同八年四月十八日、貞時相模守ニ任ス、爰ニ泰盛・頼綱中アシクシテ互ニ失ハントス、共ニ種々ノ讒言ヲ成程ニ、泰盛カ嫡男秋田城介宗景ト申ケルカ、驕ノ極ニヤ、曽祖父景盛入道ハ右大将頼朝ノ子也ケルナレバトテ、俄ニ源氏ニ成ケル、其時頼綱入道折ヲ得テ、宗景カ謀叛ヲ起テ将軍ニ成ント企テ源氏ニ成由訴フ、誠ニ左様ノ氣モアリケルニヤ、終ニ泰盛法師法名覚真・息宗景弘安八年十一月十七日ニ誅セラレタリ、兄弟一族ノ外、刑部卿相範・三浦對馬守・隱岐入道・伴野出羽守等志アルサルベキ侍共、彼方人トシ亡ニケリ、是ヲ霜月騒動ト申ケリ、

88

吾妻鑑　二十七

寶治二年戊申

五月小

十八日　乙丑、　秋田城介入道号高野入道、法名覺地、卒、于時在高野、従五位下行出羽権介藤原朝臣景盛法名覚地、号大蓮房、藤九郎盛長男、母丹後内侍、建永二年月日任右衛門尉、建保六年三月六日任出羽權介、可秋田城介城務由宣下、同四月九日叙爵、同七年正月廿七日出家、

89

御恩御下文◎〈一通令進之候、此月廿七日、将軍家政所下文ニテ薩広国伊作庄・日置庄地頭職ナリ、御拝領之条、悦存候、恐〻謹言、

丹後局安貞元卒シテヨリ四十九年目ナリ、〈景盛ノ孫也、

建治二年丙八月廿八日　秋田城介泰盛判

景盛ノ母ハ丹後内侍ト東鑑ニアレハ、景盛ハ忠久公異父ノ御弟ナラン、

謹上大隅修理亮殿久時

（本文書ハ「旧記雑録前編一」七七五号文書ト同一文書ナルベシ）

忠久公――忠時公――久時公

『異父兄弟　同イトコ　同再従兄弟』

景盛――義景――泰盛

（本文書中ノ〈及ビ弓線ハ朱書ナリ）

90

伊作庄并日置庄御拝領之条、御面目之至、悦存候、故如此仰給◎〈候之条、尤本意候、恐〻謹言、

建治二年
十二月十日
謹上大隅修理亮殿
御返事

『張紙』
弘安八乙酉十一月十七日、
秋田城介入道泰盛被誅了、
秋田城介判

（本文書ハ「旧記雑録前編一」七七六号文書ト同一文書ナルベシ）

建治二年ヨリ延徳二年忠廉ノ上洛ハ二百十五年ナリ、

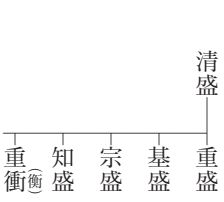
91 廿三箱壱

くわんとうちんせひの御けうそうの正文ともなり、（◎ら）
正中二四十一
くわんとうちんせいの御けうそらのもくろく
一つう　さかミのかうのとのゝ御けうその正文　いさくの事、　嘉元三二六廿
一つう　御申しやうのあんもん
一つう　さいせうおんしとのへしんもつまいらせらるゝ時の御返事の正もん
一つう　ちんせいかつさの入道殿御けうその正もん正安二十一廿
六

くわんとう御けうそのあんもんあり、ふこのくにのけんたんうへの御つかいの事、
一つう　しやうのすけとのゝ状の▽◎正もん△御くたしふミ申なさるゝよしの事、
一つう　同人のしやうの正もん、いさく・へき御給のよろこひ申さるゝ状なり、
一つう　大殿御すけ御めんのくわんとう御けうその正文
元亨三五十
一つう　ちんせいむさしのすりのすけ殿御しきやうの正文
一つう　御申しやうのあん
御をん御所まうの事、

（本文書ハ「旧記雑録前編一」一四三四号文書ト同一文書ナルベシ）

92の1 新板大系圖　平氏廿三



92の2

仝　藤氏　十

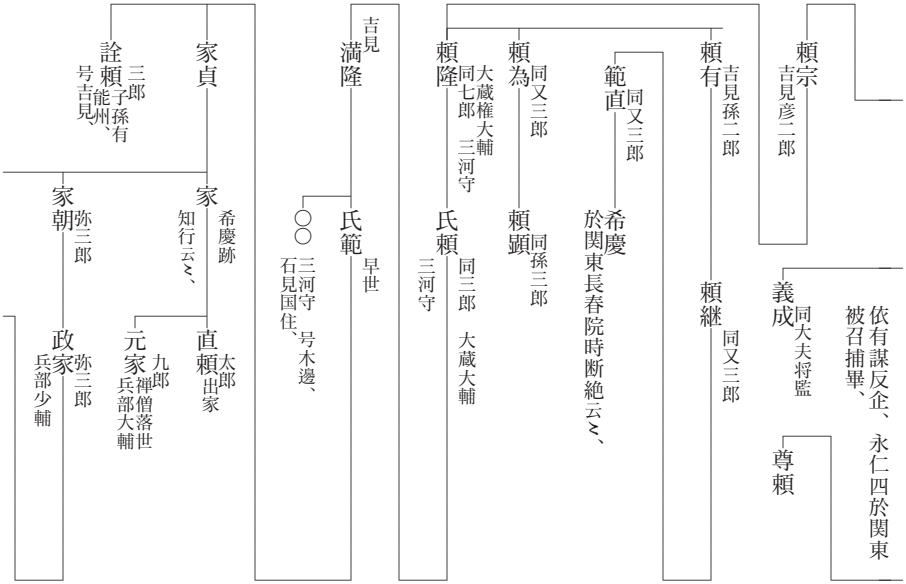
- 維俊
- 知度
- 清房
- 清貞
- 女子
- 女子　高倉院后中宮徳子　国母　安徳天皇母后　建礼門院
- 女子　準三后　高倉院準母　準国母　従三盛子　六條摂政北政所　号白川殿、　イ基實公室
- 女子　大納言隆房卿室　イ冷泉
- 女子　準三后　従三位　子　普賢寺関白北政所　イ近衛基通公室
- 女子修理大夫信隆卿室
- 女子後白河院女房　イ早世　イ更衣
- 女子
- 女子

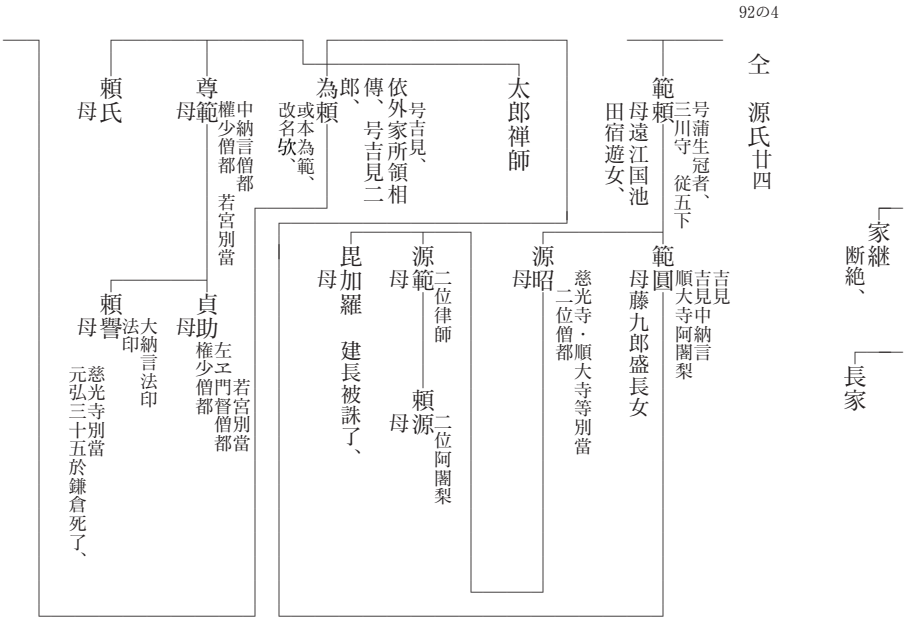
92の3

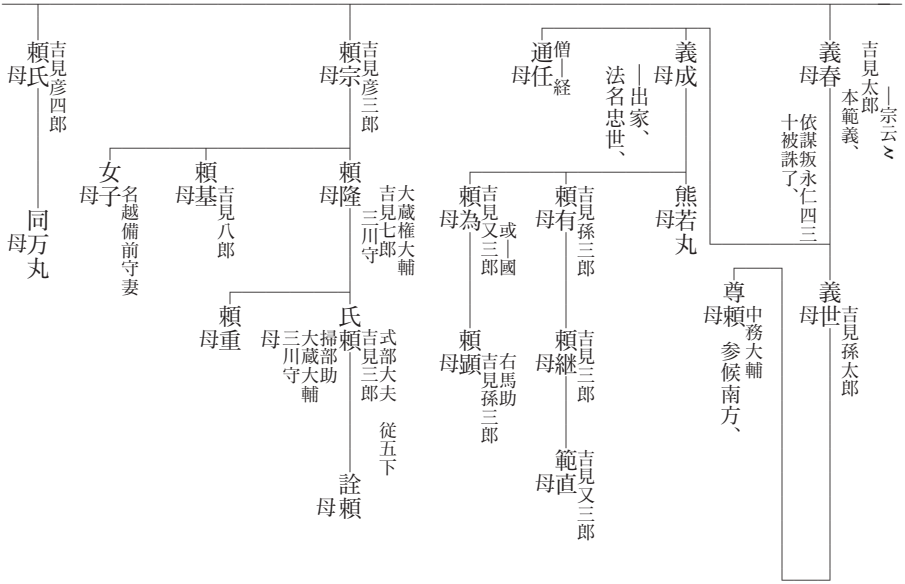
新板大系圖　源氏廿二

- 義平
- 朝長
- 頼朝
- 義圓
- 希義　号蒲生御曹子、
- 範頼　従五下　三河守　母池田宿遊女、文治二依頼朝卿命被誅畢、
  - 範暁
  - 範圓　号吉見中納言、順大寺阿闍梨
    - 為頼　吉見三郎
- 以下略、
  - 義春　同太郎
    - 義世　同孫太郎

- 安達城介小野田　盛長　六郎藤四郎　正治二四廿六卒、六十六、
  - 大曽祢時長　次郎兵衛　母同景盛、法名能蓮
    - 女子　蒲三川守範頼室
  - 景盛　秋田城介評定衆　従五上　母門脇少将女、為門脇養子、据準后記、建保七正廿七出家大蓮、宝治二五十八於高野山入、（滅脱カ）
    - 義景　承元四年庚午生、母武蔵守頼任女、建長五六三卒、四十四、
    - 女子　経時母　号松本禪定、


頼宗
吉見彦二郎
依有謀反企、永仁四於関東被召捕畢、
義成
同大夫将監
尊頼
頼有
吉見孫二郎
頼継
同又三郎
範直
同又三郎
希慶
於関東長春院時断絶云々、
頼為
同又三郎
頼顕
同孫三郎
頼隆
大蔵権大輔
同七郎
三河守
氏頼
同三郎
大蔵大輔
三河守
吉見
満隆
氏範
早世
○○
三河守
号木邊、
石見国住、
詮頼
三郎
子孫有
能州、
号吉見、
家貞
家
希慶跡
知行云々、
直頼
太郎
出家
元家
九郎
禅僧落世
兵部大輔
家朝
弥三郎
政家
弥三郎
兵部少輔


92の4
仝
源氏廿四
家継
断絶、
長家
範頼
号蒲生冠者、
三川守
従五下
母遠江国池田宿遊女、
範圓
吉見
吉見中納言
順大寺阿闍梨
母藤九郎盛長女
源昭
母
慈光寺・順大寺等別當
二位僧都
源範
二位律師
母
頼源
二位阿闍梨
母
毘加羅
建長被誅了、
母
太郎禅師
依外家所領相傳、号吉見二郎、
為頼
号吉見、
或本為範、
改名欤、
尊範
中納言僧都
権少僧都
若宮別當
母
貞助
若宮別當
左ヱ門督僧都
権少僧都
母
頼譽
大納言法印
法印
母
慈光寺別當
元弘三十五於鎌倉死了、
頼氏
母


吉見太郎—宗云〻
本範義、
義春
母
依謀叛永仁四三
十被誅了、
義成
母
—出家、
法名忠世、
僧—経
通任
母
熊若丸
母
義世
母
吉見孫太郎
尊頼
母
中務大輔
参候南方、
吉見彦三郎
頼宗
母
吉見彦四郎
頼氏
母
同万丸
母
大蔵権大輔
吉見七郎
三川守
頼隆
母
吉見八郎
頼基
母
名越備前守妻
女子
母
吉見孫三郎
頼有
母
吉見又三郎
頼為
母
或—國
吉見三郎
頼継
母
吉見又三郎
範直
母
右馬助
吉見孫三郎
頼顕
母
式部大夫
吉見三郎
氏頼
母
掃部助
大蔵大輔
三川守
頼重
母
従五下
詮頼
母
二位律師
頼源
母
吉見彦五郎
頼房
母
山
中納言律師
頼憲
母
二位律師
圓忠
母
慈光寺別當
大納言阿闍梨
頼澄
母
吉見九郎
頼業
母
出家
法名頼圓
越前守
吉見孫九郎
頼直
母
吉見十郎
頼茂

（表紙）

備忘抄　中

備忘録抄中

93

在豊州忠朝傳

案文在都城野辺摠右ヱ門

雖未申通候、連〻御床敷存候、殊御親父様於京都吴于修理亮忠廉、延徳二年卒於摂州天王寺、他申承候之間、不相替得御意度心中候之条、乍次令啓候、遼遠事候共、自然相應之儀蒙仰可致馳走候、於向大永三ヨリ十年後ナリ、三河守頼興享禄五天文元年四月十二日卒、後者無指題目候共、細〻可申承候事本望候、猶此仁令大蔵大輔隆頼申候之条、省略候、恐〻謹言、丹後内侍ノ外孫源昭ヨリ十四代目三河守頼興コトナラン、其子ノ隆頼コト大蔵少輔トアリ、裏付

延徳二年ヨリ三十四年目

大永三年

二月廿六日　頼興、吉見大蔵大輔

忠久公ヨリ十一代目　忠朝

嶋津豊後守殿

参御宿所

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九七六号文書ト同一文書ナルベシ）

94

仝

将又雖左道之儀、打曇百枚・毛錐子卅對令進入候、表祝言計候、

如仰愚父上洛之砌、甚深得御意候由承及候、連〻御床敷令存候處、御珎書之旨拜見、怡悦誠不淺候、并打曇百枚・毛錐子卅對贈給候、賞翫之至候、殊於向後者、(ヌ増)其方相當儀可得御扶助之由蒙仰候、令祝着候、至此堺亦琉球邊御用等示給候者、可致奔走候哉、心緒幸福大(ヌ太)夫申含候之条、閣筆候、恐惶謹言、

大永三年

七月廿一日　忠朝

吉見大蔵太輔殿

御返報

（本文書ハ「旧記雑録前編一」一九八一号文書ト同一文書ナルベシ）

95

在川越民部左衛門

口略

能隆　葛貫別當

重頼　河越太郎

治承六年八月十二日庚戌酉刻、頼朝公御臺所男子御平産、重頼妻比企尼女依召参入、候御乳付、

重房　小太郎

重時　小山田掃部介

重員

96

二条家三代

俊忠　権中納言　本名親家

保安四年七月九日薨、五十二、

97

摂政兼家一男関白道隆三男中納言隆家二男大納言経輔玄孫

忠成　大炊御門治部大輔民部大夫少納言　正五下

光能

女子　高倉以仁妃僧正眞性母　分脈図、作内侍、

俊成

定家

女子　権中納言顕頼室　光頼・惟方・成頼等母

二人

女子　三条宮妻　一本妾　眞性母

忠隆　播广　伊与守　大蔵卿　従三位

久安六年八月四日薨、三十九、

信頼　四男　権中納言　正三位

母民部卿顕頼卿女

女子　六条摂政基實公室ィ北政所　猶子

母同信頼、摂政基通公母

98

為隆　参議　左大弁

光房　甘露寺　権中納言

五世　正三位

隆長

九世

輝長　改堤、右ヱ門權佐　弟　従四下

時長　兄

五世規長　中納言

顕隆　正三位　権中納言

母美濃守源頼国女

大治四年正月十五日薨、五十八、号葉室中納言、

葉室祖

女子
玉貌院夫人

三世代長　権中納言　従二位

榮長

頼熙　為葉室氏養子、

女子　延享四年二月四日誕、元斧姫君改幾姫、又号千万姫、元淨岸院殿ニ候ス、後松平薩摩守引取、

顕頼　正三　民部卿　前権中納言
母美濃守久安五年正月薨、五十三、号九条民部卿、

光頼　検非違使別当　左ヱ門督　前権大納言　大弁
母中納言参議俊忠女

顕惠
東大別　法印

雅宝

女子　民部卿季成卿室　左ヱ門督公光母

女子　兵部大輔　贈左大臣時信妻　建春門院母

女子　従三位忠隆室　左ヱ門督信頼等母

二十三世

頼要　葉室大納言

頼熙　春光夫人舎兄

顕能　正四下　備前・讃岐・越前等守　勘ケ由次官　右ヱ門権佐
母同顕頼、保延五年七月三日卒、三十三、

99

忠通

近衛殿　正二　摂政　関白　太政大臣
○基実
母中納言源国信女

女子　二条院后　中宮　皇后宮　應保元年十二月十七日入内、廿七日為女御、同二年二月廿九日為中宮、承安二年　月十二日為皇后宮、同三年八月廿五日崩、二十七、廿八トモ、母上総介顕俊女、実父実能公云々、

基通　従一　摂政　関白
母従三位忠隆女

顕任　大膳亮　七歳卒、
母大納言源師頼女

頼佐　民部大夫　改説方、
母左大臣実能女

顕眞　三會講師　権僧正　天台座主　顕蜜兼学
母参議為隆女

100

閑院
公實　従二位　権大納言

徳大寺
實能　従一位　左大臣
母但馬守隆方女　諱光子、為堀川・鳥羽両帝乳母、保安二年四月十六日薨、年六十二、

101

吉井友利萬扣書写

- 女子　皇后育子、六條院母后（マヽ）、無子、及六条帝生取育之、
  関白忠通養為子、
- 五男 季成　童殿上　民部卿　権大納言　正二位
  大納言時兼加賀守之時世号加賀大納言、
  母右京大夫通家女
  永萬元年二月一日薨、年六十四、
- 公光　中納言　正二位　左ヱ門督　検非違使別當
  母民部顕頼女
- 公長
- 女子　従三位成子　後白河院妾　高倉宮母
  曰高倉三位局、
  生守覚法親王・以仁王・殷富門院・式子内親王・好子内親王・休子内親王、
- 女子　散位信成　従五位下母　民部大輔在良女　生女為殷富門院大輔　高倉王妾　生道尊、
- 覚　天台座主　法務　僧正
- 仁實　母従二位光子
- 国母 女子　中宮璋子　崇徳・後白河両院母后　曰待賢門院、
  久安元年八月崩于三条高倉殿、年四十五、
  母但馬守隆方女光子　一本作隆光女、

一御官位被仰出候儀者林大学頭殿（江）茂御問付有之由候、
去戌年　御下向前芝御屋敷（江）大學頭殿御見廻之節、
忠久様ハ頼朝卿之御子（与）申儀證據有之候哉と石野八兵
衛（雅植）殿御同座ニ而御尋候付而、為兵衛罷出、御文書写等
ニ引合段〻申達候得者、右之申分書付候而有之候哉と
被仰候ニ付、申披キためと申候而、書付置候ハ無御座
候由申候得者、書付候而被召置候方可然存候、書候而
被遣候ハヽ、此方より（茂）内證存寄可申候由被仰候ニ付、
於國元書せ候て可被遣由　太守様より御挨拶御座候、
依之右草案御記録所ニ而調被仰付、　御前へ被差上置
候得共、いまた大学頭殿御方不被遣候、然者證據有之
候哉との御不審ニ、口達ニ而者何角申候得共、書付（与）
被仰候にこまり候而延引之様ニ被為思儀（茂）可有御座候、
就夫ハ出羽守様御方（江）被差出候御由緒之書付ニ頼朝卿
之血筋（与）書申候所ニ付、不審之様被為申儀（茂）候へハ如
何敷候条、御國元ニ而相調候書付之趣大學頭殿（江）被遣
度奉存由、孫左衛門殿迄為兵衛より申入、被達　貴聞
候処、御国元（江）被仰付候草案御見出し不被成候間、太
抵覚候由筋目を以伊（為カ）兵衛草案相調候様ニと被仰付候ニ

付、御國元ニ而被相調候太概、丹後御局頼朝卿ニ幸して懐胎、住吉ニ而御誕生之事、誕生石之事、八歳ニ而三ケ国を御拜領之事、東鑑脱漏ニ　忠久公御卒去之事見得候義共書記候而、孫左衞門殿より被備御覽候処、右之草案八兵衞殿入御内見候様ニと御意候ニ付、八兵衞殿へ孫左衞門殿御出、為兵衞茂被召列致参上候而、草案懸御目候処、　公義江差出候書付ハ此様ニ調候而埒明申儀ニ無之、此筋を以御推量候様ニなとゝ申筋ニ而ハ　公義ニ而極り申儀ニ無之候、大抵疑敷儀ニ而も、此方より極而此通と書出候得者夫ニて納り申儀ニ候、丹後局頼朝卿幸して懐胎なとゝ書候様成儀、何共　公義ニ而ハ不極事不審ニ罷成候間、丹後局ハ頼朝卿之密妾也、懐胎すと書候而可然候、左候而、證書ニ可罷成御下文等を此證據ニハ是与申様ニ引合せ写入候而可然候、惣而是ハ證據ニ茂可罷成と存候儀者、其為之大学頭江内談ニ候間、不残置書入候而可遣候、大學頭見届被申、是ハ除候様ニと被存候儀者可被致差圖候間、其心得可仕候、忠久ハ頼朝卿之御子と申儀、御系圖并御家傳ハ其通可有之候得共、東鑑并其時代之書籍ニ茂不相見得、二條家ニ有之候系圖・傳書ニも不見得、日本通鑑ニ茂見得不申候へハ、御家ニ有之候傳記迄ニ而者さき〳〵猶以疑出申儀ニ候条、此節段〻之儀不残置書付被遣、大学頭存寄を茂申、草案埒明候て軸物ニ書調、二巻ニ被成被遣候ハヽ、一巻ハ頼朝卿之御子と申儀落着仕候由大学頭致奥書遣之、今一巻ハ御蔵江納置候様仕せ可申之旨被仰候付、畏候(衍カ)候由申候而罷帰候得共、段〻之儀為兵衞壱人之見立ニ而書候儀ハ無切(功カ)ニ有之、往〻之證書ニ候得者旁難仕之由、孫左衞門殿江茂申入、被達　貴聞候処、八兵衞殿江御城ニ而御逢被遊候而、委細八兵衞殿存寄被聞召、尤之儀ニ候故、御書せ被成可被遣由御約束被成候、外より證據を求候儀ニ無之、御系圖御文書ニ有之候儀を以書申事ニ候間、為兵衞見立次第下書相調備御覽候様ニと　御意候旨孫左衞門殿被仰候付而、此上者奉畏候由申上、御文書写等申下ケ候而相調候草案左ニ記之、

102 本田信次郎文書

一三ケ國御下向之時者、大将依御意御臺様之兄右衞門尉

貞親御當家被副申候、然者御下三年以前先ニ罷下、山門院ヲ打明罷上、御供申候て下着候、

103 同次郎左ヱ門系圖

貞親
二郎　左ヱ門督

奉　頼朝卿命、為　忠久主後見先下薩州、令属三州治内、翌年帰于鎌、

104 一畠山庄司次郎重忠ニ本田二郎親重イモウトニサイアイ候忠久ヲ頼朝より重忠ヤウシ申候て取立申候へと被仰候程ニ、重忠ノ忠ヲマイラシテムコニ取被申候、さるにより候て、本田次郎親重ハ忠久御下ナキ前ニ三ケ國両度下候けるよし古人被申候、忠久ヲ重忠ノ養子申候〻〻ムコニ取申候欤、

105 貳番箱　壱竿

御寶鑑壱帖　御文書條目左ニ記之、

頼朝公御袖判

○一元暦二年六月十五日伊勢國波出御厨御拜領之御下文　壱通
譜載第一

○同第二
一同年月日伊勢國須賀御庄御拜領之御下文　壱通

○同第三
一同年八月十七日嶋津御庄下司職庄務之御下文日向・大隅・
近衛殿十一月十八日下文写在二三之巻、

薩摩三ケ國惣名也与古張札有之、　壱通

○同第五
一文治二年正月八日信濃國塩田庄御拜領之御下文　壱通

○頼朝公御袖判　第六
一文治二年四月三日嶋津御庄地頭職拜任之御下文　壱通

○同第七
一同年八月三日御下文嶋津御庄官等之事、　壱通

○同第八　イ未三月重澄寄進四月十五日基通政所下文
一同三年五月三日大秦元光之事、　壱通

○同第九
一同年九月九日嶋津御庄押領使拜任之御下文　壱通

一四年戊申十月立（券カ）巻状

○同第十
一同五年二月九日御下文　三月十四日給土持冠者、四月十三日土持与八代氏　壱通

第十二
十月二日寫

○第十三
十一月日北山氏

十三ノ下十一月廿四日盛時奉

105の1

第十一
一七月十日奉書北条時政判、年号無シ、文治五年欠、　壱通

張紙φ写在市來衆北山調左衛門　※1
在御判
北郷弥太郎兼秀訴うる弁済〈使〉職事、▽(正)これ△にハ子細を不知召間、解状をつかハすところ也、
文治五十月三日　盛時奉
宗兵衛尉殿
（本文書ハ「旧記雑録前編一」一四五号文書ノ抄ナルベシ）

※1（行間）

105の2

「張紙
第十五
二三巻
薩摩國救仁院平　摺切
五月九日
宗兵衛尉殿　」

○一建久二年十二月十一日写二三

第十七
○一同三年十月廿二日写二三
〈六月日薩図田帳一冊

第十九
○一建久八年十二月三日政所御下文　壱通
同廿四日内裏大番

第二十　二月廿二日　遠江守
九月　久米次郎

『一承元二年九月基通政所御下文』

第廿四
○一建暦三年七月十日嶋津御庄薩摩方御安堵之政所御下文
『建暦三年六月廿七日』基通政所下文
寫在二三之巻、　写(ハリシ)欠、

第廿一
○建仁三年十月十九日臺明寺

第廿三四年正月十八日仝

第廿二
○十一月十日神田橋氏

第廿五
○一五月九日奉書北条義時判　壱通
建暦年間欠、
富山刑部丞云〻
宗兵衛尉殿

〈○五月十四日盛時奉

張紙　在二三巻、古写在嶋津筑後、

第廿八
○一建保六年十月廿七日御下知状写　壱通
山田村本領主云々、　※2

※2（行間）
105の3
「
御判
自近衛殿被仰下嶋津庄官訴申、（田宰）為実府背先例云々、
第十六
五月十四日　盛時奉　」
（本文書ハ「旧記雑録前編一」一一九号文書ノ抄ナルベシ）

第廿六
○三年十月四日内裏大番事
第廿七
○十一月廿一日かな文
第廿八
○一同年十一月廿六日　忠久公御證判薩摩郡内山田村名頭職之事、　壱通
第廿九
○一承久三年五月八日・同年月十三日御下知状寫　壱通
御譜一通五月日あり　大田庄地頭
公給下司於重澄
第三十
○一同年七月十二日御下知状越前國守護職事北条義時判　壱通
第卅一
○一七月十二日假名文北条泰時判承久三年欠、　壱通

第卅三
○七月十五日武蔵守
第卅五
○同三年正月　神田橋文書
第卅四
在四巻
○七月十八日写
第卅六
○一貞應元年十月十二日御下知状越前國守護職事北条義時判　壱通
第卅七
○同二年癸未三月十六日船法
八月基通政所下文
第一在四五　写
忠義公
○五月十九日
第二上　写上四五
○七月十二日
承久三　第二下
追申わかさ
第三
○一承久三年八月廿五日御下知状右同判　壱通
手鏡
仝
第四
○一同年閏十月十五日御下知状北条義時判　壱通
仝
第五
○一貞應二年六月六日御下知状右同判
仝
第六
○一同年八月六日同右同判　壱通

『同八月基通下文』

全 第七
○一同年十二月八日奉書 右同判　　壱通

全 第八
○一同三年九月七日御下知状 北条泰時判　　壱通

第九
○元年七月三日写在五

第十
一嘉禄三年六月十八日　忠久公御正判薩摩國御譲状　　壱通

第十一
○写又壱通神代郷

『同八月十四日基通下文』

頼經公御袖判第十二
一同年十月十日嶋津御庄并越前・信濃御安堵之御下文　　壱通

一 第十三
写又一通　大田庄神代・津乃

一文永六年十月廿三日御下知状 北條相模守・同左京權大夫判　　壱通

一文永八年十二月廿四日御安堵之御下知状右同　　壱通

106

御家東鏡目録以金澤文庫御本書之トアリ、関東執権次第トアル中ニ、

貞顕　嘉暦元年四月十六日出家、

号金澤殿、

107

東鑑考

東鑑一部五十有二巻、自治承四年至文永三年、（元カ）正二年庚申合八十有七年、此中壽永二年癸卯・建久七年丙辰・八年三丁巳・九年戊午六・嘉禄元年己未・二年七丙戌・安貞元年八丁亥・正元元年乙酉無之、此間廣常伏誅、九仁治三年壬寅四十五十建長七乙卯頼朝卒去、政子死去、頼經元服等事蓋脱落、東鑑未詳誰撰、蓋北條家之左右執文筆者記之歟、此中北條殿請文下知書状等皆書平姓、而不書諱、又其廣元・邦通・俊兼等之筆記亦當混雑而在欤、三十四十巻以後者其文多略、且有重複誤出者焉、

禅僧義堂在鎌倉時、町野氏来令義堂見吾妻鏡、此事在空華日工集、（室町記、應安四年辛亥正月廿二日御評定始、）然則吾妻鑑者町野家之所讀習也、御成敗式目亦町野之所傳授云、（硯役問注所町野民部大夫）

吾妻鏡名者指東國云吾妻、日本紀日本紀日本武尊東征（本ノマ、）

時、悲橘姫死而向東曰吾嬬（アツマト）、吾嬬與吾妻相同、又以鏡名書者　我邦有水鏡・大鏡・増鏡等、今此書為関東之鏡戒故號焉、蓋是相似温公之通鑑・范氏之唐鑑・張氏之帝鑑等之名欤、

我邦自神武至光孝有書紀・實録、然宇多・醍醐以後無書記、纔有假名草子及倭歌書、而國家之治乱君臣之興廢不知十之一二、中間雖扶桑略記出、然多渉浮屠氏之妄説、不足觀之、獨東鑑文章雖減古之書記・實録、然其事為有實乎、校之源平盛衰記・平家物語而彼真偽亦可見矣、

黒田筑州刺史令佐谷五郎大夫来就予讀東鑑不日而終合部、及其将歸求予贈言、於是不獲已書其少概以與之、

元和三年秋九月上澣

108 板本東鑑跋抄

夫人之處世也云々、東鑑一書者自治承四年至文永三年八十七載之間傍羅曲探以大抵記之、不知記者名為遺憾、久歴年代其名湮滅耶、深隱山林其名埋没耶、抑又謙退、以不著其名耶、見此書則言行之美悪如指掌也、吾　大将軍源家康公治世之暇翫弄此書云々、今也刻梓以壽其傳云々、

慶長十乙巳春三月　　前　龍山

見鹿苑承兌叟

109 仝

土師氏玄同（播州菅玄同トモアリ、）携其舎弟聊卜来而語余曰、方今世之見東鑑者滔々皆多也、而郡郷村里之号、氏族姓尸之字、官家僧道之目、古今名物之称、方言俗談往々未易讀也、況又其間文字紕繆、書寫脱略乎、見者病之、今聊卜點倭訓于其旁、其或所未安者乃闕疑而竢後之是正、因附剞劂氏新鏤於梓云々、

寛永甲子之春

羅洞散人林道春書

右、寛文元辛丑年極月吉辰

烏丸通下立賣下町　　野田庄右衛門板行

110 東鑑五十二巻

鎌倉代々の日記なり云々、日本武家の記録ハ東鑑を初とす、治承四年以後八十七年の記録也、此書そのかミは上杉家に傳へたり、編者の説ハ羅山文集に見えたり、慶長十年刊行す、南禅寺兌長老の跋あり、寛永元年播州菅玄同弟聊卜和訓をくはへて重刊す、林道春跋あり云々、

111 東鑑脱漏　一巻

東鑑の全本を以て刊本の第四十五巻の闕たるを補ハんか為に別に刊行するところ也、

112 百錬鈔　写本　十七巻

此書の記者いまたつまびらかならす、大治・承安・文暦の比の事ともを記して、第十七巻建長より正元に至る、○奥書に云、嘉元二年正月十五日以大理定房卿本書写校合早、貞顕○毎巻金澤文庫の墨印あり、○金澤文庫の事ハ、金澤越後守平貞顕ハ北條越後守実時か孫、越後守顕時かなり、共に武蔵国金沢に住する故、家号を金沢といへり、文永六年立、稱名寺の中に文庫をつくりて和漢の群書をあつむ、金澤文庫といへる印を押たり、儒書にハ墨印を用ひ、佛書ニハ朱印を用ゆ、その舊跡今に傳はれりといへども、蔵書ハ元弘の兵乱にうせてわつかに存するもの二百餘部といへり、

（法名称名寺正惠正安三年辛丑三月廿八日卒、法名惠日、）（子脱カ）

※1（行間）「尊氏奉弔後醍醐天皇願文蔵在武州金沢称名寺文庫」

※2（行間）「鎌倉志、北条越後守平顕時文庫ヲ建テ、和漢ノ群書ヲ納ム云々、印文ハ楷字ニテ金沢文庫ノ四字ヲ竪ニ書ス、後ニ上杉安房守憲実執事ノ時再興ス、日本一所ノ学校ト為ル、管領源成氏ノ時也云々、顕時・貞顕ノ石塔モ此寺ニアリ」

東鏡関東執権次第

貞顕嘉暦元年四月十六日出家、号金澤殿、

113 東鏡脱漏

元仁二年乙酉四月廿日為嘉禄元年、

正月大　十六丁

同二年丙戌　正月小　十七丁ヨリ　廿六丁迄

同三年丁亥　十二月十日為安貞元年、

正月大　廿七丁ヨリ　四十五終

寛文八戊申歳仲秋

江戸神田鍛冶町

中野孫三郎板行

114

二階堂氏本

御状之趣委細令披覽候、誠今度者不存寄遂参會申承候、本望候、仍度〻光臨、殊主寶（田重）拜受、旁以祝着候、為表御礼先度参申候処、既御下向堺由候間、申置候了、定被傳申候哉、抑御先祖之儀、吾妻鏡以下旧記明鏡之次第、依御所望、写進之候間、得其便献瓦礫候処、金玉送給候、殊勝催其興候、於向後者、以便宜必可申承候、相應之御用更不可有疎略候、恐〻謹言、

季春三日　（花押）

嶋津修理亮入道殿

（本文書ハ「旧記雑録附録一」九〇号文書ト同一文書ナルベシ）

115

薩摩國阿多郡南方地頭鮫嶋孫次郎光宗法師法名蓮覺之（謹申カ）

欲早被停止非分押領、任御下知以下證文、蒙御成敗、被糺返年〻得分物、為同郡北方地頭隱岐三郎左衛門入道〻忍今者死去、跡輩等、令押領南方内田畠在家、以下所〻無謂事、

副進

一通高祖父宗家譲与宗景状　建保六年十一月廿日

一通関東御下知状　貞永元年十一月廿八日

右、當郡者、高祖父鮫嶋四郎宗家建久三年八月廿五日令拜領之後、相分于二、於南方者、譲与宗景蓮覚曽祖父、至北方者、給与家高宗家嫡子早云〻、

116

内藤作右ヱ門本

醍醐天皇第五王子　康平六年

惟宗親王　三品　兵部卿　慶頼王

本名保明親王

丙申始賜惟宗姓、

保頼

重賢

頼房

朝明

教親 施薬院使 字名奥州三郎
孝言 字名奥州四郎
基言 日向守国司
廣言 八文字民部大輔 島津庄住 千載集作者
忠久 嶋津 親父頼朝 御母丹後局
忠康 息男忠綱分国越前若カ岩狭 母チ、部父畠山高（ママ）女重忠姉タリ、
忠秀 御母丹後局

117 都之城相馬藤左衛門

嶋津之継圖

文治元年八月一日ニ忠久七ヶ國給テ所領之御知行定候、是モ重忠ノ依申状也、

忠久十八歳之御時、文治貳年六月一日関東ヲ立、都ニ上洛有テ内裏ニ参籠申シ云々、

本田ハ幡ノ奉行、酒匂ハ沓ノ役、猿渡ハ御劔之役、左近尉ハ幡指ノ役也、鎧之役ハ渡野邊、甲ノ役ハ左曹、剝楯ノ役ハ立山、籠手之役ハ二ノ宮、臑當ノ役蓮香・難波・瀬能・長野・石墓・福崎、何モ此人ニハ西國ノ軍奉ニテ候也、

118 正文在島津筑後忠置

御判

自近衛殿被仰下嶋津庄官訴申、為（旧宰）実府背先例、今年始以押取唐船着岸物事、解状遣之、早停止新儀、如元可令（旧被）付庄家也、遥（適）為被仰下事（旧之）也上、如状者、道理有限事也、仰旨如此、仍〔以〕（旧ナシ）執達如件、

〔十一〕（旧五）月十四日　盛時奉

伊豆藤内殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」一一九号文書ト同一文書ナルベシ）

119 山田聖榮自記

一総州山城守殿馬飼所と而、鹿児嶋和泉崎ニ佐多殿近所江御入、遁世候而法名道聖与申、子息彦三郎殿同居住、夫よりて屋形（し脱カ）も就折節御志し候也、伊集院弾正も當家之一道を山城守殿細ニ御存知之事候程、嗜候事ハ常々参候、聖榮若時者鹿児嶋へ参上仕、御奉公之隙々和泉崎ニ参り、山城守殿へ御意を受御恩を蒙る、如此雑談

ニ付候而茂御物之所を申候也、(語脱カ)

120 抑留軸物　古系圖

清和天皇　人皇五十六代ノ帝

此間略ス、

為義

義賢

十二名略ス、

義仲

義隆

義朝

仲家

義衡

朝長

頼朝

範頼

義経

義仲ハ頼朝ヲ背テ元暦元年二月廿日被誅、義隆ノ御内頼朝ノ娘也、夫ノ義隆ヲ打ル、カ故、壽ヲ捨テ崇ヲ成シ玉イ、七代崇ルヘシト誓願也、故ニ忠久ヲ西国ヘ下シ玉フ事ハ畠山重忠ノ御計コト也、(崇カ)(正カ)

頼家

實朝

忠久

鎌倉若宮八幡ノ別當八月一日ニ御寶殿扉ヲ開カントシ玉ヘハ、日来無リシ虫食有リ云々、文治元年八月一日　忠久七ケ国ヲ給リ御知行有リ、是乃重忠ノ依申状也、

後白河ノ院王忠久大将大臣ト示シ玉フ、豊後守ト号シ、法名ヲ号得佛ト、

忠久十八歳ノ御時文治二年六月一日ニ関東ヲ立玉イテ、京ヘ着セ玉イ　内裏ヘ参内有テ、西国ヘ下向ノ由ヲ奏聞シ玉フ、　君ハ叡覽有テ、一年宇治ノ平等王院ニテ打レタル高倉ノ宮ニ似タリト被仰テ御涙ヲ流シ玉イテ、西国ヘハ下スマシ、丸カ子ニセント宣旨ヲ成シ玉イ、高倉ノ宮ト十八日即位シ玉フ、此由ヲ頼朝聞玉イ、三十一度ノ託言ヲ内裏ニ奏聞申玉ヘハ、　君モ叡聞有テ、西国ヘ下スヘシトノ宣旨ニテ征夷将軍ト示シ玉フ、三十三騎ノ騎馬ヲ打セヨトノ宣旨ヲ蒙リ、西国ヘ下向アリ、本田・酒匂・猿渡・左近尉此ノ人々ハ御劔・幡・武具ノ役也、

中葉略ス、

忠昌　陸奥守　法名源鑑　道号圓室
永正五年戊辰二月十五日自害、治世三十五年、

忠治　又三郎　法名津友　道号蘭窓　母儀大友殿政親ノ息女、
永正十二年八月廿五日死去、治世八年、

忠隆　又六郎　法名龍盛　道号興岳　永正十四年二月十二日
吉田召向テ、同十四日落城早、　此歳宗碩下向、同十六
年四月四日死去、治世五年、

初ハ
忠兼　後
勝久　又八郎　後ニ修理大夫
法名源輝
天文四年十月鹿児島御退出、

益房丸

121
在岩崎文庫廿一号匣

態令啓入候、然者御書物之内ニ書本之東鑑一部有之候、近キ比迄者平田清右衛(純正)門方江御文書為引合被預置候、若返上被申候ハヽ、自徳里村造酒介可被存候間、早〻被仰渡、此方江一刻茂急可被差上候、右者酒井讃岐守様より隠岐様迄被仰遣候ニ付被召寄御事ニ候、多分是者御城之御用ニ而可有之哉与被思召之由候、少も遅参不仕様ニ誰そ輕キ衆(◎宰領)〔をも〕(◎仰)被召付、▽◎其上御道具衆をも被相付△中途茂聊尓無之様ニ可被申付由　上意ニ而候間、其御心得を以可被仰渡候、乍重言、彼之御本不相知候ハヽ、平田清右衛門被召出、委細御尋候而可然存候、圖書方よりも清右衛門迄状遣候間、其御心得可被成候、恐惶謹言、

慶安三年寅
卯月十一日

新納右衛門尉
久詮判

伊勢兵部
貞昭(◎ナシ)〔判〕

嶋津圓書
久通判

島津筑前殿
北郷佐渡殿
鎌田源左衛門殿
人〻御中

猶〻清右衛門方江者披状ニ仕遣候間、其趣を(◎も)以被成御覽御心得御尤存候、右之本大坂江参着次第隠岐様御蔵元より継飛脚ニ而爰元江被召寄筈ニ候、それほと御急用ニ而候間、以其御心得早〻被召上肝要ニ存候、以上、

（本文書ハ「旧記雑録追録一」三一三号文書ト同一文書ナルベシ）

122

猶〻出雲殿より茂預御音問◎〈候〉、御返書被遣可被給候、以上、

追而東鑑之儀ニ付度〻御断畏入候、何事茂期面上候、以上、

一昨日者御書物場ニ罷有隙入候砌ニ而早〻及御報候、先以今度之御下向乍御太儀目出度存候、然者御見せ候二冊◎〈致〉一覽候、さて〳〵慥成御證文共驚入候、殊ニ此方江可被遣置之由別而過分不淺候、何様御隙明之節以面談御礼可申達候、先年御越候御家之記録ニ而、貴久以來之儀今度之御書物ニ書入申候、恐惶謹言、

寛文十
三月廿九日　　春判

弘文院
春齋（林鵞峯）

嶋津圖書様
▽◎人〻御中△

（本文書ハ「旧記雜録追録一」一三一二号文書ト同一文書ナルベシ）

123

忠久承久三年六月改惟宗氏号藤原、法名得佛、其母丹後御局也、

弘安九年三月廿一日薨、實ニ丁亥年也、

末ニ歴代歌写載アリ、

124

寛永諸家系図傳　丙一

清和源氏

義家流

為義流

嶋津

嘉禄二年三月廿一日卒す、

享年四十八、法名徳佛

125

島津圖書文書

覚

※一近年日本通鑑㊟〈編〉集春齋・友見江被仰付候、然處ニ、去年江戸へ御供ニ而相詰候中、我等方へ春齋被為見廻候間、其禮ニ参候刻、右通鑑為見被申候、最早此方御家之儀も従頼朝薩摩・大隅・日向御給之由被為書候通被仰候而見せ被申候、左候而被申候ハ、前ニ酒井讃岐守殿より被仰、御家ニ有之吾妻鑑被写置候、今少見合入儀候間、本書を可差出由承候へ共、不奉得御意ニハ不罷成付、大方ニ返詞仕罷居候、今些御家之儀見せ申、通鑑ニ載▽㊟被成△候様ニと可申儀御座候、御望ニ而も

御家上代之趣通鑑抔載申儀不成事ニ候条、吾妻鑑御見せ候ハヽ、其序ニ此度通鑑ニ被書載候、(ヒ今)分書写被遣候様ニ可申入候、ケ様成好仕合者無御座候儀欤と存候事、

外ニ三ケ条略ス、

寛文十年
戌八月廿三日　　(島津)久通

(本文書ハ「旧記雑録追録一」一三三〇号文書ノ抄ナルベシ)

※(行間)

「久通譜、正保二年乙酉、應　公召十二月発宮城、三年丙戌三月十九日至江戸、四月十五日　公及久平公臨客舎、二十六日公帰国、久通留守、○一覧云、正保中羅山奉　命撰本朝史未成而止、寛文年中鵞峰又受　命、置史館於忍岡継其志、上始于　神武、下迄　後陽成慶長十五年」　六月十三日、林春斎補正世録記七巻賜之、

126

豫作与　余餘　叉事　犯執　号號　灵靈　与與　励勵
氣氣　死宛　早畢　弁辨　条條　欤歟　敍殺　差差
突突　閑閑　節節　椀垸　劔劒　虽雖　季年　囲圍
遺遺　躰體　迁遷　繹率　京京　触觸　所所　逐逐
拝束装　皈歸　奏奏　真眞　燭燭　旧舊　因因　朱等
副副　処處　勲勲　飛飛　幡播　衆衆　綸綸　属屬

127

穀穀　菅菅作　兆兆作

元禄十年丑日帳

二月三日雪天

一中神内蔵丞殿より御用之由申來候ニ付罷出候得者、豊前老より御用之由ニ而被為申上候処、御評定後之御座ニ可参由承参候云々、又序ニ而茂候間申上候、御書物蔵江有之候書本之東鑑ハ御家ニ傳來申候書ニて、板行之東鑑より一冊多御座候而、　忠久公御卒去之年月日等其冊ニ相見へたるニ而候、依之前ニ圖書久通老より林道春方江右之写被遣候而、板行被致東鑑脱漏与申候而、板行之書之外ニ壱冊有之事ニ御座候、右之書本之寫前ニ、道春よりニて候哉、又ハ稲葉美濃守殿より之御用ニて候哉、世鑑抄と申を一部御寫被遣たる儀有之候、吉井為兵衛其時東鑑寫ニ被仰付罷出候由申候、委細覚可罷居与存候、御家ニ傳り來申候東鑑ニ而嶋津家ニ有之候本与申儀ハ他所ニも知為申物ニて候處、去年燒失仕惜キ儀与存申候、然者美濃守殿御息丹波守様御方江欤、弘文院家江欤、御聞合被成御寫させ被成、彼

御方より證文御取被成候ハヽ、正本同前之儀候間、左様ニ被成度事と申上候得者、是も書付差上申候ハヽ、御相談可被成よし被仰候間、重而書付可差上事、

127の1

丑二月十二日

覚

書本東鑑一部

右御文庫へ御座候而、去年四月焼失仕候、惜キ御本ニ而御座候、是ハ定而前代より御家ニ傳り為申御本ニて可有之与存申候、其故ハ、従嘉禄元年安貞元年ニ至り三年之間之一冊板行之本ニハ無之候、右御本ニハ御座候つる此巻ニ社　御元祖忠久公御逝去之儀も相記御座候、ケ様ニ慥成東鑑抔ハ　頼朝公之　御子孫様故御所持被遊候与證據ニも罷成、御家弥以奥有事ニて御座候、然共御蔵へ為被入置迄ニ而ハ世人不存候故、天下ニ普御知らせ可被成との儀ニ而も御座候つる哉、前ニ林道春老へ写為被遣之由候、夫ハ右一冊計ニて候哉、又壱部惣様ニて御座候哉、存不申候、只今ハ右一冊計道春老跋を被書添、開板ニ而東鑑脱漏与申候て御座候、且又廿四五年前之儀ニて御座候ハん、稲葉美濃守様より世鏡抄与申書御家ニ御座候ハヽ、寫被遣度旨申來候處、坊ノ一乗院經蔵ノ内ニ在タル目録ヲハ寛永十一年甲戌八月抜書タル中ニ幸御文庫ニ御座候而寫被遣候、其時右東鑑之儀茂寫御世鏡抄三巻トアリ、是ナラン、所望之由ニ而、同時ニ寫為被遣様ニ承傳候ニ付、此内吉井為兵衛ニ申合見申候得者、為兵衛抔も其節被仰付候而東鑑寫調ニ罷出候由申候間、右両所之間ニ寫本可有御座候間、本書燒失之段被仰断、御寫させ被成候而、其上御家ニ相傳候正本を以被寫置候処、本書燒失之由候ニ付而被写遣候、本書ニ相替儀無之由證文を御取置被成候ハヽ、本書燒失不仕候同前ニて御座候、其儘ニて被召置候ハヽ、右之御本御家より出為申儀後代ニハ相知申間敷与存候ニ付、乍憚申上候、以上、

御記録所

丑二月十二日　　田中五右衛門〔国明〕

128

在山田氏

覚

一忠久御代之書物壱ツ　但巻本

一氏久御代之書物壱ツ　右同

一久豊御代之書物一ッ　右同
一矢開之書壱ッ　右同
一御犬追物之書一ッ　右同
一高氏之御判・道鑑ノ御判彼是書物六ッ
　但壱ッ次立候而有之候、
一薄墨之書物壱ッ
一高指朝臣之書物壱ッ　但八人之名判あり、
一三條殿御判之書物壱ッ
一氏久御判之書物壱ッ
一久豊御判之書物壱ッ
一頼朝御祝儀之書壱ッ
　合書物数十七、
　　午ノ八月十四日　　山田次郎右衛門尉　花押

129
昌寛
元禄十四年
一頼朝卿教書跋・御譜略序、林大学頭信篤被書進候御礼
　干鯛一折　昆布一折　御樽一荷　太平布拾疋　白銀五
　拾枚巳四月十日被遣、并太刀一腰　馬代銀壱枚田中五
　右衛門より進上、同五月廿一日、縮緬廿巻　干鯛一箱
　被遣候事、

130
京極関白記師実公　三　後二條関白記師通公記　六巻
四　知足院関白記忠實公
法性寺関白記忠通　猪隈関白記家実公
張紙
一　法成寺摂政記道長公　[二]京極関白記師実公
[三]後二条関白記師通公　[五]知足院関白記忠実公
仝　徳大寺相國記[七]岡屋関白記兼経公長元元年より
後中記葉室中納言　大納言顕頼卿記
仝
[四]法性寺関白記忠通　葉室顕頼ノ三弟中納言顕長卿記
顕頼ノ従弟中納言顕時卿記　猪隈関白記家実公建仁元より承元二迄

131
作者　五位
伊豆守源仲綱従三位頼政（子脱カ）千六　新千一
至安元二年

筑後守
惟宗廣言 日向守基言子 自永暦元年至壽永元年少監式部 千五 玉一

使常陸守
惟宗忠景 周防守忠綱子 今二 遺三 方五 玉五 才一 續後一 新千一

使豊後守
惟宗忠宗 常陸守 忠景子 方一 才一

号嶋津 使常陸介
惟宗忠秀 豊後守忠宗（子脱カ） 才一 續後一

嶋津民部大夫
惟宗忠貞 風一 新千一

六位

大隅國司 拾一

嶋津
惟宗（忠）景 忠綱子 續古一 ―― 忠宗 新後一 ―― 忠秀 續千一

嶋津下野入道 嶋津惣領 上総入道ハ鑑貞久父也、
道義 風 同一

行蓮 民部入道 俗名惟宗良俊 方一 才一 新千一

定覚 宗八左ヱ門入道 称廣言流 方一

民部内侍 金一

二条院内侍三河 加賀守為業女 千三 風三 新一 玉一

宜秋門院丹後 散位源頼行女 千三 遺二 新九 方四 勅五 玉五 續二 方一

三河内侍 續二 玉一 新千二

132

政佐

鎌田小藤二　修理亮

當頼朝公之治世以薩隅日三州島津庄畀忠久主時、三州御家人等可為　忠久主人云々、因茲忠久主文治二年丙午六月一日発駕関東、八月一日下着薩广山門院、政佐供奉、

朝景初奉仕于　頼朝公、賜相州酒勾庄称酒勾、終奉仕于　忠久主、　公補薩隅日守護職、文治二年八月一日、下向于薩州山門院、子景貞亦従下着ス、

133

在曽於郡士後藤五右衛門

鎌足 ―― 中三世 ―― 鷲取 ―― 藤嗣 ―― 十一世 ―― 政明 ―― 政時 ―― 後藤二良 ―― 基明

先父死去、

後藤太 右大将家御代始 ―― 助明 ―― 重明

墓崎安堵 ―― 宗明

政章 ―― 後藤筑後守

政章 同名
八條院御時冷泉大納言家奉公之時、日向州
國富庄惣奉行給テ国富卿(郷カ)下着、其時諸縣八
代庄司師光ムコニ成、政章子息章子(氏カ)始テ八
代名讓得テ知行国富号筑後四良章氏、
章氏 国富号後藤、筑後四郎八代、
章俊 母河崎妻世子大夫トモ云、
呪師田野大夫手ヨリ得テ讓始知行、
章宗 号呪師田国富三郎、
章光 八代二郎
章永 八代国富二良ト云々、

134 在有馬勘助

摂州有馬之平氏系圖

忠久将軍三ケ国ニ御下向之御供之事

文治二年丙午六月一日ニ関東ヲ立テ、同八月廿三日ニ薩刄山門院ニ御下着候畢、於代々　嶋津殿御家ヲ可守有馬申代々ニ可傳ト云々、

135 正文在曽於郡士後藤五右ヱ門

下日向・大隅・薩摩等御家人所、可令早随土持冠者榮妙催各参進事、本ハ一行、

右三箇國御家人等随彼榮妙之催、國中携弓箭之輩不論庄公、不云老弱、不日可令参上之状所仰如件、者彼國〻御家人宜承知、悉之故候、

元暦元年十二月　日

追討使参河守源朝臣在御判

口裏ニアリ御教書案

136

為奥州追討并京都守護可催上由就今年三月十四日御教書先度觸申候處、于今遅〻無勿躰候、急企上洛可被勤仕、若無其儀者可注申候条(ママ)、恐〻謹言、

卯月十三日　　田部　在判

八代二郎殿

口裏ニアリ　御教書案

137

奥入料ニ六月内可令参上、

鎌倉殿給候(仰カ)也、兼又嶋津御庄官之外残の御家人の人

〳〵をは京の守護料ニ可催上之由御定候也、早存其旨、各可令觸催給也、仍於(マヽ)披見廻文書進之候、急〻御出立候て六月内可令参給候也、今明罷下候へは委旨不申候、下向之時可令申候、恐〻謹言、

三月十四日　　藤原在判

土持冠者殿

口裏ニアリ
御奉書案

とゐとのゝ状とかや至候(ママ)、

138

東鑑、元暦二年乙巳二月十四日戊辰、参州日來在周防國之時、武衛被仰遣云、令談于土肥二郎・梶原平三、可召九國勢、就之若見帰伏之形勢者、可入九州、不然者与鎮西不可好合戦、直渡四国、可攻平家云〻、

139

寫在二三巻　追仰

又件領内於他領相交者　件所領内壱所者可宛給僧覺弁者

不能知行者

薩摩國住人阿多四郎宣澄所領谷山郡・伊作郡・日置南郷・同北郷・新御領(ナシ)〔等ヵ〕名田等事、彼宣澄者平家謀反之時張本其一也、仍令停止件職了、早可令知行地頭職者、依仰執達如件、

建久三年十月廿二日　　平在判(盛時)
民部丞在判(二階堂行政)

宗兵衛尉殿　忠久

（本文書ハ「旧記雑録前編一」一五八号文書ト同一文書ナルベシ）

140

五番箱　壱竿

紙張ニて
壬申虫干見得す、糺得候上可納笘、

一嶋津家正統之御系圖　二巻

内壱巻者新田・足利等之流を繋加、

張帋
申年虫干之節不相見得、可糺、

一同草案　　二通

内壱通者壱枚物、壱通者弐枚物、

右弐行壱結坊津一乗院經蔵之内ニ右之品有之候処ニ、元禄十一年五月(正也)被差上候ニ付、御文書方江相納ル也、右目録之五番箱壱竿と有之下ニ張紙左之通、

五番箱之内ニ、御任官ニ付書付六通と相記、六通壱結ニいたし入付有之候得共、番付無之候故何様共不相分候、已後紛得候上番付等可致也、

文化九壬申七月九日

御文書入箱弐拾弐番

一古系図内壱巻ハ紺表紙　七巻

享保三年戌九月十一日

一番戸棚御長持入附目録　相良角兵衛

江戸置付之品

一忠久公并忠時公二代古系圖・越前嶋津系圖写一冊

包紙ニ張帋

一島津家正統之御系圖弐巻

内壱巻者新田・足利等之流を繋加、

一同草案弐通

但　壱通ハ壱枚物
　　壱通ハ弐枚物

右者自前代坊津一乗院經蔵ニ有之候処、去ゝ年肥後仁(盛香)右衛門彼表文書系図見分として被差廻候節見當候而、當座江文書と同被差越候を、此節奉備　綱貴公之御覧候処、一乗院へ必有之筈之物ニ而茂無之、御系圖行散候而者不可然候間、差上候得与御意候ニ付、其旨申渡被差上候、是ハ御用ニ立物ニてハ無之候へ共、右之思召ニ而被召上候、御記録所方へ納置可申旨御意候ニ付、此四番箱へ入置也、田中五右衛門(国明)存、

元禄十一年己卯正月廿五日

一右二巻之内壱巻ハ新田・足利之流を繋加左之通、

源氏系圖　口裏一乗院

貞観元
人皇五十六代
清和天皇と書出し、　忠隆　又六郎
興岳
御舎弟
忠兼

一同壱巻ハ口裏廿九之内　坊津一乗院

嶋津御系圖

清和天皇五十六代王子十四人と朱ニ而書出し、
高倉院ニ忠久似サセ玉フトテ御養子有リ梟リ抔見ヘテ、
尾ニ

立久（陸奥守　法名節山）――忠昌　陸奥守

一右弐通ノ内壱通ハ坊津一乗院ト張紙アリテ一枚物、

久經
忠宗　下野守　法名道義

十代　立久――修理亮　陸奥守　法名節山

十一代　忠昌　又三郎殿

一同弐枚物　張帋ハ剝タレトモ左之通、

口裏　嶋津忠久□

源氏将軍十二人　上五人　下七人□□

仁王五十六代
清和第六孫ト書出し、

久豊（法名存忠）――修理亮――尊久　又三郎

尾ニ
于時應永廿六八月廿二夜子剋計、向燈前老後ノ恥ヲカヘリミス如鳥跡令書所了（写カ）、外　悲哉染斟酌シテ、
且ハ世上ノ儀ニ絶トシテ、又勇進テ白帋ヲ□コサン
レハ、悪筆ト云トモ嗚呼□　面皮厚三尺、雖然
一河ノ流レ一根藤同末葉荷ト思、暫忘　□（染カ）一毛如此
云ヘ、努ヘ　他一見蜜（マヽ）箱底先籠候、

按宗久三弟久俊――實久――　永俊法師草

秀久（豊後守）――民部太輔仲久法名永俊也、二十八出家、

弐拾弐番箱入古系圖七巻之内ニ可有之、左之通、

一口裏張紙

御家之系圖少ヘ七ツノ内

大皮籠ヨリ出ル、朱ニテ

清和天皇

武久　陸奥守

二
一同張帋

御系圖一部　日州衆柚木崎丹後守より被召上候、但嶋津圖書頭殿より白石仲兵衛尉を以御渡被成候、

七ツノ内

人王五十三代

淳和天皇　天長元

忠昌　陸奥守修理大夫又三郎

忠治

忠隆

忠義

初武久

一三　同張帋

御系圖一部　七ツノ内

平田主殿助請取ヨリ出、

仁王五十六代　貴久まで

一四　口裏張帋

御系圖一巻文箱より出、七ツ之内

人皇五十六代　清和天皇　義久　天文二年癸巳二月九日御誕生也、

一五　裏小張帋　朱ニテ　廿一　七ツノ内

桓武天皇

勝久――益房丸

貴久　三郎左ヱ門尉　道号大中

義久

忠平又四郎　兵庫頭

歳久又六郎　左ヱ門尉

家久又七　中務太輔

按、承應二癸巳六月廿七日、平田清右衛門古系図七巻内相州系図ト被書候ハ此ナルヘシ、

一六　口裏張帋

寛永十九年壬午七月晦日

此御系圖横川衆中猿渡弥八郎所持候を猿渡新介殿へ被持來候由ニて、下野守みせさせられ候、かやうなる物は脇ニ置候者如何ニ候由各被申候ニ付、御物ニ加へ置申候、弥八郎へ者鳥目百疋任先例遣候、使野村大学助殿、

又小張帋　横川より参候、朱ニテうら打濟、　猿渡新介殿御取成之由候、

御系圖一部　七ツ之内

人皇第五十六代文徳第四王子云々

家久まて

元禄十六年未二月比
一平田清右衛門より被差出候古帳之内ニ左之通、

癸巳閏六月廿七日
一古系圖七巻内　壱ツ　相州系圖
　　壱ツ　阿蘇谷殿与市來殿争論、

右通見得候者、承應二年癸巳閏六月ニ有紛間敷候、

142
川上上野久尚系圖

嶋津者継圖源家也、頼朝被為三男故如此候、雖然八文字殿一節奉養候故ニ先者惟宗氏也、其後近衛殿御養子故藤原也、又承久之比光明峰寺殿御子天下被為関白、其時實基公之御養子トシテ藤原氏給ラセ給ケル、然者両度也、御ヱボシ親ハ畠山秩父平重忠也、然モ（ママ）重忠之御聟トシテ建久七季丙辰三ケ國へ御下向也、又丹後之局者比城藤四郎ノ姉也、惟宗卿之御娘也、其故也、（道家ニテ、玉藻ノ撰者也、）

143
○台記　宇治左大臣頼長公
○玉海　月輪摂政兼實公
○吉記　吉田大納言経房卿
○王藻（玉）　光明峯寺關白道家公
○明月記　京極中納言定家卿
御座源平盛衰記
○参考源平盛衰記
○参考保元平治物語
　長門本平家物語
御座東鑑
　日本史
盈
一豊州家軍記　瀬戸口
一伊集院忠棟上洛日記自天正四年二月二日至八月十二日

144の1
新納五左衛門文書

一代〻御元服之事、三ケ國之各御存知之方有へく候条、巨細不及記蔵（マヽ）、此儀にてハ難述短筆子細候、

一左折之烏帽子之事、御當家御被官衆者何も可為右折候、道安ハ川上十郎左ヱ門尉義久ニテ、永正十八年七月十四日死去也、時忠勝年三十八ノ時也、但河上道安・山田大年参會之時此条〻物沙汰候シ、御當家みぬいの菊とちをとかれ候上ハ、御被官衆者被入肩候人〻皆左折を被着候てもくるしかるましきニてな

とゝ被申候キ、又其家〻折様共さたまり候する方家〻之折之烏帽子を可被着候、其謂者、於九州者大友折之烏帽子とて候、公方様之御前ニてハ皆家〻之烏帽子を被着候、追其法者　嶋津殿御前にても家〻之折を可被着事尤ニ候也、嶋津折申候者御所折之烏帽子同折にて候、

道安門人也、近江守　栖嵐斎　延徳三辛亥生、天文十八年卒、五十九、

右新納忠勝筆記ニあり、外七ケ条略す、

144の2

川上義久入道

寛正六年三月五日　忠國公授手簡傳義久弓馬書、

大永元年辛巳七月十四日卒、八十四、

145

- 敦満　名大夫　大椽（掾カ）　去建保元年五月二日、三浦和田左ヱ門尉義盛追討之時、義盛追討之時、義盛子息新左ヱ門尉以下敵両三人射取之、大事疵数ケ所負之間、同三日死去了、
- 安弁　法乗坊　霧島座主
- 敦久　大隅国税所職、押領職云〻、号税所兵衛、薩広国満家院郡司職、同院内厚智山座主職、
- 祐満

- 義祐　大介　税所三郎
  - 敦胤　大介兼税所

右代〻厚智山座主職、

146の1

宝永六年日帳

尚〻書付之留ハ無御座候へとも、粗御覚も御座候ハヽ、其分ニ而も御書付候而御遣被成度存候、以上、

鎌倉ニ而何与欤申候在所之内ニ、　忠久様御廟を神位ニ奉崇、于今郷人共別而致尊敬、祭等も仕候而踊なとも興行仕候躰之事有之候由、其儀、江戸町人菱や清左衛門与申者盲人ニ罷成、近年相州大山邊ニ引込、其者承傳候儀有之候、委細ニ書付赤松甚右衛門殿江差出、家村平八殿御取次ニ而赤松氏為被差出之由候、此書付此節御用付而相糺候へとも、有所相知不申候、尤書留候所も見得不申候、平八殿御取次之事候へハ、いか様　御家督以後之事ニ而可有御座候、仁右衛門殿（肥後盛雄）御在旅中被聞召候儀共ハ無御座候哉、各様へ尋越候様ニ与帯刀殿（島津）被仰付候間、如此御座候、追而御返答可被仰聞候、於此方ハ早左衛門殿（市来家年）へ

も御尋候へとも、御記録方江不相知之由御申候、以上、
宝永五ナラン
十二月廿二日　　大山平右衛門
田中五右衛門殿
肥後二右衛門殿

右大山平右衛門より之書状諸座問合之紙袋ニ入付置候事、

146の2

十二月廿二日之御状正月十四日ニ相届、得其意候、然者於鎌倉　忠久公御廟奉崇神位、郷人共別而致尊敬、祭祀等有之候由、江戸町人菱屋清左衛門与申者承傳候儀有之、先年赤松甚右衛門殿江右之趣書付差出、右書付家村平八殿御取次ニて為被差出之由候、右書付御用ニ付而御紛候へとも、有所相知不申候、依之我〻共江御尋之趣委細承知仕候、右　忠久公御神廟鎌倉へ奉崇候儀不承候、尤菱屋清左衛門差出候書付當座へ無御座、右之趣初而御紙面ニ而得其意申候、宝永四年丁亥去〻年二右衛門盛雄事相承院法華堂別當良琛也、へ参會仕候節被為咄候者、法華堂ノ後ノ山ノ上ニアリ、頼朝公御廟所より東之方江嶋津殿御先祖之御廟所与申傳有之、夫より又東之方法華堂ノ東隣也、東御門与申所江嶋津殿（ママ）屋敷御座候由、申傳候通相承院より承置申候、此外忠久公被崇御神位候儀承不申候、右之通ニ御座候条、宜様ニ御申頼存候、恐惶謹言、
宝永六年
二月二日　　肥後二右衛門盛雄判
田中五右衛門國明判
大山平右衛門殿

右大山平右衛門へ之書状二月六日平田傳右衛門御使便ニ頼越候事、

147

新編鎌倉志巻之一

○筋替橋　附畠山重忠屋敷鎌倉十橋

筋替橋（チカヘ）ハ雪下ヨリ大倉村へ出ル道ノ橋ナリ、※1鎌倉ノ十橋云〻、筋替橋ノ西北ヲ畠山重忠カ屋敷ノ跡ト云、東鑑ニ、正治元年五月七日、醫師時長昨日京都ヨリ参着ス、今日掃部頭カ亀カ谷ノ家ヨリ畠山次郎重忠ガ南御門ノ宅（ニカ）移住ス、是近々ニ候ゼシメ、姫君ノ御病悩ヲ療治シ奉ランガ為ナリトアリ、

※1（行間）

「仝七、畠山重保石塔ハ由比濱ニアル五輪ヲ云フ、明徳四癸酉霜月日大願主道友ト切付テアリ云々、後人重保カ為ニ建タルカ云々、又此石塔ノ西ノ方ヲ畠山屋敷ト云、是モ重保カ旧宅ナラン、里俗或ハ畠山重忠カ石塔ト指示シ、又重忠カ屋敷ナリト云傳フ、恐クハ非ナラン、重忠カ屋敷ハ筋替橋ノ西北ニアリ云々」

仝二

○頼朝屋敷ハ鳥合原ノ東也、鳥合原ハ八幡宮ノ東ノ鳥居ノ外ノ畠也、東鑑ニ治承四年云々、同十二月十二日上總介廣常カ宅ヨリ新造ノ御亭ニ御移徙ト有ハ此所也、廣八町四方バカリ云々、南ハ行路、西ハ大道、東ニ河アリ、北ニ鶴岡、南ニ海水ヲ湛ト云々、

○　法華堂　附頼朝并義時墓

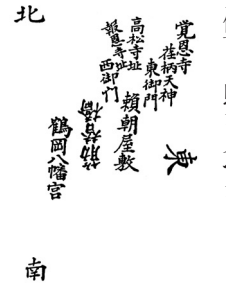
法華堂ハ西御門（ニシミカト）ノ東ノ岡ナリ、相傳頼朝持佛堂ノ名也、頼朝墓ハ法華堂ノ後ノ山ノ上ニアリ、

※2 ○西御門ハ法華堂ノ西ノ廣キ谷也、頼朝卿ノ時西門有シ跡ナリ、東御門ト云所モアリ、南北ノ門モアリ、東鑑ニ見ヘタリ、今其跡不知、南門ハ畠山屋敷ヲ以テ考レバ大倉村ノ邊ナラン、北門ハ和田合戦ノ時尼御臺所并實朝ノ御臺所等營中ヲ去リ北（ママ）門ヨリ鶴岡ノ別當坊ヘ渡御シ給フトアリ、

※2（行間）

「報恩寺ノ旧跡ハ西御門ノ西ノ谷ニアリ、又其西南ニ保壽院ノ旧跡アリ、高松寺ハ報恩ノ（ママ）向ヒ東北ノ谷ニテ西御門ノ内ナリ」

○東御門（ヒカシミカト）ハ法華堂ノ東隣ナリ、頼朝卿ノ時東門アリト云フ、西御門ノ條下ト照シ見ヘシ、



148

一拙者より被召上候御文書拾通内壱通者、嘉禄三年丁亥六月十八日、於鎌倉　忠久公御逝去之日御自筆ニ為被遊与申傳候御當國御守護職御譲状壱通、

149

戌
十一月十四日
御記録所

在藤井休右衛門

人皇五十六代　九歳天安二年戊刁御即位、
清和天皇――――――

頼家
實朝
島津判官　建久七年八月一日十八歳三ケ国下向、
治承四年己亥忠久誕生、
忠久
法名得佛　三ケ国ヱ御下向御歳十
八歳ト云々、
中世略、

忠治　又三郎　延徳元年己酉正月十七日御生、永正五年戊
辰御年廿歳ヨリ永正十二季マテ八年治国、同年乙亥八
月廿五日廿七歳御遠行アル也、道号蘭窓　法名津友
母儀大友正親嫡女、

亀山三郎兵衛

忠隆　又六郎　明応六年丁巳御誕生、永正十二天乙亥十九
歳ヨリ永正十六年己卯歳マテ五年治國、同年己卯四月
四日廿三歳御死去、

嶋津忠久公日向・大隅・薩摩三ケ國致拜領、建久七年
八月一日三ケ国ヱ御下向、十八歳ナリ、永正十二天迄
三百廿七年也、
分国者七ケ国、越前・若狭・伊勢・信濃・薩广・
大隅・日向、
源朝臣頼朝之三男、治承四年己亥忠久誕生、永正十二
天迄三百四十五年也、

比企尼
丹後局
忠久公
忠時公
判官能員
若狭局
頼家妾
一幡君
竹御所
頼経御臺所

在都城相馬藤左ヱ門

文永六八生、貞治二七卒、
上総介　法名道鑑　観應三三死去、
（島津忠氏没年カ）

貞久
貞久御代大載小貳三ヶ国下、緩怠ヲ致候少貳ヲ責、還テ六ヶ国責上、小貳ヲ退云々、
御代大友殿ノ姫也、高崎ハ大友殿舎弟也、腰ソヘ左役、小當良ハ右ノ腰ソヘ、母三池道智女、

頼久　河上上野守
法名大圓道覚

宗久　播摩国赤松ノ住縁、十九ニテ死去、
元亨二誕生、暦応三正月廿四卒、

○師久　法名定山道貞
上総介　母大友女、正中二八十生、永和二三廿卒、
大友兵部親張女云々、

伊久　上総守　法名久哲道観
伊久御代父子弓箭始ル、忠明ハ甥ニ守護ヲ渡、故同伊久仰ニ、塩房守護渡サラヘト仰ケルニ仍父子中不安ニナリ候、去程氏久頼兵乱ヲ取起、元久・久豊・久父子（ママ）

久安　三郎左ヱ門尉
碇山侯也、

○氏久　（ママ）総州

嘉暦三一四十生、
嘉慶元五四卒、

光久

氏忠　但馬守

三人同心有、塩房殿抱取給同伊久御同心有リ、渋當（谷カ）・伊東ハ塩房殿ニ致敵ヲ忠明ヨリ従山東之事伊東ニ使、
貞和三二朔生、應永十四四卒、春秋六十一、

守久　播磨守　大夫判官
従五位下　法名義山道仁

久世　法名大義道椿
法名維馨久徳
犬太郎丸

久照北殿　法名道言
初号忠明、山城守　應安二年己酉八月三日誕生、
應永十五年戊子正月三日於薩川内平佐安之城自害、春秋四十、号慈雲院殿、

○忠朝　総州　法名梅巖道真
應安二八三生、應永十五正三卒、
初忠明　彦二郎
従五下　山城守

151

應安四年辛亥三月八日誕生、永享五年癸丑十月十二日卒、年（ママ）、号慈雲寺、又長樂寺、

○忠氏　三郎左ヱ門尉　彦二郎　山城守
明徳二生、文安二一九卒、法名真翁了性　号瑞龍寺、

干扇

林幸庵号上総禅尼、

圓通菴第三代之住持

廣済寺住持
繁蔵主　還俗忠長
母二階堂、法名了嶽常知

伊忠彦三郎　法名義翁道忠
母同、赤松一乱之時戦死、

忠成始碇山、号相馬、
永亨（享）十一正、永正八四卒、法名久嶽良椿

○元久　道号恕翁　福昌寺
忠翁和尚

女子一人

○久豊修理亮
道号義天

基通與　大祖盟為父子賜姓藤原、由是下文凡書藤原始自此時、

152

安倍泰親承家學善占、　法皇之幽于鳥羽殿也、適有鼬鳴、命占之、曰、三日内當有慶、後當有憂、　法皇未信、清盛時弛防禁、乃意始安、既而仁（マヽ）以起兵、不克敗死、皆服其術、見泰親傳、

153

百錬抄

壽永二年

十二月二日、平家領義仲可惣領之由被下院廳下文、

十日、可追討頼朝之由被成院廳下文、是依義仲申請、

仝文治五年

七月戊寅（廿日脱カ）、上西門院崩、春秋六十四、

154

山槐記、治承四年五月十五日丙寅天晴、亥剋自京下人走来云、高倉宮一院御子、故高倉三位腹、新院御兄也、有配流事云々、

仝元暦元年八月十二日戊辰天陰、午後雨、頃之止、九八月十日丙寅、今夜検非違使義經召寄出羽守信兼男三人、有示子細支之郎判官義経發向伊勢国、為伐出羽守信兼云々、一昨信間、件三人或自殺、或被切殺云々、兼男三人殺害、依此事云々、

155

伊集院善太夫所蔵系圖作

弘安九年丁亥三月二十一日薨、
又一本作弘安九月廿一日薨、實丁亥年也、
寛永諸家系圖曰、嘉禄二年三月廿一日卒、享年四十八、
法名徳佛、
持明夫人所寶襲系図、公則書福宇征夷将軍薨于弘安九年三月廿一日、實丁亥年也、
其他古系圖公諱日同之者有二本、且寛永諸家圖亦書公卒于嘉禄二年三月二十一日、享年四十八、（建久七八月一日十八歳下向薩云、）

156
一忠久十八歳之御時西国之将軍ト成給支、白川法皇御院宣ニヨリ後征夷将軍ト号ス、殊ニ高倉院ニ忠久似サセ玉フトテ御養子有リ梟リ、（宮也、）
右坊津一乗院ノ經蔵ニ在タル古御系圖ニアリ、右ノ十八歳ハ元暦元年甲辰正月十四日木曾義仲征夷大将軍ニ任セラレシ年ニ當レリ、又加世田若松氏古系圖ニ（衍カ）ニモ、忠久公ノ傳ニ、白河皇御時院宣ニテ高蔵院宮西国ノ征夷将軍ト示給、十八歳成給御時ナリトアリ、同ク元暦元年ニ當ル、

157
正治元年
法印権大僧都隆暁　勝宝院
正月十三日大僧都并長者六十八宣下、依為上臈、超印建性為二長者、
久四年七月廿七日加任六十宣下、此年亦六十八、
正治二年
法印權大僧都隆暁
六月十五日依所勞辞長者并大僧都、寛暁入室受法灌頂資、太皇大后宮權亮源俊隆息、嘉應三年五月廿五日叙法橋、東寺修造功、承安二年六月廿六日叙法眼、（三月八日長者權僧正禎喜補仁和寺円教別當申、）
前大僧正禎喜建春門院御祈、孔雀經法賞譲、建久五年五月廿二日轉法印（御祈勞、）建仁三年五月十九日御祈賞、以定豪法橋叙法眼、元久三年二月一日卒、七十二、（頭注）「保延元乙卯生」（丙寅）
求拜堂、所司初参無之、（未カ）

158
玉海一
仁安二年丁亥正月至十二月
十日癸亥、今日摂政献（新）所移徙也云々、
仝二

仁安三年戊子正月

一日甲子天陰、終日甚雨、欲出之間(仕脱カ)、聊有相障叉、不出(仕脱カ)、無院并殿下拜禮云々、

159

山槐記

治承二年正月十七日壬子天晴、午刻着直衣冠参仁和寺御室(本)御所(木寺)云云、御室有御對面、母儀(高倉三位)去年三月被令失、御服之由也、然而令着惟(椎)鈍色給、不令着服給欤、故建春院(平時信女)有御猶子儀、崩御之時令着御服給也、頃之退出、(門脱カ)(安元二年七月八日也、)

160

玉海三

嘉應元年己丑

正月一日、未四點、参女院御所、次参院(法住寺殿)

十二月廿三日甲辰、陰晴不定、時々小雪云々、

廿九日庚戌、以使訪時忠・信範等、

嘉應二年庚寅

正月大

一日壬子、陰晴屢變、時々小雪、寅刻拜天地四方如恒、

161

吉記　治承五年三月廿三日己亥

奏

除目事　申弾正忠、

大学少允惟宗孝親(伊勢初斎宮并造賀茂舎屋功)

申左右兵衛尉、

平重能(眞言院曼荼羅并御斎會功)

162

忠季(為頼朝乳母子)

津々見右衛門次郎　次郎兵衛

○建久七年、先是稲庭權頭時定(建仁二年二月八日死于西津)、為若狭国下司職、至是八月、頼朝罷時定職惟賜西津庄、而餘皆以忠季為守護職、於是挙阿弥陀坊為今富公文、(至建仁三年八月三日、)

○建仁三年十二月廿三日、割十六所於遠敷・三方二郡之地、(九月廿四日領今富名、)賜之藤民部大夫行光、(二階堂行政子、為政所執事、左兵衛尉信濃前司)(至八月廿八日領今富名、)(越前房為代官、定静房為公文、)

○元久元年八月廿九日、還賜忠季皆如故、

○建仁三年十二月廿二日、割九所於遠敷郡賜左兵衛尉藤原家長、既而未幾還補忠季如初、(年紀不傳、)忠季乃

挙越中藤内光憲為税所代、後以古津三郎時通・藤内十郎信廣・右馬大夫時文・古津新太郎時経代之、又擧辻平四郎為公文、後以静定房代之、

○承久三年六月十四日迄領之、（此忠季後日出家法名、）

従泰時戦于宇治、手斬三人、（若狭兵衛入道）済河戦死、

若狭次郎右衛門入道

忠時

多田三郎兵衛尉（忠季入道嫡子）

○承久三年七月襲父職、以古津新太郎時經為代官、以了京為公文、

○寛喜元年忠時殺、○二年六月収其職邑而税所今富、

※1 ○三年十二月、係武蔵守経時領、乃以忠時母若狭尼（御前）為御代官、是忠季後家也、尼又以池田六郎尚

※2 頼為代官、了京公文如故、

※1（行間）

「経時泰時長子、寛元（元カ）年除正五位下為武蔵守、四年以疾

譲執権職於弟時頼剃髪尋卒」

※2（行間）

「○寛元四年相模守時頼襲職、若狭尼為代官如故」

足利高経為越前守護、建武□（子義将為管領、為若狭守護、）

範忠（正平十六年、義詮以石橋和義為若狭守護、賜今富庄、）

三方弾正左ヱ門尉　山城守　入道常忻

○應永十三年、一色修理大夫滿範（法名道範）補守護職、十二月十八日、以範忠為守護代、以長法寺民部丞為代官、

○十六年正月六日道範卒、子一色五郎義範襲職、時十歳、此日範忠削髪、法名常忻、居守護代如故、代官民部丞亦削髪、更号道圭、十一月、義範任兵部少輔、範忠移守護代宿所於鹽濱若王寺前、

○二十一年二月十八日、常忻為税所今富代官、

○二十三年七月廿八日、三方範忠領西津庄、乃遣代（八月十二日）官布施大炊助入部治之、

○二十九年九月廿八日、有本社迁宮式、守護代三方山城入道莅焉、

修理亮　常忻弟

○二十八年七月四日、罷長法寺職、十日、以常忻弟
為税所今富代官職、
○三十年十二月、三方殿遣伊崎中務丞為税所今富公
文、

163 正文在島津圖書久晃

一若狭嶋津与申ハ比企判官義員妹腹忠久一腹、雖然忠久ハ頼朝ノ子、忠季ハ、八文字民部太輔ニ従頼朝彼母ヲ給、其後為出來子也、氏ハ惟宗、承久兵乱之時親子宇治川ニ而戦死云々、其子孫三方名乗、若狭ニ有之ト申傳也、

一越前嶋津ハ云々、

一信濃神代郷云々、

右聞合候而可預候、以上、

七月四日　　嶋津圖書頭

深栖左門殿

164

覚

一内藤新兵衛判形之書物一通

一若州三方郡之内井崎村と申所ニ九左衛門と申者御座候、此者五代以前迄ハ嶋津と名乗申候、其後おとろへ申候故、二三代ハ三方と名乗、井崎と名乗申候由、道政と申候ハ五代以前之仁、九左衛門先祖之由、

一九左衛門尉今程者高百石計之所を作仕百姓ニ而御座候、年比六拾計ニ見え申候、子共拾人計持申候由、以上、

五月十二日

165

先年より山田太郎左衛門尉方嶋津道正申(旧結)公事之儀、宗庵御時雖有落居、一向御糺明不届之由歎申之間、於口状者不及分別之条、誓断之儀申付候處、山田方ハ依有失常倉分・倉所(旧分)〔共ニ〕両所共ニ如前々嶋津道正跡嶋津八郎左衛門尉仁宛行者也、年貢・諸公事無懈怠致其沙汰、永可有知行之状、如件、

大永八年八月十九日　　内藤新兵衛尉

光廣書判

（本文書ハ「旧記雑録附録二」一一八九号文書ト同一文書ナルベシ）

伊達行朝、陸奥人、常陸介藤原時長後也、時長仕源頼朝、食常陸伊佐地、有女曰大進局、為頼朝所幸、生一男、以故時長得親近、薙髪曰念西、文治中従頼朝討藤原泰衡于陸奥、軍次熱借山、時長與子為宗等先登、敗伊達郡敵塁、為宗獲信夫庄司、陸奥平、頼朝以伊達郡與時長、因氏焉、

小田治久、初名高知、八田知家七世之孫也、父貞知、

※ 常陸介、世食常陸小田地、為著姓云々、治久家世相傳、始祖知家源義朝庶子、為藤原宗綱所養、分脉、冒藤原氏云々、

※（行間）「註

本書曰、知家本義朝子、為宗綱養子、未知是非、宍戸系圖曰、知家母宗綱子朝綱女、称八田局、平治之乱知家匿宗綱家、宗綱養為子、然保元物語有下野人八田四郎、据此知家既在下野可知、而東鑑云、宗綱女嫁小山政光、為頼朝乳母、疑系圖由此致誤、故不取」

大友能直嘗為中原親能所子養、後復本姓云々、頼朝授豊前・豊後守護、為鎮西奉行、子孫襲為守護奉行、

石橋和義、参河守云々、正平十六年、足利義詮授以若狭守護、若州守護次第、與今富荘為食邑、今富庄守護領主次第、

建徳二年、足利義滿以貞世為鎮西探題、撃菊池武光、以兵寡不得進、義滿命大内義弘・吉川経見授之、與共進肥後、與武政戦于水島、不利、又與大友親世・大内義弘等、将兵数千攻菊池武朝、大戦託間原、殺傷頗多、會将軍宮将兵奄至、貞世敗退、武朝申状、天授元年、與少貳冬資戦于肥後斬之、

167の1

元禄十三年庚辰正月十二日綱貴発国、十五日乗船京泊、二十一日発船、二月十九日着船大坂、

同年庚辰、島津主計忠雄初久年発江戸、三月四日至京都、取謁于殿下之諸大夫進藤修理亮・今大路治部少輔、於是書　近衛基通公以來島津家之由致而達之、両輩取之乃備于　殿下之御覧、其事見于左、

167の2

三月朔日主計事伏見江致参着、翌二日致出京、伊集院主水江申談、　近衛様御家老進藤修理亮事主計兼而近付ニ而候故、緩〻出會度旨申遣、折節飯隈山先達蓮光院於旅宿今四日之夜致出會候、修理同役今大路治部少輔茂修理同道ニ而被参候ニ付緩〻出會、何となく　此御方様御元祖忠久様を　近衛基通公御吹挙候与申傳候御由緒を語候得者、右躰之儀如何ニ茂　御所ニ而も承傳申事ニ而候、然共委キ儀者始而承候、是ハ承捨ニ者難致事ニ候条、右之趣書付候而くれ候得かしと右両人被申候ニ付、御由緒書調致懐中居候付、則遣候得者得与見被申、此書付者早〻　両公江可掛御目由被申候、依所望右両人江遣候書付左記、

（本文書ハ「旧記雑録追録一」七〇四号文書ノ一部ナルベシ）

○一

裏張紙ニ朱　宝永四年亥八月写済　児玉權右衛門

一筆啓上仕候、　先以　中将様御道中益御機嫌能最早疾被遊御参府、且又　上〻様方弥御安康可被為成御座与旁以恐悦奉存候、然者拙者事京都江少〻御用之儀茂有之、将又三日程之御暇被下置候付、出京仕候、去年於

167の3

其御地御繪圖之儀付而御家之御由緒書付差出候内ニ、忠久様於住吉御誕生之節　近衛様御社参、段〻御懇之訳有之候、就夫御舊好之一筋今以不相替旨書出置申候、此儀　近衛様御方江何様ニ御家傳有之候哉承置度儀与内〻存候處ニ、去冬　近衛様御家老進藤修理亮其御地江被罷下候付、幸之儀与存近付ニ成置申候、依之此節京都ニ而出會申、何与なく可承合与存候処ニ、飯隈山蓮光院入峯付而致在京候故、修理亮・今大路治部少輔を蓮光院より旅宿江招候事ニ仕、私儀不圖出會申、緩〻与語申候内、右御由緒之儀申出候得者、あなた◎〈へ〉も右之趣申傳候儀無別条候、然共拙者物語仕候通ニ委細之儀者不承置候、いケ様　近衛様御家之御記ニ者記可有之与存候、此御由緒之儀者　御家門御父子様共ニ折節御噂被遊事候得者、少も別條有儀ニ而者無之候得共、右之段〻申上、御序之節御記を被考、弥御由緒を慥ニ仕置度事ニ存候由ニ而、両人以之外悦被申、左候而、私物語仕候趣書付遣候へがしと所望ニ而候故、書付候而遣申候処ニ、　関白様御父◎〈子〉様江被懸御目候得者、御感心不浅、御閑隙之節御記被御覧合可被仰聞旨　御